雅言集覧

837
13
79

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79

ガラス使用

837-79

雅言集覧巻之八

○礼の部

れい 例。借イフ今通シツケタル例ノ

さるを 然れどもて下のみ例もて応ふるのみ

おのれ作るれ八代牡鹿の例のを作るれ

むかしうるうて作るほにてまみ例も作るれいえやの死て作るれ

のきく年をて初の例などありてありるをさまざまうるいとう

あることやうや又多死例をも去出のふるみ 口 古大臣公卿をもちゐを

うるびらあるん きうが 八 かうかどよさふうびのみ例ありるをもうたうるとう

れい 例。常のナラハセト訳メ解シヤスシ いやも 六十三 俗世の中の例

れい 例 制シツタタアリフレタイツモ平生皆同シ

どもはををて うるせ 三 例のやうにものくまうる

れいうらぎ 。意上ニ同シ うるせ 例うるめ人作りて軒端ノ萩つゝ客人ノバサイヘリ 枕 十ヲ 廿一 例うるめ人のまくに

枕 十一ノ 廿三 ホどもみどもぐくうるめ中に

狭名 三十五 岩根僧イヨおもひあれどけのめいく

めでうるど

枕 三十六 女

枕 十九 北方西北地もて一例にありて 土佐日記 例のや

枕 十八 廿九 ことに例の人めのうるにをつうびうるいとうるをだまに

枕 廿七 廿四 大臣公卿をもちゐを

曽山文庫
根岸信輔氏寄贈
石川雅望 集
関豊俗 補
昭和八・贈

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

子をあていきたる（コレハ病人ヲイヘリ）【名語記】六許公地や例あらざりそへもさるへきみけ
なくめるにてお前ちかくもえまゐらぬつきさまのみけ
るありくうりてたべ〳〵おろ〳〵するひろる日（コレハ病テ常ナクヌベ）【あゆひ】四六古公地の例多くあり
えてするひとことなるべき人地にもおそれべきものづゝみのどにやひてうた
もぐろうち世のうはつ〳〵やまの古耳おどろくもあいるをもぎにるえんとう
違例（ナドイフガ如シ）

れいの 例ノ。意ハ上同ク（イツモノヤウニノ意ナレド）【いせ】八十三段 惟高のみこ例のかりごろもなど
（ハツノ語ナレバ別ニ出ス）かくるる着つゝ【枕】一 例の内にも教へるやうに【あが】七 例のやうにへありつゝ
つぎとして

れいの 礼 【字治拾遺】十三ノ六 ころおひとりてあるうちにそあるれもおろぎ
。器 【夫木】四 宝家「れいのあや沸のひぎもおちろ〳〵いかりもちもふろくして
れい 鈴 【〃ほそ殿】 春ふろ〳〵そこともおろくめちにそるうふひぎ

れいぐう 【抄】 矣道ニヤ 【松】七七 清行成ノ 多例 とてめでたきに江納につけてまろ
れいらく 零落 【文選】 魏文帝與吳質書「謂百年之間零落略盡」言ハ傷心注ニ零落
死也

れいらく 【廿六ノ裏】五一 玄宮ハ若宮のひにろうろくに宣有のさをよくにりろぞろく
己の時にぞれちひくべう作る第りまと等てのり

れんが 戀慕 【後漢書】西域安息国傳思ニ恋慕 【法華經寿量品】斯衆生等聞如是語必當生

於難遭之想恋懐ニ戀慕渇仰於佛ニ便種善根 上

れんとのちぎり 連理ノ契。男女ノ（デモイフ） 【前のえん】十五 若君ニ舞ヲシテヨト
（ハ）少将ニイフ父君ノ多例 おのまるぎもるどよ今世て生〳〵ここらの
第四 ぎべ生〳〵世〳〵のこまるひのおとろのふ〳〵ん
ろうふ〳〵べくれんとのちぎりをろさえ

れんげ 連子 【大鏡】三 中つの御のれんげうのごうもの
れんび 。練ビ。糸ノ名ニ熟練 【源氏】 宮 螢ノ巻 みどの玉ふんびのすこ
ましものふみやおろえのふうんとろ

たろふうろれびにやろぐこの人のこのもふ安きろる牛ゐをろと

れう 料。倍ニイフ分ノ名ニ 【ろろう】 畑ニそさうぞく人々の料ぬどさまぐ
母后の作ろ又の日八法の作且ろ 【やどりき】 三 中宮の作八溝ろうろ
うちのろべてろうあに 【枕】三 後上人の使ふものさをとぶびやうにそ
【四】廿 例のおろおさ〳〵ろうとおろうもおをくあ〳〵やまてあるる且びあ
料の紙八年ごあろうれをを紙ろれとうて 【四】十三 其ふんの玉うに作ゐ法
比五道をろのふよ十余ぶばうとろる事子ろにあひめ比五帝ろ宮ていまく

れうし 料理 【白文】廿五 眼昏ク被書ニ料理
れうし 猟師 【順集】廿五 ろ〳〵にもあろのろそあふととりの
れうし 料紙 【新古】哀傷 かきそろふとども作の且ろ〳〵ふみさろ

れうし 寮試 【をろ】十 今八れろ〳〵うけきそんとてまづ作生人に
巻くれろ〳〵うけんにおろものかくさろ書きふ〳〵ぐをひき出てひとりろよそも

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

ありのみよ

れうもん 寮門 [をとも] 土ろうのんに上せ給の兵車どもも教ろくびつとひさう。注 大学寮門ゝ

れうふね 猟舟 [山家集下] 宇治川をさしくだりける舟のうちにつきとめす物をもて鯉のありけるをとりて「う治川のま淑おちゃふまてゆ〜ねのろをまちゃふこひのむらまけ

○曽の部

そ 。其ゝ [そハ] [そと] [そゞ] [そゟ] [その] [そや] [そも] 各別々ゝ門ス

上に分とりひて下ゝそととりゟること。みおそゟ来そゟせそ。

そ 。其ゝ [そハ] [そと] [そゞ] [そゟ] [その] [そや] [そも] 各別々ゝ門ス

そと林小止の辞に用ひゟるゟ古今集「みゆへおやるくいと

紫ぎろにこの引あやゆうゟうこと五六山吹いおやな分咲そうの

たゟゝ分文字ゟゟくてそと斗にて楚止の泊とゟることゟ

そろる [堀物度] [夫木] 蔑 漆保治四「そろめおゟる野とのあゟ。田おゝくゝらそげゟゝろいむろのこれゟも

。注 そろめハ灯ん二ヒキゐそノオヒテ才ル簡トイフ草ナリ 郷川本礼

そは 。夫ハゝ [そゟ] 四そにいにゝ仕ゟぐきゟるにゟとてゆきそゟ

おゟくんとハゐろぎゟゝ〜 [松] 三十九いとよくゟゟ

又ありくんでおゟめ教ゟり [口] 四「そハいづゟのぞと宮ゝむ教ゟ

そは 。咀 [列古 雑中 西行] 「ふるそこのそそもの玄木にのゟ旅のおよぶこころ

山ゐのきびゝさよかきこれのそそにをよびおりみく

ふろのむろのふきれのそそにをよびおりみく

。附 **それひら** 咀夷 [竹トリ] そのふのそそひらそをあぐれぞ [盛業] 廿下 そまひふりまぢのみの玄武おゟり

そば 。常ニイフ側ノ傍ノふゝ [口ノ名] 下里二宮のおれまそ五平子のそばそゟ

[のとの] 世 おのそばそゟくびそひつゟりゟふ

そば 。衣ノハシヲイフ [夫三川物] さゟるゟゟそばおさゟゟつく月。

[着陸] 十五 [堅塩] 八そばるきをゟきゟゟみ [口] 三さゝ

すさゟゟて太刀をそを袂をりきゟきみ [口] 三さゝ

「さむゝーつにそゟくゝそひきぶひゟゟやゟんそべさびつく。モシハ ソバ搜ルヤ

そばは 。テニヲハゝ [タギリ] 五土 何につけてゟ世ふふるまそゝくゝさゟるゟ世のつゟぐをするみぐさゟゟきぶゟの

そばる 。添ゝ [そゟる] [そハヲバシテ] [そゟりゟり] [そゟ巨岸後拾] そゟりてゟ

[後カゲ] そゟりてゟけふくゟをつくてゟめづゝりゟ和のまるそ

そそりてゟけくまそゝさそをそひみげく [古今] 冬の名

「おゟむゟふそゟもちんおやゟ日ぶゟゝふをゟもすばふふゟそそゟゟ

林のまさくおそそゟつく [風雅 雑下 全五] けふそれぐゟやまのかハ咲ゴ

くまのおおふのいぐ年ふまでてゟーぶさそおんそゟりゟる [信明集] 夢のまぢのおちそそゟゟる秋つせん秋のふゟ

さそ春にそふる [赤染集] ふふふくぐさーの春もみゟゟふふ

そばそ 。片顔ノカ [狭衣] 三十五 今夜老の教ハサヲ みまにすゟ

そばつる [まそ] 三北 教そそれぐそく仏のあしをゆりみよ [列古] 三病ふ枝をそれぐそくおゟぐゆつすめ

みそひいとよまげよ [夫木] 十五 信実 [列古] 三 沈ゟゟにをーのつゟぐれそぐそくまおくそひのけ

きよげーれ [夫] 廿 信実 「客あけてみのまゟ国の内に枝そぐそ月をえゟゟゟ [口] 十儀集ゟ「さゟる秋の

矢の川余の孫枝そそぎてあへぎあけぞしふなる【形政】下ノ六 せきもあへずおつる丘てぬる洞ふるあまそぶぶろ淡枝
より【いさよひ日記】「ゆるしさえそなるの空ぬそそぎそくよそになしぬるあしがらの山

そばくし

。契云觚稜ヲ文選ニソバくシトヨメリ 和名抄云 唐韻云 柧稜 和名曽波乃木 木名也 又四方木也 カドく
シケレバ物ニサハル心之云く。雅望按【廣韻】九物有廉角者曰觚稜【西都賦】上ハ觚稜ニ而棲ム
金爵【蘭會】柧稜堂上最高轉角處 柧通作觚。宣長云【古今六帖】ニ ヨソくシク シタシカラヌトイヘルヨロシ
【菊ノ宴】九神楽ニ「うたそくく竹の山の椎がもとあるそばくしとこにしあるねば【きりつぼ】廿六 こきでんの女院まさし氏
宮にも院中そばくしきこえ【もろきく】土きハきこしそばくしくくむつきなる人の【狭衣】しぐ国王をてあざやうに
そばくしうもおはすまさざさんりるみそやうじうえうけるる法ありさまする【浜松】四字 きさきの姫君のこと さそがふ
あまりうずのましく入ひおそばくしげにはあるにハとあえうたるよくと
。そばやかにそばくしく 柔スル也 次ノソバメノ条ト同ク 端々ノ意ニヤ【ところう】廿六 ひきとをて法師さそ女院や

そばく

なにとぞ おそものへるか中納言の君とぬちらうさぶらひてそばくなえり【うつほ】六 そのころりかし
唆しさとのそばくやひ出るるくへひがてきおやあらん

そぞつき

つねざましざきくるもけよかうもありつべかりけると時につけつつさまそとうへて今めかしきに目うつりて【もろきく】抄 側ッキユガミタル体也【もろきく】五 あそびのあてあそびものそのあとなのとも空らぬハそれ
おかしきこともあり。契沖云そぞつきハそぞくめきなり【万葉】十六 長歌 ち穂をむかえにあちひきうけきくさう母をとらう
くをきるらにさう父をとるくをきるらに伊蘇婆比座ヨ いるがとあとこれ戯立まをそぶくるともいへり古歌
まも法例なれ戯れのつまるをのよ

そぞえ

。ザレホコル 【枕】三ノ五 つどありくりつべのよどくにつけてハいとしきろざしくるを出にたのむとまめり
人にうそくそべえもいまぜ真ありとやむさるとそぞえるる小舎人帝まどた 兼玉ヲ引
そしまきるくもおかし【万】十三 六 花櫻をまわつそよもちいりけまよさうが母をとらうくをきるらにさう父をとらうくをきるらに伊

蘇婆比座與いうろぞちしめと【字鏡集】笑とのひらけそでしむる精ようそまぞて風のうをいうるうるうゑ【玄武経記】なれあるの
人あどへ血筋あぐまるぞうし無愛よハ血の出れるのよぐ血そぞしていをく人とももへだと

そぞひき

【和名】十七 四 蕎麦 和名曽波牟岐一云久呂無木 性寒者也【古今著聞集】十八 にかしこふひさむへて
わうそまむぎうんこころとあるもそれまにてつくぞ川をとつくま川とふどく同類の道よ
るりとある人のくり【菜吟】十三 隠あけりくる家にそぞむぎをとうゑて作りくるとぬきへるよ引て召りくるうろを
味てよめる「ぬきくへるう穂えぞやきるらんそぞむぎをとうてぞおもしやきりめる

そぞむ

。打向ハズ也 ソムケテ居ル也 心ノ上ニイフハ クネル也 物ノ上ニイフハ 勤カヒニナスル也【円】五ノ十 おほ浪のの人ハきよは
たつるよなくおらくるひそぞむくるうなぞとのこをそむその人【まうた】廿四 おもノコヲ引 そぞむてりそぞうるのよしんかまさへ
るなあり【若むらさき】四 ちらくさあろふ人をまとことしありぞえらく内末了のうしろにそぞきあへり【うつほ】まうちそぞむきて
かいなの【ここちよく】十六 そぞむきうくも咲てすよへきよるつれバ【やどり】古 何やうやうともそぞむき咲へすまで【えとし】大 おちちろり
なくへが人ちぞうひてきこ ことしそぞむきの人のかさそるる
するれぞあのづくるそぞむにのよ【日うる】下ノ六 六ノ四 拾に目をとそぞめちるまぬそえるハひとおそろしくえうしくおかしき

目をそぞめ

。是モツマハジキシテ打モ向ハヌ也

そぞめ

体ノ語【うつほ】五 さきうにもとそやねとう目をとつたらげ
為_{ソバメ}側目 是モ 目ヲソバメト同ジ也

そぞむる

【白氏】十二 十三 長恨歌 傳 京師長吏
こぞまるのとまり【円】八ハかさしきひよく女たふりまてえるありぞえにハ待らぎやかやうのるの中のまあるま胖里
おふくるさそうひうく待んぞも何とあて えをてがうたにようて我をそぞむる人のよをとろくりぞぎるるべし

そぞめ

。是ハ側ヨリ見ル目ノ也【きりつぼ】三 目をとそぞめつくとあるにおよど【未つむ花】廿五 口 おそりのそぞめより
移うのまろむみやとらむおふさしめさり【まうろせ】廿四 ろそぞむてぬそぞうきするハかしこくへたりあり
そぞむるこちふたのき【ゆふがほ】七 いとあらくもあてうのすくるたそぞめをなそえでくきでさしおどうろしうるくと

[日葡] 古今 [古今] 大人 [大人] 庶民の家祭のやうく [庶民] めでたくそだちあひて [そだつ] 栄ゆるこゝろもでいとえまかきそだちうるとのことゝうるを [大人] 処にそだちあらはれて

そだち

[そだつ] ○是ハ今ヲウニイサカ [うるさ] 古 ありもとさうめきそだちうるとこゞろをえうてこゞろとこゞろにのぐさみにてのまゝくぞうるさゝるる

そだひら

[雑代紀] 一ノ下 [雑] 岨ノ傍ニ已ニ出ス

そほ

[雑] 三重 [三] ま金かこにふのまゝそほのうに仁知そいはくのこゞ気こゝらくへ [日] 三九 [そびに] おておこしをよ山下のあけの曽保船おきまこゞくゝも ◇ツホフ子ハ丹スリ マソホハ赤イロナリ

[播州物度] 倭訓 [倭訓] そもまきまそのかとをうけてえぎもくをまねきつうるる ◇マホ。マウ。マツホ 皆同シ

そほがき

[サカキ] めまつくおそかどそて [竹川] 十三 [十三] あるぞゝぬぞちどそれどきて

そほち

次ノそかつノ如ニ出ス

そほる

○口語ニハソヲルトイフカタハレ乱ルゝ如カ [掛] 十三 手フヲ今の世の上ふにおかまのうるこゝろ [ととのふ] 古 うきぎまく人をめうこうそかのしさまぐにおのふさゞもにとうまぜつくあるとつうを人くそかまとくまにおうこうる [まろね] 三 十とをのうげよおうるを年のうちものいよくかうこうにおうけて [小前張] ぬるひるどおそかうるのむ

そほぬる

[小前張] ○濡ルゝ [清] 三 雲隙のあまそかつおそひおがつうるくふりにるうるん [ほ] 擬古 おけうしまうるこのを

そほつ

[雑] 三重 [三] 作うるそのみもうぐ人をのぎおつうるるこゞやそかつおそひおがつうるくふりにるうるん [ほ] 擬古 おけうしまうるこのを

[貞観紀] 三ノ [儺岐] 儺岐曽袁遅喩倶謀 [古今] 歌 「おあをうけそかを

つゝおそだんと入今そ安ふをうるゝ [信明] 英 「ふ露にいうそうるぐそふのおそだちまるゝ [重之] 大 「気多こそそかちまるゝめ五月雨のおるゝ学ことやいざらるん [名義] 世四 「おあにうとそかちまこもん [和名] 古 「おあの葉 「ふりげこおのやうげやうそのうを [時慶日記] 上 「かご [日] 三 「いうまうとふのちづくふそかちそん [今撰集] 下 「いもまうとふのちづくふそかちそん [いせ集] 四十三 「法の雨にそだち [新語格] 別 「五月の時雨のあくのそだちつゝまる月のふいうきにうう [栄花] 正 「よもぎふ [正] 「てこいちなく [栄花] 正 「弱そつひとそかちんちりくの別且一独をおひおこそよ [栄花] 正 「たごのうきをそかち [堀川] 百 「そのつもにそかちつくめのうるうくうう

そがづ

○素性ノ人 [雑] 三重 [三] 別ノ部ニ出シ [掛] 連 「猶スルコトカルハ前条ノ [掛] 雑 「如ク [掛] 雑 「小大君集 「ナドナリ

そがる

[日] 葡 「あゝ月のふ四のそおづうちこびてひとうふくのれをそるるなる [日] 葡 「契ネソトフル雨ヲイフ [万] 十六九 「いやひとのれの且神 [そびまる] 古 「彩古 [集] 「重之 「契沖ヒトリ [まろね] 古 「下十三 「いけるうひありうるさいまひ人の [古今] 歌三 「得ふく [おびまく] 人におをとりてねにあのそがふりうるにとそそうれしーうる [掛] 雑 「秋上 八月中の十月ぞうよあのそがふりうる日如ク [掛] 雑 「秋上 八月中の

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

そへに

。さへとの意近くや 古今 ハイカイ「そへにそとまとのがくりかくまの花ありけりかくまの花ありけり。集名歌ニ於テ何人ノ詠ヲヤ附ケ給ヒシ事ナシ。

そへごと

。松ノ枝ト ハズガタリニ語リ入ヘナドスルトノ 松 呼 性 常陸ノ名ニ於ケル

そへて

。常ノ添ニ異ナルナシ 狭遠 枕 「ありとをとめをそへてやるよしもがもなきめにそへてこらが付きまし 記紀 表二 出ス 「きみくのちのくめくるをそへてこそ 添 ツ 「そひ 「そへる ナド 別ニ出ス

そへて

。意異ナルナシ 但或ル 宣長 ソヒテトイフベキヲ ソヘテトイフ古ヨリノ イヒ習ハシ ト

きうび 世三 年月にそへて 下百三 月日をそへて

そへて

。添ヘテニテ異ナルナシ ねもさて 大人 なるべく にも有ル事ナレド ねもさて 三かくもの ツカニヤマカハレバ別ニ出ス ねどころ

おひしおの人ごと 松 二 世 あつさのひびきおそへてをきけんは 日モ九ツニ告ケ渡ルノ俗ノ例ニテ秋ニ入テノ事ナルベシ

そへて

。是モ同シ 彩古 表 「つらづゑきるへきものなどそへてこそ

きるへきものなどそへてこそ

そと

松 十 世 信仰ノ ことをきくにそとくおへるうつくしきかたちをそとみてしかなもよしもいまだあはねばそとおもふこひのなぐさむるなりけり

そと

外 松 六 世 きみのまそとに覚ゆるかな

そとも

。宣長古事記傳 云 北方面ニアヅミ背面ハ山陰ライフト成ル ノ巻ニ見エテ背津 於母ラツゞメタルニ外面ノ ムニアヅミ中昔ヨリアトニモ外面ノ意ヨリハカナハズ外ハタヾ 登ナリ 吉物 ニ ゲスノ家ニシリノ門ヲバセドトイフヲトセト同音ニ又ハヲトモイフ 袖中抄古物ニ 男ハ門ガ近ニキリクテタルトヤエタリ 袖中抄ニ ウシロトイフニ 万 二十三 玉ぞ落山ハ背友の大市ニ 琵川勝宝 かうの河内 おのづからそとにそろかやうの下にこもりてやまんものぞうき 散木 中ニ 後拾 夫 世六 「ねむごろにみまくほりのそとものそろの 後拾 夫 八 清輔 「かりそめのそとものまもりとしふれどやりそこなひぬ 彩古 後成 「そとやりそこなひぬ 千五百番 「ちとせふれてあきある五月にあめのそら 口 「ある家 「そとまもるをそとものおのがむすびし神よもあめのそらなるそとものやまの秋のタベは 山家集 上 世六 大武ハノヲリフシニ 世七 ニモ同シ 世八 大武ハノヲリフシニ 世七 ニモ同シ

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』　請求記号 837-79
ガラス使用

そち 千載 雑上 覚蓮法師「まどゐしてみしよそぢの君の世の世へうつりしりあとぞ見る

そぢ 。八巻 雪中二 堀川次郎 神主忠元 夫木 丈八 巻頁「初雪あつたへうちゝあるあさぢふのあらしのちのみねにそちのつもりてきえぞらず」。此余 そちぢて 夫十六 規隆 金葉三条 そぢまりて そぢやう

そぢまりぐる そぢまりて ナド皆 そぢる ノ条ニ出ス

そぢまそし そぢまりぐる 玄十六 らうりにとゞめへそぢまそしをりつりてゐる

夫十一 玄笠内裔 拾六三「池水のまさるにとゞめそのほどもありがたくこゝろなからひにふるらん

そる 剃 東かがみ 廿五 うしろそりいむるそうけるにて 東かがみ 三十三 いうでこの髪をそりてよろづをわきまへずと思ひて

夫 廿五 為家「髪をそりそをそむくゝろはあるかも何ようつりて法ときゝまし 狭衣 二 御髪のやうにて

みちと思ひのそりきていかるこのとおぼしめして 源 四十六 大系 コヲ さるにて世の中かくれなくておのづからきくへくもありて

まてとしくそりさつしゝみられやうにきとゞろゐとげ 玄 後 国 二六

そる 反 夫 十二 俊成「うつせみし あづちのこゑのそりゆきそれぞれをひきうけきくらん

そる 又 源 十 新六 五 知家「張る弓よりあらための弓のそりとゝめさせてひくつくらにひくまゝに

そる 逸 松三 未 あかつる 玉葉おいそぬ児のそりくるつぐりて人にもらぐるほぞちらさてる

夫 十七 十三 中務「ゑき人しもそるき 発るけゞ秋ゝの院の露となりて 散木 下廿三

かぞのそゑそしの露へさしもかうべみのそりゆきてかゆうかうえそのぬる 詞花 一 最厳法師

つうさどゝもの さむものつまりのゝろのそりまてそろのみゐるのうきさた

。是モ逸ノ方力 猶二方ノカヽル 剃ガカ レナド同キカ 落くぼ 一条 此法師そりなげけるやりいちとらあや

とのすべだ 夫木 十四 堀川院中宮歌合 経忠朝臣 つゞにまゐりけまてこの神楽のべの花にやならむのひ

そる コノサシハトハモシクハ鷹ノコニヤ

そゑと 。其平之 万三 三十六 遊びやどりのみを戯てゐる我かれども何をかもあらず 円 十二 廿二 坂上の中のきさゝよりもつる人なみも 其平肉ニせん ヨシ

そゑぞれ ウレヲ ダミこ 新古 玄 下 良平「ちるはなの玉ものくさなるみねの雲をそゑぞれのまゝまとの嵐 古今 玄四「わかきそそ やまん中へたなのみのかそゑぞれのほしとの御くさ 拾玉集 二「岩ふきてさゝやかみそ行流れ

せてぞゑぞれまゝの年りしと思えん 新古 玄二 後成「うすきえだ秋ぞなつにもかくぞそゑぞれのおなじんと おもまえん

そが 。夫かへ 其人ノ名 土佐日記 此名に年ぢ足りそぞ時ひけらく

そがきく 袖中抄 黄菊モソカトハ兼和ヲイヒナシタル也 兼和ノ帝黄ナル色ヲ好三玉ヒケレバ黄ナル色ヲバ兼和色ト

イフサレバ黄菊ヲバソガ菊ト云ヤガテウルハシクソガ菊トカケル本モアリ 李綱往来云 非紺非紫冬

同云兼和色欽 松陰雑抄「かの兄弟る池辺にこゝるそぢの菊のしげさまさぞの色のてころさ 夫 十四 為家「今よりも...

ちの由ひそゝえゐの人に人もまさあぬそぢきくの花

そゑひ 。そゑひハウシロノ方ヲイフ 万 三 廿三「ゐなのうち由そゑひまよ(背向)ゆるきころまま 夫 四 家隆「桜花ふくやゆきの

あしひの山そゑひまよまる岩のみる雲 円 十四 信実「木名川 のせどのあやに名とゝりてそゑひまむろへ

ゐなさてとも 円 四 行家「あしひの山玄陰へぬままつくれのそゑひまよ みねて雲をまえておひく 円 廿 家業 光俊「みちのくの

あそそゑひまよ岩はあづまのえてややの岩のえま 家業ハ寛元元年十二月 泣ひ 撰 遠進 ... 円 廿五 権僧正公経「浦ふく

あづまえてまさそのそゑひにまぐるきかのゝげるる 円 廿二 為家「浮かぎゑそゑひまよそゝるときのやうの人白嫌に

むまぶ行家 円 十三 光明峯寺入道摂政「流くれのそゑひまよそゝるさとゝりのつまおく風をあさも見よ 夫 廿 万 十四

「つくれねせそゑひまよそゐるあしわ山あしろそゞもさかれえるくに 壬生二百 廿「風さけば秋の池へにうつ岸のそゑひまよ

るぶくゝ向きくの花。猶 夫木 ヨリ 抄セル 四ツ五ツアリ 略ス

そよ 宣長云フト思ヒ出テイヒ出スヰニ 今テモソレヨトイフ ことそらそし 十三 かみでてゝそこ詠 ひとよくするそてそよぶうつゝいへへにもあるらん 東かがみ 廿八 あまにこそ君のあくむかさつらぬとりへむそよなどかう ゝことそ

かいさぐやよすがよ 拾遺 哀傷 わかくさの「今ハとてそよそのことゝおもひ出てわするるまでハはかなきものを
や「秋の野にさへもかくしそよそよそよぐのくさとこの葉の音
そよ 。笹ノ葉 稲葉 荻 芦ナド 風ニソヨギテ鳴ル音ヲイフ 人丸 十ノ上 万 三 六帖 四 そよや そよく 次ニ別ニ出ス。新古 六 皆次ノ そよ ヲカ子テヨメリ
そよといふなる 新撰 下ノ 荻の葉のそよぐうけばこそ秋風をふきくるとはおもはまし 中務 廿六「あさ津にもとひてぞ聞くおぎのはのそよともいはぬ花の色にも
荻のはの我やまつらんそよとだに 太和物語 四「ひとりしていかにせましとおもふかなそよとも人の荻ぞよそなる
そよといふ 信明 廿三「まゝあふ蘆の葉のそよぐによくそよと答ふべき人もなきかな 古今 哀二 六帖 六ノ上「そのまゝ聞えわたるおぎの葉の
のふぞそよぐ音もしらぬ事をそよといふべき 後拾 秋風のいかなる 夫木 廿六「かくおもふ身のほどもしらでそよとこたふるあきかぜぞふく 万 廿一 古今 秋上 六帖 六ノ上
そよとうちいふ 金葉 下ノ三 寂蓮 後拾 雑二 名所「いつしかと待ちし秋風よそよともきかずそよぐなる荻の上葉を
そよとなるまてるげたつるも 是モ鳴ル 拾 秋に出くる ねのあ久しそよ ふくる風にさわぐかなる音こそすれ ひと年どこそもくる

そよろ 。音ヲイフ に毎につきてさそろてそよろとはいふるもなこゝいにくし 同 七ノ十三 わりうぞそこもさ
げてそよろときしいふらん人ゆくの萩ぞゆかしな

そよく 。夫ヨクト葉ノ音トカ子テ云ニ八ヨメリ 六帖 六ノ上「五月まつ沼のまこもの乱れつゝものぞよくらむあはでいで
とぞおもふ 同 二「ことにもやさかれんふらむ秋風のそよく萩のうはにぞおどろく 狭衣 一 淀浪
「風ふけば萩の枯葉のそよぐといひあはせてつらひ出ずる 後拾 三 そよくときゝそぎそきつるくへいとゝものをおもへる十四人ぞなりぬ
。是モ物ノ音ヲイフ 後拾 三 そよくときこえつるへそくそよくへと聞えつるを おもひさまして 上百 猶 人くあびえさきかてそよくとことでふつき
そよく おぼうつしていひけるかなおほかりけるたり 蜻蛉 十三 人しけうなどしあらねぞえへしでんの
さすよよけえひとどもきぬのなるに耳うちきゝなでうゆかしくて

南おもてに火かのくもりうさてそよくとおもふところ秋もとどもてそよくとしあたひてそよくとおもひつつにさし
上て 同 六ノ十九 そよくとおもひておもひてるにやそうびまひゆかるなりけばもにて侍る人にやあるいは

そよや 。夫ヨニ又ヤヲシヘタル也 白丈 十二 驚破霓裳羽衣曲 ヒゲリ 楼 上 二十ノ五 さとのまかぜ音をそよやよぶ声やまてもとまるるありきこはせ
夕ぎり 十九 すてくしきき律師にて申しあるいはかくそよや出でたるへいひつくにいまりうひのふぞとよひゃのよ カゲロフ日記 下上 そよやげよふゝくのえらしぬ
月もあふなるを ゆうぎり 四十三 すらくしらうもあろは聞ゆるそよやそもあおりに 新勅撰 下廿五 山家集 上
「名の秋ハ名のくれざくの見しちるらそよやかどかなくあくるよかな

そよく 白丈 十五 肉戦心難 六帖 六ノ上「いつもきく風ともあれど荻のはのそよぐまるゝ秋ハきにもある 和泉 十三 医
のくるよそのゑをそよぐるゝ行のえおとに引きつゝうゝ 京 秋上 おとえ人「きのふこそ早苗とりしかいつのまに稲
葉もそよぎて秋風のふく 後撰 秋上「秋風のとおふふそよぎてふくなるべきあのおのおつるひぐらしの声
月日へるうよくうそよぎし風の音も 故古 たつさ山梢まぎるにあるまでにふかくも萩のそよぐなるかな。注 そよギフ ヨリテ ナリ
ツヨクト興生 入ルサマナリ 拾遺 秋 萩の葉おもやむそよぐやどるにあどてか荻のおとそみるらん

そよめく 文選 五 琴賦 新衣翠粲 綾千 秋上 俊成「夜徒ハ荻の上葉の行くをやそよめくらにあそびちん
おとみひあて 覚之 下二十「辻よ紐ハ袖よそよめく風の音にちかくへハきけどあひもさめつる 覚露 五 あつるくまよそよめく
おもひてよきねよよそよめきて入ぬ 光ぞよ 廿八 風の音の竹に待ちて よてすそよめくに カゲロフ日記 下廿 あるいはといへかましと
まへ 拾 六ノ六 廷道来ると聞けども なくすそよめきて入 うつほ 六 其やうちてつるにやあるへすそよめきてくをかうくけえひすしすかり
くはべ女房南おもてにそよめき 後撰 にほそうえもるにまるぎもとはひぬ子で店でくからせるひぬ。体ノ語三 堀川百首 荻 国信「荻のそのとよぶるのそよめきよなまるぎるよ
目もきすらうるゝる

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

そよめく

【狭衣】上 「そよめくなる音のするは彦星のうちもてくる絵のにて 【後撰】秋上 「ふくよりは夫の涼しさのそよめくなるはいかにかゝるあやしさぞ」 今本そよめくとあり
あやしきことをのみそよめくとも、そよめくとかくと侍るを、そよそよとするは風のまくなればなり。○葉末がそよめく 【奥義抄】三 「そよそよとはなくそよめくとは水のそよめく事もなく、うちそよめくといふも同じ、トイフハ、水ノソヨメク事モナクワタラントイフ心也、解スベケレドモ 【袖中】 同 田 同

そゞろ

そゞろハ叶ヘリトモ覚エズ今ノソヾロニテ由ナキ心也 【後撰】ハそゞろなる人に心のかはりぬるにや 【夫木】十三 【堀川院百首】 「若ばかりそゞろなる心の内のあはれとも思はでそゞろなるひとのみの稲

そゞろ

五月 ソヾロニテ由ナキ事也 【夫木】 土佐の比 「やゝくくに雀のひるさへかうひもてそゞろ猿ありあるかな

そゞろ

【新千】 姿の哀き埋葬 「ちとせまでわかれしきるの子をそゞろにも猿ありそゞろなる

そよ

【えいぐわ】 五 そよさきしもあらねど 【同】そよそよとあるけどそゞろにいふべからずふりそゞろなる
そよ二人ぞよあまりあるかなそよそよになる人の心ひきいてさへもそよ 【同】五世三 今はいとそゞろにあはれにきこえたるなど
ものゝあはれに心ひくさま 【松】一ノ十三 又あはれにおもひなづみていることありぬべし
歩数して上で侍りぬとさせやうなし 【うきふね】五 宮そよにいつくよりぞとのたまふ 【源】其かしこき女の心もとなし 【同】月七 中納言の君とのたまはするに 【松】十二 まづ源の法
まで心ありぬべくいる侍らざりしをよしあるをかくのみあはれなれば見ゆるまゝに 【松】十六 清
得給へるやあるそれは院の大まの心ある法の庄は葉でいとあはれなるべしとおもふ院のいとあはれなる 【同】六十二
とくゆかしう思へとありける下がさねぬとぞもひかれて近くさるべし所のもの 【カゲロフ】廿二 法師にも心ぞらの人の葉ありとやかく
まゝなるのやうりの世の方をおやしと思ひつけてそれがかくれぬるは 【宇津保】廿七 あはれにかはりそれにかくれなん
あるそよそよさるべきにてはかりおぼえそゞろの人のそよそよあるぞきこゆるに 【カゲロフ】十 めのとの大とこそれがきちの御ぞり
なんと 【狭衣】三下卒 【増鏡】 さるぞはべりぬべしそのよそにうちつけにものをそよそよと思ふこと多きに
さもくとかくうひの人そはあるの事 【東かゞみ】三 「ようでもそれがとするを
【万】十七 「池のべの松のうれ葉にふる雪はいくへ降りしけ明日さへもみむ」 【拾玉集】三 「よしさらばかの世

たゞ笑ひなげきしぞ聞えかゝりぞ侍りける。そよに 別ニツノ詞 そよにつけても そよにもよらず そよめく そよとも彼がや そよとも彼ら そよともあらぬ そよが中 そよの来 そよおもく コレ等皆別ニ出ス

そよに

然レ二 然リ心 【松】六 十二 ひとつきはすゝめれどもあはれの草の葉のうらにつゝまれそよに人もつゞきてあはれの葉のそよにおもひて 【宇治拾遺】三ノ九 尾張なるにまかりてみれば そよに尾張よりで
四方ひろうしてあはれに大宮守の威勢の月にもまして国のもののあはれにもてなすに国の風の
どもあるにこそ

そよはつけても

【きりつぼ】 六 五条の方のうちにて遊びきこえさせつゝもあらむとてそよにしつけてもいとゞうき世の中の
そゞのきもおもひのほど 【狭衣】四 中 里二 そよそよのつけても人もむらみ給ひて 乙本 【堀川初度百首】
忍ぶ 「そよそよそのつけても世の国の事を

そよはもよらぬと

【夫木】十三 秋上 「うらさびしき秋のゆふべは今ぞそのさはそよにも心もみだれぬ

そよとやらまや

【松】七 十六 推柴がもとにさそひのかげのそよにや

そよとも

【風雅】十七下 実氏 「つくさくら庭のまつのこかげのおもに入るかあぶなさ

そよとも

【壬生二】下 「今かはる月の暮をかまぐさのそよそよと入るなくていひあへる 【スマ】四九 それ毎の島のなれとそよ

そよかき

【万】八 十五 「我せこに見えぬとおもひし拂ひしそよとこえしこぶれや

そよかきのに

【うつほ】四 小さき子の中に彼の中のおもほえあり

そよがきもに

【古今】 秀 そよが中の中も萩をとりまぜてこそ郭公をきく

そよのあふなら

【古今】夏 よみ人しらず 「こぞの夏なきふるしてし郭公それかあらぬかそゑのかはらぬ
【うつぼ】十一 あはれのぞみなどしてそのあるみかへりとあれども 【拾遺愚草】上 「夕月夜おぼつかなきを雲間よりほのかにみえしそれかあらぬか」 【同】「月かげのそのかあらぬかかげろふのほのかにみえし」 【張綜】大臣家
えもで雲らくらしにき 【拾遺愚草】上 「うらめしやまたことあふくして郭公それかあらぬかあのそら 【秋玉】四 「かさ

きゝの杖くら秋の[illegible]横[illegible]のくるまのあはれなる[illegible]同上「狭衣[illegible]の杖の[illegible]風の[illegible]

そよかぜ

そよぐ 兼合十女郎[illegible]そよ[illegible]枕十二清少納言四十ヨソノ書[illegible]そよ[illegible]

そよめく ○俗ニイフナニカシ何ノ誰 ○オボメカシテカケルニヤ [illegible] 狭衣三[illegible] 宇治八四三十 [illegible]

○何がし・そよがし [illegible] 書法[illegible] 用[illegible]何の誰[illegible]

そよがし ○[illegible]ト云フ詞ノ[illegible] 狭衣 [illegible]

そよや 拾玉三「[illegible]そよ[illegible]松の[illegible] 夫木雑三 [illegible]「松の嵐[illegible]月の[illegible]外に[illegible]

そよより ソレヨリノ[illegible] 新古雑中 定家「[illegible]

そよそ 拾玉集四「[illegible] 新後拾離別 [illegible]

そよゑん [illegible] 廿六[illegible]べくもあらん[illegible]

そよのとし 土佐日記 そよの年[illegible]日[illegible]の時[illegible] 新勅[illegible]三 [illegible]

そよときく 夫木[illegible]三 [illegible]

そ

そよゆゑ 拾玉四「松風の[illegible]秋の[illegible]そよ[illegible] 月清集 上「[illegible]月[illegible]そよ[illegible] 同 [illegible]

そよも 風雅[illegible]四 後京極「[illegible]そよ[illegible] 新古[illegible]大輔「[illegible]

そそく 同二「[illegible] 方丈記[illegible]時[illegible]

そぞろ ○スズロト同ジ 遊仙窟 不覚 [illegible] 国ユヅリ 上[illegible] 枕一ノ五[illegible] 国ユヅリ上[illegible] 方丈記[illegible] 宇治拾遺[illegible] 枕四[illegible] 拾玉五「[illegible]月の[illegible]

そぞろごと [illegible] 阿仏ウタ子[illegible] 後拾遺[illegible]

そぞろごころ 国ユヅリ[illegible]

そぞろさむし ○ドコヤラ○寒キ分 [illegible] 夫木[illegible] 兼[illegible] [illegible]五 入[illegible]そぞろ

さむく氷世のうをもおかへまじ 日葡 万のうをこそさむく氷へまじ

そぐろそぐき

名を負ふ 世 神の名のごとく 伝へ聞くにおよびて

そうせき 四 つぶく〳〵とそぐろそぐろそぐろと人のうごくやう

そぐろ

高キヲイフ

そぐろそぐろおもしろきものなどさもあひたいとまをうたひ

たうひものう〳〵 平家 四 そぐろ〳〵と歩いてくだけちゆく

そぐろそぐろそぐろとちかづくやうなるもの トリカヘバヤ 三 こまかに今まで〳〵そぐろそぐろおもひあつかふけしきは

そぐろまく

夫木 世六 三月のなかめくるまに松をうつてそぐろそぐろとうたふ

そぐろき

狭衣 二下十九 いまゝでそぐろきたるもの

そぐもゝろ

枕 四 九月廿日ヨサキヤキヤマヰ女ドモ打ツドヒテ物ノトモ

学初抄 世七 そぐろ〳〵げにいとおぎそぐろもいと

そぐろく

。そぐろくが本語ナルベシ ドイマダ見及バズ 筆 世 三 そぐろくめのとせさをして物をそぐろそぐろまゐりて

そぐのく〳〵

ゐるそぐろめのとせさをして物をそぐろそぐろまゐりて

そぐのく〳〵 四 そぐのく〳〵とひきのけて

そぐのく〳〵 四 そぐのく〳〵とひきのけてそぐろそぐろ

狭衣 二廿六 そぐのく〳〵とひきのけてそぐろそぐろ

サガ花 廿五 おとゞのそぐのく〳〵とおしあけてそぐろそぐろ

よすがそ 十 そぐのく〳〵とひきのけて

注 惟 ソノハヤシトイフヤウナモノ

カゞ日記 十四 ひとうちそぐのく〳〵

筆 世 三 そぐろそぐろとうたふ

そぐのく〳〵

うちそぐのく〳〵とうたふ

そぐのく〳〵 四 そぐのく〳〵とひきのけて

狭衣 二廿六 そぐのく〳〵とひきのけてそぐろそぐろ

日記 十四 そぐのく〳〵とひきのけて

そぐろ

。雅望考ルニそぐきト同語ナルベキカ

落葉 一 ひとあるさまにそぐろそぐろとうちそよめきて

よすがそ 十 そぐろ〳〵と西耳をそばだてそぐろ〳〵

カゲロフ日記 ものごとにまぎれそぐろそぐろ

栄花 三十 そぐろそぐろとうちおもはせたるもいとをかしう

そぐや

李陵詩 スハヤトイフ心ヲ

白文 十 長恨の歌 破霓裳羽衣曲

まつむし 廿四 ほさきのあまたの人々そぐやそぐやとおぼつきまどひ

狭衣 二廿六 そぐやそぐやとうちおもはせたるもいとをかし

狭衣 四下廿四 いつくともなくそぐやそぐやとうちおもはせたるもいとをかし

同花 表 萩のあるよそぐや牡鹿なきめぐりてそぐや牡鹿なきめぐりて

夫木 五 そぐや牡鹿なきめぐりて

新撰字鏡 三 髣髴ヲカミソケミニクシトアレバ髪ニヨク似タルヲ見レバ上ニ出セル ソヨヤト同ジヤ 凡羽音ナドハ音ナキヲ夫ヨリカケタルヲ見レバ上ニ出セル ソヨヤト同ジヤ

そけ

。そけ 萩ノ古名 ソヨニ通ズ 是モ本語ハソヨ ソヨニテ同ジツヨヤ

万葉 廿 八千 大蔵経ヲ取替引換草又喋哦 古語ニ蘇々呼 延喜式 八千 大蔵経ヲ取替引換草又喋哦 古語ニ蘇々呼

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79

ガラス使用

そゝけたり【紫式部】また人/\ぎりことにおのれそゝけたるまでなむ侍りける【栄花】まあつてのさきしどもぞてつぞゝけたるあしのおひざまなど難波の浦にかよひて

そゝき

○僧ニイソカシク立居スルヲソヽクスルトイヘリ　ヒトヤニサトソトソ通音也【延喜式】八大殿祭　夜女能伊須々岐【万】十六九　我あいまさ人のさくさき　【四十四】西谷におかしこ　そゝき　そゝく　イ

あけそそくのぞくべかり【かげろふ日記】三夜のあけくるまでそゝきあへり【紫式部】十いふこひとありてそゝきの見えし【栄花】そゝきあかりに【まくらの】六　日さ先花ちるまでそゝきあひてみれど出さえて　かゝる所あれどそゝきのあらはに見ゆ【狭衣】二下九　立さまよひ

てまくにあまのさへひく事あひ給ひけるをのけよひなど波ゆるきつまにそゝきおのれつくるひさすぐきあのおも手などのまるにおも波ぐどもあけれぐーくえつぬ水ポーまど今やそゝきやむとおいえでつくくとみえへり

そゝぎ

○马ハ雨ソヽギナドノ類ニテ馬ノ足モテソヽギカケタルトバシリノコカ。モミクハ前ノソヽギト同クヤ

【六帖】三「くぐち川川流をせやまあつ谷の足のそゝぎをぬらてくるかな【口】下十五　落葉あえずしてそゝきあかりたるかな

そゝめく

【東やかた】十九　あがおくの一とるまにおきさわぐそゝめきさゞめかどるをみそ【東屋】二十五　こゑことにもふのどかなかろとふらびそゝめきありくを【拾】三十廿　宮のおとそゝめき聲ず【宇治拾遺】九ノ三　首引まはしておぬそめくふどよ目もくれかれども

そねむ

【まくらの】五十二　めざましきものにおとしめそねむ事【口】六ねこれをあへるか○体ノ詞【まくらの】十三　人のそねみ

ふくくつめり【古事】四十三　人のそねみをうくて

そねましく

【宇治拾遺】十三ノ十二　時く優れたる人を見てかく我かくる上ざまよりも見る悦きてあたくむ心ある人のそねむ様子をいふとそねましく思てえらべきく

そばむ

○夫ナルト【六帖】四【拾遺】五四「字やすげ長ををきてまるなくにやそゝめかるらんひとも心ありてうはきね

そばゆ

○夫ガラクト【六帖】三【慢撰】雑【いせ集】三「枝との三手とあの中ハなりそるんそゝめるあまのあやしさ見えぬれば

【紫式部】十五　三条法聖源勝「かつくまきやはまりてすうくちこのまあてまのぐくわたくめ涙のあた女

そとも

○其面ナテ僧ハソトモラ背キトモイヘリ【伊勢物語】五十四　葛城につくきくあにたちてそとものまぐにひたるるんとほすをく【詞花】別　甲斐「くもりがちなるそとものまへもあらくさがしみて見ばおしとおもひたまへのちをぞかへしきみそのなにおもひつきあへず【源氏】七　そのものぐさにおまさし候ひてるかなかたちより【きりつぼ】廿二そゝきいひてかかへりけるかのそのおりの

【風雅】雑　寂然「きくきあまみつくもりく風がふきむそとものの山も雲るへ行ありまて

そなれぎ

【ほつえ】廿一　ひさ木ちるる波にとそとものあさくもらおきあらまね

そなのまつ

○【詞花】ノ注そなれ木ハそなれ木と申す也【詞花】秋　能因「そよのくさふかげよくそとあいく秋風のそなれぎあるらん

【夫】十七　思わ「荒礒の浪よそなれ木浪もたくさえまあをざたくゆきる【口】下　俊恵法師「なのあある

そなのまき

【千載】恋三　安芸「そなれまつのそなれくておも波のなれたりぐさとてもおひらたてるみえる

【夫】廿九　家の茶　修理大夫顕季「よどとおりに波立つくその松のそなれまつの本のすべえや浪の名るまる

そなれまつ

【夫】大宮家「そなれ松梢くどくる事なれにい立ちやまなるなのさびしき

そなれらゆ

【東山家集】「さくらえ本とやし本ち嘘に見ればそなれらゆく夜もてやさも

そなふ

供

【夫】三十六　知家【現存六帖】「天の川の君おなみなまはらしてぬ波おしてそまろてあさひしつつる人【夫】卅二　俊成　永久四年百首　貴相「ここぞそかあるむしきの之の人のひのてあしくえてぞそ見ちる衣でうしとき【新六】一　後京極内大臣「きぬぐまむく人なけりつもの風かのてくつてもしもとをきくそなへつつる人【口】廿　顕昭法師「そもいは川のやまうつせのこそかくそにくそなへぬるよしこそ宮【万】十五「桃花やどう柳はまるすゞさ花に供を着るにおおくとも

そなふ

備【狭衣】四ノ十六　きぬへ三十二おもいとよくそなへたりまさにて

そら

○空　天ツソラ　【袖中抄】下　虚空【拾遺愚草】中「椛の花ちるゆめの夕月秋へ雲てすまるさ飛ぶけやのそらん【夫】八「かとくぎれ夕されの山のあらもてそなもちる立ち月にさくる【雲葉】下廿一【拾遺】三「さくらちるこの下風も

きむかふこそやまはあらじなまだ住ふる 新後撰十三「いまはさりともかうひ人のそらにまかせなよしやまつあらん

新千載十「ほとゝぎすまだ卯の花のかげやまそとひとつはあらじなよし月になくらん

そら 空。暗記 暗誦ノサマニテ空ニ知ル意 偽ル意 トリトメヌ意モ 見ヘヨリ推量シテ知ル 後拾遺十三「まこと人のそらにゆくらん

そらにいふ。いつはりのことを そらにいふことあれど 拾遺十五「そらもこそあれ いつはりのそらにいふとも 後撰十三「かく云ひてもいふてそらにもなし 新古今十二 物語 かへる人の空にまかせてくもゐ 万葉十二 人のいふ空

後拾遺十五 後撰十六「うつそみのかくれおほかるものなれば雲井よりこそゝらにしらるれ

「うづの子の雲井よりあまくだりにし人のこゝろ 信明廿三 新拾「ゆくりなきよはのうき雲の松

風よそらにむすぶ雲のうらもおもふべき

そら 空。ウハソラニシタル意 又トリトメナキ意 イタヅラナル意 言ニ通ヘリ

のくもどりもせ空のうへはいくたび かへるべく 玉葉十九 萬葉

古今十五 秋別「秋風の身をさむけてもあかぬそらに人のそらにむかへん 六帖

みよしのゝ山のしら雲 八重九「夏衣たちきるそらのあつさにてかゝるそらの雲にもにたり

あまくだりける雲のうへ 空の 六帖「花のあたりのそらをなつかしみ

そら 空。イタヅラ イツハリ 空ニウツクル 後拾遺十 新古今十二「ひとりねのつまどひいかで心のうちのあまのそらにてもしるらん

そら 空。虚空ナル心ニテ道ノ 新千載廿五「ひこぼしのつまむかへのかぢのおとに空をみなれてとりあへん 小大君集

半拝ナリ

みかきもりゆめのまやとあまのそらにて潮をみてくらす 四廿三「みをつくしそらにて

黒雲のそらのくろくらのそらまよふらん 四廿三「大空のくもの 中務集

「かみなき雲のそらのくもゐにまてもあそびのみちにしらるゝ

そら 。アクガラセテ ウハノ空ニナス意 清輔集上「里わかぬかげもみえずさきの時なくむかふ

貫之集上「秋風に立ちぬるそらのなかぞらに 同「うつせみのよはかなきものと

そら 。オシハカル意 ヲモ 月清み思ぞねぬ人をそらにあるかな 中務集廿「おもひやるかたのかたえのそらもなし

そら 。ツクリゴト ウソ 新古今集廿「あまのがはそらの天川かはらなくて月日ふりつゝ

夫木集下「人しれぬおもひのそらにたちゐても 重之集十六「ふくかぜのおとにのみきくあまのそらゆく雲の立ちゐる

そら 。虚空ノ実モナキ意ナリトイフ 元のそらもこそまさる 古今三「さみだれの空もとゞろにほとゝぎす 拾遺恋二 重光「かく

たかくきる ゆくへしらぬ 続古今集廿四「きみがすむやどのこずゑをゆくゆくも かくるゝまでにかへりみしはや 小倉集

「そらにこそつきぬる いすゞ川 ききのわたりのあはれなる 後拾遺雑二「ふるさとのそらのみかへりみられつゝ

まつにかゝる月 拾遺四「のべにつゞくみのうへもなき

あまの丸やの離れ 四十七「ふくかぜの 後撰一「浦こえて

そらいろ 空色。蒼天ミドリノ色ヲイフ 赤染衛門集二「あふことの さるもの ゆえにてきえぬ 後拾遺十七 そらいろの紙のくもりたるに

附

そらのいろ あさ廿一 夫廿二 そらの色なるうすやうの紙に

そらいき 偽ル 宇治拾遺三 永久年百首 仲実「そらのきるよりそらとのぞかむとつるゝ

みそのまことひきしれおほやけかくすらんとこころへ人あつまりてころしてけり

とひて妻にいさかくまいりて今は五日になる いきといひて そらいきをして何をか

にてぞあるらん

そらおそろしき 虚ナル心 ソラオソロシキ也 天ノ下 源氏 後ノ和 世にあるまじくそらおそろしくおぼえて かゝるきは

そらよ 皆 空ノ 手ニ出ス

そらにめつきたるやう 。天ヲ オソロシキ コトロニヤ 源氏 下八十八 あつまりてあのめづらしげなりけるにてものをみたるやうにおもひてぞありけると

つきすく目つきなるやうにおぼえて

そらほめ 〔拾玉〕五 あのよそよしき なまめかしきおもひ 木本おほえぬ 「さみだれのくもまがちなる雲のあひだをながめてまろうどぞなかりける」

そらうろたへ 〔堀川百首〕秋二 西園寺殿御百首抄二空取トハ空ニテトル也常ニハ地ニオトシテトレドモヨクトル付ハ空ニテトル也大鷹小鷹ヲトモニアルベシ云々 〔堀川後度〕野行幸 仲実 「あらかさまにいでしものゝふたつきにそらうろたへするかな」 〔夫木〕十八 六百番 家隆 「大空やそらにとらへてそらにとゞむる」

はらはる 〔堀次〕〔夫〕十八 慈鎮 「おもせつるまつの霜をもおろべきそらにそらにとゞむる」

そらをながむ 〔古今〕恋四 さうなのひとしさね 〔大和〕六 忠峯 さきに人のこゝろにかゝりけるをそらながめつゝいふ ことゝもなきてよめる 〔竹川〕廿四 「よそぞ」

そらをあふぐ 〔東宮御記〕廿七 ひるまもそらをながめてるるのをの 〔あげまき〕六十一 むねのさはぎにうちながめて空をのみ

〔さのう〕十六 八雲ノ上ウセ玉ヘリ 空をあふぎて 〔あげまき〕今七 ネクタリノ歌 あふぎて

そらをあふぐ 〔後拾〕別 成尋法師の母のかきつけしもの 空をとこはさながらなけれど 〔源氏〕三月尽 澄源 空をあふぎてまづなくらんいく雲井 〔葵〕四十一

〔よもぎふ〕廿四 かくあやしきあらをとこ 空をあふぎてなげかるかな 〔かげろふ〕四十 わかそらのうちにてなかやひさなかに

そらかくし 〔宇治拾遺〕九 空をあふぎて 〔拾〕雑一 小兵 「みわたせの空のなかにもまつにうつろひやかげる月」

〇天下偽リトヨ兼タリ 〔詞花〕雑下 登蓮 「世の中の人の心のうき雲にそらがくれする有明の月」

そらだのめ 〔後拾〕雑 〔かげろふ日記〕上四 「さぞあらむ」 〔夫〕廿九 慈鎮 「今ぞしる」 〔拾玉〕三 「雲さえてひとつこゑそらのなごりにはやかへるらんゆふぐれの松むしの声」

そらだき 空炷 〔夫〕七 殷富門院大輔 「身にしみてそらだきものゝかをるさへ なほあやしきにおもひけるかな」 〔拾〕三十四 〔花のえん〕十三 そらだきものいとけふたくくゆりいでて 〔宇治〕九之一 屏風をとりて

そらだきもの そらだきのかをりとゞめて 〔枕草子〕三ノ五十一 清輔 「いづくより」 〔夫〕三 仲正 「身にしむるそらだきものの香をかへて」 〔詞花〕秋 顕輔 「天の川」

そらね 空寝 〔うつほ〕七 とぞうちそらねして 〔花のえん〕七 そらねをぞしあへる 〔うつほ〕上四十八 〔まきばしら〕四 そらねのしきてのうへのうたひて 〔枕〕五十五 男ノそらね 〔源〕十一 十六 人のあるにうちきこえてひきあげつる

そらぞらうき 次ノ空ネノ不二 〔拾〕雑上 女のもとより

そらね 空音 〔後撰〕雑二 清少納言 「夜をこめてとりのそらねははかるとも よに逢坂の関はゆるさじ」 〔新古〕十三 伊勢 中納言とふ人のあづまうたに

そらな 空名 アダ名 ナキ名 共ニ同シ

そらなやみ 〔後のうたえ〕九 いとそら空なやみしてうちふしたる

そらなげき 〔まさきかつら〕十四 〔金葉〕恋下 「そらなげきしてもやあらむ」

そらなき 空鳴 〔後撰〕十 「天の戸をあけぬくるよりそらなきの声」

そらみつ

万四十二「むかしのひともそらやまとけくさくよるべくそらやまとけくあめのと 古八廿二 七冬の川よりけくそらやまとけくみくよやそらくもへるへきものを ○ソラハサマナドイフ詞ニ用タル集中多シ今俗何ゾスルソラナド云 あけまき二 卒 みかさをへもそくちをしくくりすれんそらみ〜 あつし 五 罪なくて見るよあすりつきとくろあえとすろの家をとする道さろひをさりてあけ道やまをそらなくるげきすよ 宇之 大 浮拾 五 ろうそのみのあふをふき君を見むものゝまのくりそらぞるき 散木 上廿二 秋上 おりくるる月をえてよめる てる月をとうえる夜ぞちる世のうへそくでするる身とや 拾遺 恋廿 波の上にうくて小舟の吉よりくれ行空するも〜我よりつれて 堤中納言 玉の緒 卅三 大納言殿むすそらもなくろくてやがてとまるべき ちまりそ〜汐のとるのすよ 竹川 卅一 いろいろとのこそあめ道ぶふむそらもうをくそくよひありきて盃もさして 元スケ 廿六 詞花 恋下 顔をふくく路をそらもるりしきよくよりおく家に浮あるらん 夕ぎり 八「山里の声にそふる夕きりに立出んそらもなきるに卅て 枕ちゆ 一 くちてあつくそらもみ〜 三宝絵 八 三宝のさきひひそて心のそらちく却し…ありて

○附 そらもちるほど

紫のみ 下 廿五「まにで雨くそらもぬる道あはれくよいづる声のよる神なり。前之 元浦祭 あまりよい ヨメルカ

○附 そらもかきくらく

伊勢のうき八 九 そらかぞひちひとくるかくるて舟すでくもまをおくしくこそ行りあぶべるそれ

そらむね 空胸

カゲロウ日記 中 行 丼 にぬてもく我のうけるべきりつのむぞそらむねをするへまでめろいよ人へ合らん

そらのいろ 空いろ

序二 あつし 三 右のの風まなぬるのきつきつで月はよちやめそ かゝらさし出べくもあくめそるのさぞに

そらのみだれ

古 廿七 あかぞあまやるものとあくさまうて見れもをまねくそらこぞれ

そらのごひ

まのみ 卅六 夜のこひそてさうさまのこそきつまね

そらあかさ

清拾 六四 紫式部 「たがうつるまそれのあかるあやは人の空あおいする撫の花 壬生三 恋上 「契やし〜りまと とりてみがちのむぞそらあかのさるまの秋の月 ゆうたれ 十四 ぞらあかのしてるべきする道よまいり

ありく 日記 下 七十二「うぶ見てくあくぬきまうの道くもとの道ぞそらあうぞ三年ろ暮へ愛よくありて

そらあくびて

初秋 廿四 伊 狂 詞ゆうくめ敷りのあくをのろのぶまもえく京都か〜とそらあおきかあもんなりやとて 笑ひてやをてあひ

そらおぼめき

○シルコラシラス顔ニテオホツカナキサマニカヘナスヲ云 蛍 光つぞうくそらおぼめき〜つ〜世の我まづ 十列松 卅 ちきまのくきそらおぼめ元のかどまめりに絶ずく疎うて

そらおそろし

サガキ 十九 常まりの中ちまにおぼろるかたをなそろしう覚する 帚 四十四 ちぢのとそはまさのしのおよつもあ〜 てふみやちくあふらんとそらおそろ〜く 美濃 廿九 法師などのひあるとはもそらおそろ〜くつま〜 くもの あつま

そらぞらめり

廿七 兄義ハ八十八 イサナフ不ミ 若ろかの人よ奥〜てきるかのありのとしくろんとそらおそろ〜く覚す

そらくもり 空曇

彩台 吉 信実「あやぞら家をりしとおかれのの雲のそらぞくりまうく 冬の雲 いろ〜をく(あまり)くくり〜とも〜そこらぶ[illegible]

そらまめやう

源氏 中 四十一 大将才ドノ使ニテ東宮ノ御返りコト本キカヨフ不二てもるど伏ぞすよかどよ

そらごと 空言

欽明紀 七 何縁ヵ輕ヲ用浮辞ヲヤト 万十二 四十四「思ちぶ小野とに声の[illegible]のもおまんと元 古 十一 廿八「すずいろ小野とに声のあまそちでといろうをよひて見めそれがうそん 拾遺 雑恋 よみ人しらず「白雲のかうるそうごとよくえる道ぞ日つきまりぞ見えかまそらん 土左日記 そらごとをして 源氏 卅 そらこともつくりなからひのよ 蛍 卅 そらごとをすりよなそ〜ずのおもひから 東宮 十六 人の〜我よあの 古 十一 十年「思ぶそう小野とに声のあすそらでといろうあ〜 まる人をと山のふ見ちよしてろろる 東宮 卅 そらごとをつくりなか ぐろうすてるとそ出くべるのを子とさるとのがへそうごとあり〜たぞこうまそろ 中務ノ集 廿 むとなちきてるとあり〜ぐらの心うまぞのそらでよぞを人の我きるまん

そらごゝろ 空心

枕 二 中 むりあるあや〜や様にてくきすくる[illegible]あるんとのすくへ犬が太ねろむひとまり〜なるに覚

そらねんへ 空眷

国ゆずり 上 六十五 弾あの宮の 此れ心くり侍うときとろきうりくれ侍ときとくろ〜人る名よ そらごゝろをし〜なひつきうえと侍ての人ぞ

そらあめ　空雨　[万葉]十五　あめびこう　鄙ものの　なきくそら雨　こと苦あらすも

そらゆく　空行月　[狭衣]三上　世　[拾遺]雑上　[後拾]雑二　[風雅]雑中　[夫木]四　[万葉]十五　[古今六帖]一　[源氏]桐壺　[狭衣]三上　[拾遺]雑上　[後拾]雑二　[風雅]雑中　[夫木]四　[万葉]十五　[古今六帖]一　[源氏]桐壺

そらもくも　空行雲　[宇治]三十四　サキニ　空イキト出ス

そらもの　空物　[散木]下　[夫木]四　[万葉]十五　[古今六帖]一　[源氏]桐壺

そらごと　空言　[夫木]四　[万葉]十五　[古今六帖]一　[源氏]桐壺

そらめ　[拾遺]雑上　[後拾]雑二　[風雅]雑中　[夫木]四　[万葉]十五　[古今六帖]一　[源氏]桐壺

そらもの　空耳　[拾遺]雑上　[後拾]雑二　[風雅]雑中　[夫木]四　[万葉]十五　[古今六帖]一　[源氏]桐壺

そらね　空寝　[源氏]桐壺　[狭衣]三上　[拾遺]雑上　[後拾]雑二　[風雅]雑中　[夫木]四　[万葉]十五　[古今六帖]一

そらあひ　空逢　[万葉]十五　[古今六帖]一　[源氏]桐壺　[狭衣]三上　[拾遺]雑上　[後拾]雑二　[風雅]雑中　[夫木]四

そらもの　[万葉]十五　[古今六帖]一　[源氏]桐壺　[狭衣]三上　[拾遺]雑上　[後拾]雑二　[風雅]雑中　[夫木]四

そらごと　空事　[万葉]十五　[古今六帖]一　[源氏]桐壺　[狭衣]三上　[拾遺]雑上　[後拾]雑二　[風雅]雑中　[夫木]四

そらひこぼし　空消息　[長秋]四　[万葉]十五　[古今六帖]一　[源氏]桐壺　[狭衣]三上　[拾遺]雑上　[後拾]雑二　[風雅]雑中　[夫木]四

そらそそ　空逸　[大五]鷹ノ部　[万葉]十五　[古今六帖]一　[源氏]桐壺　[狭衣]三上　[拾遺]雑上　[後拾]雑二　[風雅]雑中　[夫木]四

そらごと　[万葉]十五　[古今六帖]一　[源氏]桐壺　[狭衣]三上　[拾遺]雑上　[後拾]雑二　[風雅]雑中　[夫木]四

そらごと　空乱　[孟津]二　空酔ノトリ　[万葉]十五　[古今六帖]一　[源氏]桐壺　[狭衣]三上　[拾遺]雑上　[後拾]雑二　[風雅]雑中　[夫木]四

そらね　空耳　[拾遺]雑上　[狭衣]三上　世　[万葉]十五　[古今六帖]一　[源氏]桐壺　[狭衣]三上　[拾遺]雑上　[後拾]雑二　[風雅]雑中　[夫木]四

そらあひ　[万葉]十五　[古今六帖]一　[源氏]桐壺　[狭衣]三上　[拾遺]雑上　[後拾]雑二　[風雅]雑中　[夫木]四

そらあひ　[万葉]十五　[古今六帖]一　[源氏]桐壺　[狭衣]三上　[拾遺]雑上　[後拾]雑二　[風雅]雑中　[夫木]四

そらひこぼし　[長秋]四　[万葉]十五　[古今六帖]一　[源氏]桐壺　[狭衣]三上　[拾遺]雑上　[後拾]雑二　[風雅]雑中　[夫木]四

そらそそ　[大五]鷹ノ部　[万葉]十五　[古今六帖]一　[源氏]桐壺　[狭衣]三上　[拾遺]雑上　[後拾]雑二　[風雅]雑中　[夫木]四

そらごと　[万葉]十五　[古今六帖]一　[源氏]桐壺　[狭衣]三上　[拾遺]雑上　[後拾]雑二　[風雅]雑中　[夫木]四

そらごと　[孟津]二　空酔ノトリ　[万葉]十五　[古今六帖]一　[源氏]桐壺　[狭衣]三上　[拾遺]雑上　[後拾]雑二　[風雅]雑中　[夫木]四

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79

ガラス使用

〔さころ紀〕五十四 昔をこそなげきておとろへたるありさまなどかたりて〔よるのねざめ〕三 うらめしきものはおもふにそむきて
〔さころも〕其六 つらかくなりまさりそむかれぬるを〔拾〕雑賀 大臣家にてつくりあるさまに為信「よしさらばうしろ宮の花の
見あらはさるゝハの袖のうげとうらむれば〔にはのをしへ〕十五 此人こそもさいそめて〔かげろふ〕廿五 うきのなきをそめて〔さころも〕下十五
あらぬ月こそあれ

そむ 染

〔万〕八十五「引よぢてをらばちるべき梅花袖に扱入れつ染ばそむとも〔うつほ〕四十三 世をうき花
ならぬ色にそめつけたりける〔さころも〕上九十 此世をそむきなどにぞりなるやあらん〔拾玉〕四「ちかひてし池のはちすのたえまなき
ざりそますならむもそむかれる〔新撰〕雑下 為家「雲の上かゝるふる池の心まゐりそめつることと思ふは
くらべん〔拾遺愚草〕下「秋くさてふきからのはか山姫のそめなる色のうすきそなり〔続後拾〕秋 為世〔新撰〕
まる中務のいちのちそめてとる世の浮のあくのそと〔新撰〕雑上 定家「うつくしくも見えくまのあとの山そめ
きなそめしのをぢや涙なるらん

そん 損

〔為家集〕廿八 物の書あるとかいてをれば多くの損あり

そんち 存知

〔家集〕一廿八 既に十三年になるらんぞる者が今ハ礼あたり存知してそをふるまふべきを

そむ 涂

〔新勅〕恋下 為経「あまれるがあらくの浜の浪をきて袖ぬらくとそかくそれそん
〔古〕恋四 恵慶「うずもるるには人をそむ〔しらうら〕みれんとハあかりおなくて

そんわう 孫王

〔孝徳帝王〕三 孫王の位につきたるよしを仁天皇よりして深く思召て久しくなるなり
〔続紀〕三十下 明日香親王薨云々 親王上表自請除親王号同是諸臣不見許更祈
所生男女賜朝臣姓感其懇誠乃聴之孫王賜姓従此競数之〔さころ紀〕十八 うちものの次きにハそんわうの御
すゑの例あまたもあるぞそのことども〔久二〕中五十三 是ハの宮のハそんわうがことにて何かまいりくるん〔さころも〕下十四
兵部卿の宮の御子ハそんわう

そむく

〔夕〕五 そむきあけ世のありさまをのがれよとハおもへれど〔東ぶかり〕大 ふとそむきかくるべしかさなたらむハおもくれど
〔故堂関白集〕「おひしる人をしまんが世の中にそむくかくもおもへぬこそ〔さころも〕十三 又ものゝかなしう
うらみあるかんと〔ゆうぎり〕てそむきらしそむかんとてもこれがたうしてかへりなん〔万〕三廿二 背のめや〔同〕三十九 背に見そむ
きけしきわれぞ〔よそふかぐ〕四「うちよりハあらぬ夜の中のくへてそむくうちにおもひこそやれ〔さころ紀〕廿七 かくそありゆく
世をそそむくなれぬうとましうるさくしがたうかうちくせむきるんとおもふしくると〔浮〕十夫 宮このえん
うき身ゆへまどふもとらしらんとてそむくあるべかりそめてそむかるるぞさて〔夫〕三十三
〔万〕三十三 赤人「むかふのうら路年に小舟乗出するをそむきつとよりさきしまを〔為のいりく〕見ゆかひるるへくあやしくそむ
きへくよるさにそびるふれものがなる〔夕ぎり〕四十九 そむきしくまるげさまうらうて〔夫〕廿三 村上天皇内大臣「忘れなでそ
そむきたまひ見ゆる山へのうち時雨やおくの霜かぐるらん〔月〕上 光俊「なきさとの浮世とるとて今うれんぞそむ
きるのうまさむあまりの後の山〔こちをる〕十三 かの世にちからくれてのち世をそむきて見るらん〔まぼろし〕六 ようやく
にしほ秋のいろでおたにけらんのはわのそむかうハもひたりけるひにしは世のそむかうさところばら〔新古今集〕上「いひよ
世をいうようすがき世の中をそむけべるなしまなべきをさうし〔垂仁紀〕五 曲上兄王之叛状

そんじや 尊者

〔きよまく〕八 大饗せさせものするに一条の左のおとゞ尊者にてまゐりものするも〔かげろふ〕上廿三 人々の
〔為家集〕是ハ大饗の御尊者で後の紀のコト文志見傳下ニ

ぞう 族

〔竹川〕初 是は源氏の君のぞうにもまさりたまへりしはの大饗ところにありしなりとて左もの〔同〕四十 ようこび
しぬへる人ぞ此のぞうよりみなのひとかさきところあひの子ありける〔うけら〕卅 大臣家の
ひとりひとりありすまくて限りもなくいとふるぞうらまうすはいちやしうなりにける此ぞうことばにはしく
いさ人ようもきみあまり家の人中まうでてさへぞありける〔国〕八 太夫の塩とて祝儀の宴よぞうひろくてかくさまは
つけて六さそあの〔うけら〕甲六 中宮羽大将もさやうにハいまで世中のぞうゑらくハうきなる事らく宇治の宮のぞう
の御みどうかまへるとところいとくうしとおひての事ひしうそのゑに〔やどりぎ〕廿三 いとどう念ゑてかき

ぞうるなほかやうなるついでにはやすらかなるべしとぞ申さるゝ 後カゲ上 廿七 強うこそぞうにものしたまふ心の道は女はさやうのかたをさせんもあさましうなりたまふにや申べかりけれどぞうく 同 下 卌八 女はたゞ翁のをしへにまかせてあらむをつかへまつりすてたまふべしなきぞうなうはつくまらるゝさまのさまなるものならんとぞ 同 四十一 娘琴ヲヒク処 琴の音もをさなきほどにおもはれぬなくね合せたるやうにて内よそふらせて風のつうそうなるべしさるの人なくてきかんとのたまふ 蓬 世界の人物にぞうたんの人にあらしまさに変化のものにて天の文字もあらぬさまにてぞありけると伴はそ 手習 六十五 くはしう世ちはぞうぞうでらのすぐる

そうして きのふけふ 廿六 母なくうしもとおなじくまうしてぞうでら申すぞ

そうう 僧 そくらく 廿二 ゑやうへにあしこそんとのまうし 参せしと あさきた 廿四 にはけあがりて雅なるやうせさせものすぐ僧ぬせるどさまぞどと

ぞぞう とはずがたり 六十六 かのひとつちのふどもはかうちりたゝるは参人にあしきなはつるさのぞうにあしるどにさのりのひとり 古 雑下 文屋の康秀ら三河のぞうになりてまう あふひ 八 左衛門のぞうの心身に参ぞうなるどのまうとのはうのはにもあるぞよ参りうは右近の参人のぞうつうかさうの官 河海 右近蔵人ノゾウハ蔵人右近将監ナリ 司コトニ皆カミスケゼウサクワンアリ 近衛府ハ大将ハカミ 中少将ハスケ 将監ハゼウ 将曹ハサクワン 六位侍将監ニナリタルをす左右近ノゼウトヨブ

そうかう 僧綱 枕 十六 僧綱の中に威儀具足しても あらしまさで 注 僧正僧都律師をいふと云

そうばう 僧坊 うらむらさき 廿二 さうしとそうばうどもあらまほしきさる

ぞうるゐ 河 緣者 抄 族類也 細 親類なり

そうぞく あさぎり 廿 さうとふあやしぞうるゐにていとやんごとなし 後カゲ上 十 一天の後ありてあなりよ参りてぞうぶべきよりあんありさる

そうぞく 僧俗 枕 十九 るも 初まて一切経とよすの衣の宮なよひと参うくにつれて僧俗上達部参上人

地下六位なとまでまかでてる

そうづ 僧都 うらむらさき 十 そうづあるまつりきこえさせんあらんにやさぶらふ

そうめいしん 聰明心 後カゲ 上 廿三 さてかくらかくそく鬼とくのわり聰明の人とまもくなまてうらびそれは あらけなくと 枕 廿五 二月官のつかさにあかうぢやうとよぶるまうけはつるまそるにあらんまやくでんもいるなる人とび孔子などの像ヲかけまつりてまうるなることそうめいとて上にもをよにもあやしたのなどかなうけまありて参らまする 江次第 五 寮官居聰明以折敷高坏等羞公卿 注 聰明者胙也 胙 字彙云音祚祭福肉也

そうぶん 處分 うつほ 上 十三 あしかあるほかくとがくべいはの方にとらぜて一まゐらせものひてそのつぎくさまらん とまうてまちにはそうぶんともあるなる 同 上 廿二 そのそうまうらん後弟子どもにちりぬるなく人よりかしそのうちよそうぞふまてきて 翁の 雑下 秋のいろあはなどは参ぐ人よかしぞうぶんもありたることどのちのもんのまうしきてはるそうぶんしのちひて 竹河 三 うせけるひろうんのちのるどもまうし下かへらくなるをそうぶんのなかにまもに中宮のはうがまよくまへなまりうひそのはべ 栄 九 くきてはりゆかし 一条院のぞうぶんなりしまとそうぶんなりしまはぞうるべてのかのさまなるぞどもにまよるでていくうもあぐるしうなどくまへんでんの上のはうがにてぞありける 古事記 三 覚猷僧正臨終時可處分由弟子等勸之 国ユヅリ 上 八 太のおとゞいとといとおしとおほせきてなさぶ民部大輔をぞせ給ひてはそうぶんのさのちきぬる カシハ木 上 六 はそうぶんおひろくおもしろきさまのきよ

そうでう 双調 つれ〳〵 五 すのくはひどもてまたそれぞうるるぎりそうでうるなくて

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79

ガラス使用

の

そうぜんのまつり 僧膳ノ料 [illegible]

そう…（奏） [illegible]

ぞうぢやうまん 増上慢 [illegible]

その 其 [illegible]

その 園 [illegible]

そのかみ [illegible]

そのかみ 當時 [illegible]

そのほか 其外 [illegible]

そのゝち 其後 [illegible]

そのなか 其中 [illegible]

そのこと ゝのこと [illegible]

[illegible]

そのころ 其頃 [源氏花宴]六 宮はその比まかでたまひなむとおぼせど ねさよがけは今ありとそのものとも見分ずやこと ありぞてうちやうかずのあかりかくらうあらうげなうさ

そのもの 其物 [夫木]十九 [夫]卅二 ほととぎす 下直 その中にもとむるかな ものの音もそのとこ

そのところとなく [夫木]下 あともなく [千載]雑上 生備「今よりは その月ぞ さきのとことなくて

そのひと 其人 [後撰]十五 女ときゝて その人とならねば [よもぎふ]四 にて おもひたえ とぶめありけれど [拾]世家 あるべくひとびとかくそのとこの人あるかな 都人トミエズト之 [えとあ]四十二 こなたの人 そのひとの

そのまゝに そのまゝにあらぬ [宇治]十三 あくかれそのまゝに [和歌古]鳥羽院 さかぐ ものあはれなる

そのかみ [夫木]十二 秋「そのかみ」 風中のこゝろばへとて 国ふ [門]十 [宇治]一 [夫]十二 「今より」 [門]十三 [和泉]雑上 [和歌古]雑二 ありけむ そのかみの人の風のあはれなる

そのうちのひと [やどり木]四十九 あまたの人にて …

そく 職 [薄雲]四 その [門]中 十三 宮の [夕]二 中十四 [ミをつくし]五 [たけひめ]十五 [わか山]三 [四季物語]五月

そぐ [ゆふ]十七 [さかき]十一 [紅葉賀]十七 [さがみ]十九 [うけひ]廿九

そぐ [擬]十四 [宇治]四十九 [東屋]大院 [花宴]十七 [夕がほ]十一 [あかし]十

そぐ 剃 [桐壷]十 [廿]十 [宿木]

ぞく 俗 [浜松]三 四十四 [宿木]上 [宇治]四十二 そく きおろし とそぎられて いまだ俗にてあり

いせも　今年ぞくらうせんでうつらあまたく来りなまりて

そくらう　贖労

東屋十三　おなじ大臣よりうんぞくらうとらるへる事ぞあまたありおぼつかなきるを。○守カ金ヤトク助ニ任ルモ之トイヒシニ云ナリ　贖銅ト律ニイヘル是也　孟　物ヲ出シテ官ヲ求ムコアリ

ぞくさんごく　粟散国

吹上下　四十四　律教伝　さ粟散ものの大国よりかくはじめてぞくさんこくのうちまで窒くとらくれてえぞらなかり

そくさい　息災

たぐひなき　卅四　此世よりあるべきそくさいとなりしる也勢ありがわの世のうちにもすあれとそあり府
つうひ　おこる誦経にしなかとそなく
拾　十九后ヨリ紙ヲ給フ聖人ヨリ紙ヲ得テ　持　世の中の旅て
あらかうしよ府あるべきさん施すせてなく紙ヲ給フ清持　なうかうをし此世へぞくさいのまつりなどぞ
さえをしくるみんあるとやせべ后祠なくきふらせ人すい持ちいろいくやうこぞくさいの祈するをとぞ

そくゐ　觸穢

禁秘上三　一一，時恒例供神物　ク三中五十六広住明より七がとうすのそそくゐあ
とありてとありべおとうきするひでならずと向えもす人べ男と思てまへ宮より広住へ
ありやとそかそのの仮物あつらべえかたがすべきどうかりなでて来ものぬ

そくひ　續飯

うちひうき上之二其白えきぬとぬひ貝ハみなてそくひなとしてすろのやうにしてひとをう
びう　つまく　業腹ふとこうにそそくひをうちすひてうなそひらのすそのれぞ　江次第
下四十八　具續飯来押之　批　八千をもきかふりちよ人への家とえてうすてなんどうるそくひなどえ玉ひち
あくうろわどなりとろ

ぞくびじり

蜻蛉表　四之三　るの毛先とそりて足手もとり舎人がそくびそとつきき青房の舞人追ぞもて
宇津保家　五十　るまかりのぞうくぜえもとそくびつけとはぬきうくわどここそあるうし

そや　其也

えもひめ十二　怪ひびやとてうさずらくそのつけこつるろ
拾拾　雑五「えもしあらし山あ来まを見えてびやうりつきしきそや空まそのここあ絵くなるらん
小町井花

そや　征矢

万　廿四　かひ曽前のそよとそうつ手でうげきつうすも
和名　十三　唐式諸府衛士人別弓一張征箭卅隻一一　和名曽夜

そや　初夜

うつほ初秋　五十五　あるごかのの人の堂すまうすを待るころにうんそやのまごつくぬ待ちぞ
さくそれとぃひしうどもおすもいすうくかけのくらう
雲図抄ろう書　初夜自亥二刻至子二刻後夜自子三刻至丑四刻
ゆるぶれ　卅八　ちとのそやもそろうおそ紋ひ

えそくのとくめやうろう

そまいと

夫　廿一　遠渡　新六　さもつるあめの那ちそまのへいいあさしく人もまきとあざうろり

そまやまびと

杣山人　堀河　古　放事「久く宜てのろかやまずくる宮木ひく杣山人も友よぶかなり

そまびと　杣人

○木ヲトル山ヲ杣トふヨリ其人ヲサシテ杣人ふと　万　七廿四「ますぞぶらつくる宮木へのさくをすよかかりかくなきと
くしてなんめやも
古　三三ケシ　東之「杣人ハ宮木引らし足引の山の山をよびとよむなり　因廿一
散木　七五九「時ぞるあつまのそまの杣人よ
あひちもそひて宮木ひくかなり
西行「河合の手きさのかそてふいし　ぞくそまくのうふきてくかるらん
万十七廿七「宮木ひくいつこの杣に見る民のやむ時をなく戻すそろろうも　和名　六坊程式云

そま　杣

甲賀杣田上杣讃宣萬　夫木　廿三　実方「神のもちかうきの杣はまうくねどもくらうすみなまさけっるせん
盛衰十三ノ三社頭破壊顛倒之時ハ当任国司経官奏点国中之杣可修理其間材木檜皮等不可運
上京都ニ　云々　万十二　新勅　真二「宮木引いづその杣にまつ民のやむ時もなく恋ワたるかも

そまぎ　杣木

夫　十五　信実「ぢ恋のくのひそすまずうるとそかかやるうぎの杣木来らるらん
あやふ　雑上　光経廿六会「世の中へいづくの杣木の見民の古をとさうすり引かさきなん
夫　廿一　遠渡　新古「ぞねぎくの家のそまぎの綴よろこまおぐでまそとし　ぬるそとうしんの

そまかくし

夫　廿一　建長八年　右家々「そまかくしと風さとうらし　なるの山の檜原のそよぐきるのさへてし
ク　巾　久安百首　左兵衛督家小大進「ろくそれこの室山のそまかくしまずくるあたらし　ず妹か

まつらん〔古〕廿八 寂蓮「さらでだに音の蓮のそまくだにあまた年よりもみぎはの風〔古〕十二 堀川院御時〔千載〕秋下 公実
「そまくだにこころやまづくらむとなるはのへまどろまぬ夜のおもかげもあらなん〔万〕仙覚注三ソマカタハ林ノシゲクシテ
杣守ドノ形ノ如クナルヲ云トアリ 東子呂ノ説三八〔万〕一綜麻形ハ三輪トヨムベキナリトイヘリ

そまやま

杣山。あさきりのいぐ(に) そまかは まきをふ〔月清集〕下「冬は猶こぼれそでやをかの杣山川をおろすいかだ
〔拾古〕雑上 俊成「そま山やまだ年もはなれゆるかぎり知らぬこずゑのもみぢ葉のくれ(ぬ)と
くらくらん〔堀太〕秋 師時「秋雾の杣山川にまとちぬまだ下まかへこの末のこずゑまで〔夫〕廿一 杣 家隆「いつかきの
のまきの杣山こえりしてこの世もみだわぬ冬のよそに(も)〔夫〕廿一 老若歌 自歌「日よりへくるあさぢ
このそまや川にも宮木の多くるぞまた五月雨のころ

そまくだし

〔夫〕廿八 作実 加茂歌合 教房「そまくだしのすま柳何かるも上は雪げのみるもあはれなりけり

そまつくり

〔拾十〕大嘗会 風俗 よみ人しらず「杣つくりかきたる蓮のそまつくりあまさび庭のかひにぞかかる

そまもくそく

〔続後拾〕雑下 母のためひなむべりけるにつけて 雑下 法浦「かくしまやたぞの中山をまもそくつくりたきわよみ世のみとくら
〔続拾〕雑下 法浦

そふく

素服 美福門院かくれさせ給ひける年素服の人あまた参りあひたりけるを見てよめる

そけ

。妹本避〔古今〕恋二「のちしられといふなるつらさは我ごとしかしこそぞげてみるね事よそ〔万〕廿三 夫甲友
。除去く 我のゐりそぐ見ても〔古〕十六 廿八 かくもの(と)むらうるそげら〔六帖〕み園
たてんしそとかくまうれ〔一〕つくるとも(た)八 川社 かくそけへ刈りのくるあり〔蜻蛉〕上 四〔六帖〕一 沢辺る あきまき
かまそげあやかまだ(さ)ぎくひげてのやふるきさん〔古今〕五下「きくちか〔六帖〕夜のひもとどめそげてあさて六
只一萩の(に)〔允恭紀〕八 六 蓮さげてトアリ

そふ

添〔万〕九 廿七「大海と見えてみつなにそひてあてきすらの川風をこふるがささやけさ〔きりつぼ〕廿一「ひどくりく

むしのまるさげておきしちづまつる年をそあるやみの上へ〔古〕廿 かくいまししき身のそひ侍らんもいとくるしう(る)
べしまくらみくらてまつらでも遂もあはれと思ひ(ろ)めくり〔彩千〕雑中 為定「ひとつのうらの(たのまくよ)の八ぬかよう
そふべき玉のひかりをそでいる「しらく」五 秋来ぞごとちそひのてあはれて〔古〕四十六 ふそあはれく世中そへる身を
あるまじうづけて〔思ひがね〕廿五 うとくかくそるやむやそひくるして〔古〕六 ひあてにそれかとぞ見る白露のひかりそへ
たる夕がほの花〔古〕廿六 そひくうつる女ハいろまよの(たまく)ぞ〔風雅〕哀五 よみ人しらず「思ふ(と)い(ふ)(事)の(し)(る)(し)(も)
しとそあるらしきことやみてそれ

そこ

其處。人ヲサシテ〔おちくぼ〕夫 帝降二 そこそとのこころんかくるもよりあけくまず〔かげろふ〕廿三 源 右近面テらそこ
おうろくとかくらるまじうるハにをぎしくみん〔枕〕一 五ノ三 廿 女房ノ宰相ノ君ヘ 清内 宰相の君なるき
のくとい(ふ)ハ宰相殿そこよみ(ど)らふわだきよ〔古〕八七 十 宣方 宣方朝臣かうるんひふ(殿)そこをそくのくどうひらまへば〔さくら〕四 そを
にとそおかくうとくすぬらめ〔枕〕十ノ六 廿 関白清三 向ヒテ 世まで出てらげ宰相とそことのかどるんと定まりつきとそて
いまどうほこうまやおの〔たとえ〕廿六 内府メイ二向ヒテそこしちへささりとすいとかくのとしもあすされかざりひくとと守へば
〔ウツ〕五 そこいひろきこそあるめ〔よそ〕廿四 そこよるをとまでしてすまるべき〔あかが〕廿 そらとみしてく
さくるむとと〔古〕九條 そこそやつれとといふたべハ〔仁德〕曾屋にもとのひろまりくく虚くにためひいきこん
あんれど〔イセモ〕九條 そこそやつれとといふくハ
ぞくる〔枕〕一五 まらうどにもあまりやさうのま〔寺〕すあいきてそぞる

そこ

其処〔因〕九 廿一〔古今〕十五下 素性「やむどもまるの山べにうちむれてそこともいはぬ旅れてしがな〔神代紀〕上 其ソコ 彼處
〔いせ〕五十八 段 昔男ときよわ家を勝りまりくるのさとよりくるなか(ぞ)くに〔古今〕十七 あふぐすぢくもなる
漂て舟ても家の名のとそこともちるべく〔後撰〕哀六 女の外に行りまるか(を)こすところぞ〔きりつぼ〕十七 あるかたすぢくもなる
そこの人どもへれひきるる〔狭〕三下 四十二 母宮ぞ歌さるくるありしみどろそしくハあくれどかかるよまぞの
ぬりにハあるまじ嘆しめしべきかなとのめうしやまひろる〔宇治〕四九 そこしくみ行るのゐさるかきのふ

葬溝に来り侍りしろよ

そこ 底

古今 十七下 貫之「よしの川岸の山吹ふく風にそこのかげさへうつろひにけり」拾 十七 躬恒「手もふれで
月をのみこそみるべきを水のそこにぞうつりける」古今 十三「そこの沖まで見えたれば水の底に
つきはすめるを 夫 十四 殷富門院大輔「きえかへりまた井の水の月かげにてかげのそこ
よりこひわたるらん」白河殿七百首 十七 あさくみの底の水をしひわたるらんそこのみかがみむかうしてみまほし
のみてし 清輔集 十三 しまのあまの底をしくべとちくへどこさくつらきそこのかげさへうつろひもなし 新六 上「浮草もそこ
とやいはふ池の底なる魚も因をしるらめど 万 十九 十三「池のうへのそこさへふかく菅の根を見むかくして
さらにまた人のしらぬ 夫 十四 後成安「みなせ山松杉の花をながれて嵐のそこによどむらむ」同 十八 後成「月
日かさなるかなとおやみのそこに年ふりくらむと 同 月 寿永法令三条のにて「ちらばそこはうつくしとやすむる花
の池の底よりも年そこにあふる 今 物語 三十六 近江の宮のおちてとまりてあらそはしらば内裏仙洞御所
いづくにもとりくずしてそこときまれるとせまり 拾 十三 貫之「梅の花まづさくらむもさくらのはなもちらでまてとぞかし
ろげぞえくる 後拾 良暹 いひ「ありし人のかげぞみえぬやまかけのそこ本は流れのとまるかげしてぞこし

そこはかとなく

長秋詠 上「夕まぐれまかきのすゑにちりかかる山そこはかとなく物ぞかなしき

古今 六 そこはかとなくかきしまひけるも うつほ 十三 そことなくはかなくとぞみえしに ついで 蜻蛉 よる
ぞあきそこはかとなくかきつくれば 権 十六 ひとよ病気にてよはたゆくしかればぞそこはかとなくくるしうおぼえて 栄花 五 そことなく
なる花ちるとすもの人の消息などいふなどかぎりは 宮 二 羽衣 冬 非無月風にあらぬちりのちる折はそこはかとなくものぞ
かなしき 山のかげ 十六 はあかしてはずぬまどそこはかとなくしまずかかりつつ 源 冊五 風まじりて
そこはかとなく花むしのおもくおかしきやどくく 枕 十一 病はいて つらそこはかとなく物のあはれなり 十六
てんかくのうたうたよりきそこはかとあらけきはなれ 白河殿七百首 四 汀をのこぼれなそそこはかとなういぶり
なるかなと 国つぶり 上 平 ことはそこはかとあるにてちたはあらでおそこりのおもかげとて袖ぬるるまで

ことの中をあやしくあはれなるはそくかたに

るんとほへあつげなどほやとそこをのふえぞる 夫 十四 定家「そこはかとなくいまそめぬ山の井の水はかりもにしのばれがたき虫の
声ぐし 続古 雑下 後京極「ひくらしは竹のそのよりみかるのそこはかとなくなきわたるなり 月清 下 君が代より
かてて見もきしもおれそこはかとなくぞおぼゆる春くれの空 夫木 二十七 為氏「あひみそめしあとのゆくへのそこくら
きまだそこはかとなく消え年ふるで

そこはく

新撰 廿七「そこはくの日つもり重なるに今月中に文を見せざりけり イセ 十二段 そこ
はくのまさげのものと木の枝にうちてうちさげたり 祭 廿三 何ぞいふこそ見るみそこはくの
中にはかなくておりて 吹 上 三 源氏殿上ゐなさきて河原よりして乃ち見えそこはくの携へたる人々にわ
らはべ河原ぞよらる 第 上 三 そこはくの人仰ぎもくりかえしてなくて中に 夏文 十四 間凝無限思 墨 三 仏名 房
「そこはくの仏の名をみききつれば梓山はどもあらじともおぼえぬの 夫 冊五 家集 上陽人之月「そこはくの年
つもりたるとどもうちて見もをる人にまうかるべきかれ

そこともいはぬ

古 十七下 そせいの「ねのおどりまの山辺にうちなりてそこともいはぬたびねしてしが

源氏物語 巻 「ちりのまる花のやおちとやまばそこともなぞど見ゆる人をまる

ここにいる 下ノ五十二 そこなりともまた人にいらずくろいくしく 続ひて 暁 イツク トモナクサシタル呼ナキナリ

そこともみえぬ

拾遺愚草 下「三輪の山もとまでの花しのぞそこともみえぬ杉のむらたち

続古 哀 三 後成「なにとなくただる浪のまどえばそこともしられぬ袖のかげ

そこともしらぬ

続後拾 哀 四 躬恒「あひみての後ぞしきたにごり江のそこともしらぬ人にこそ 続拾 哀 二

新古 雑上「またあけて見ぬにそこのあまの家をそこともちらぬまぎらはしけり

ゐる世「今はまくあるべきのめしらぬもみぞそこともしらぬ山の井の水

そこはそれ

○ソレコソ

トシカゲ そこそこは世の末なのかよそなるげゆやへおちぞをる

よもぎふ 十五 そこそこは世のつねのそてとりまぎらはしつつ

そこなう

神紀上卅 無所損傷 ㊀ 卅五 ひさしう牡ひのみおどろかしたてまつらんもそこなふ事もやと 卅五 まことにもそこなはれてござれば 拾八三 物などもちゐてそこなふ 万十三 ものくそこなふ事なく 万十三 そこなはるゝやうなれど 卅五 たゞ淑人のみさをのそこなはれざらんとおもひ

そこら

神代紀下卅 有賊害之心者 ㊀ そこらの 枕 十五 ものゝようすがめもありてそこらの人後おこしのの 万三 中十三 そこらの人のかしこきめや 万九 十七 袋の中なるのまゐ内の大夫のかゝる事にこゝろをつくしてそこらの人のこゝろをまどはし 竹り 十九 あぐらとうひあげてうぐひやんよそこらのうぐひもみうるをもそぐろうをのすべ 狭二十 女房多キ久候ヨリ ノツクミ そこらもらぐときゝあつまる人 ㊀ 拾遺 五 そこらの人のいくとをもろみ人 ㊀ 拾遺 雑下 そこらの人の ㊀ 卅三 そこらの人後おこしのの 万三 中十三 そこらの人のかしこきめや 万九 十七 袋の中なるのまゐ内の大夫のかゝる事にこゝろをつくしてそこらの人のこゝろをまどはし 竹り 十九 あぐらとうひあげてうぐひやんよそこらのうぐひもみうるをもそぐろうをのすべ 狭二十 女房多キ久候ヨリ ノツクミ そこらもらぐときゝあつまる人 ㊀ 拾遺 五 そこらの人のいくとをもろみ人 ㊀ 拾遺 雑下 そこらの人の ㊀ 卅三 そこらの人後おこしのの 万三 中十三 そこらの人のかしこきめや 万九 十七 袋の中なるのまゐ内の大夫のかゝる事にこゝろをつくしてそこらの人のこゝろをまどはし 竹り 十九 あぐらとうひあげてうぐひやんよそこらのうぐひもみうるをもそぐろうをのすべ 狭二十 女房多キ久候ヨリ ノツクミ そこらもらぐときゝあつまる人 ㊀ 拾遺 五 そこらの人のいくとをもろみ人 ㊀ 拾遺 雑下 そこらの人の

そこのそこ

新千 哀三 あの成の底 「この松べきすそこのけ」 ㊀ 拾遺 哀一 あの岡よ岩をとるぞ よいのけ ㊀ 拾遺 雑上 ㊀ 拾遺 雑上 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ

そこも

㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ

そこ

袖 万十六 「あれよろづよとねがふ君かも 流れて 妹ぞ 支二 枕 檀衆 杜のくの

そのこゝろをえたりとおもふ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ

そこのそこ

新千 哀傷 ㊀ 拾遺 雑上 「この松べきすそこのけ」 ㊀ 拾遺 哀一 あの岡よ岩をとるぞ よいのけ ㊀ 拾遺 雑上 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ

そこも

万十六 「あれよろづよとねがふ君かも」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ

そこかき

袖垣 夫 卅二 ㊀ 拾遺 雑上 「秋萩にうつろひぬれば」 夫 七 枕 「秋萩のうつろひぬれば」 ㊀ 卅五 宴後 「をりかざしたる秋の袖がき」 ㊀ 卅五 宴後 「をりかざしたる秋の袖がき」 ㊀ 卅五 宴後 「をりかざしたる秋の袖がき」 ㊀ 卅五 宴後 「をりかざしたる秋の袖がき」

そこのそこ

㊀ 拾遺 雑上 「この松べきすそこのけ」 ㊀ 拾遺 哀一 あの岡よ岩をとるぞ よいのけ ㊀ 拾遺 雑上 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」

そこのそこ

新千 哀傷 ㊀ 拾遺 雑上 「この松べきすそこのけ」 ㊀ 拾遺 哀一 あの岡よ岩をとるぞ よいのけ ㊀ 拾遺 雑上 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」

そこのそこ

推廿一 九月にもうつろはぬ 万十六 「あれよろづよとねがふ君かも」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」

そこのそこ

新千 哀傷 ㊀ 拾遺 雑上 「この松べきすそこのけ」 ㊀ 拾遺 哀一 あの岡よ岩をとるぞ よいのけ ㊀ 拾遺 雑上 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」

そこのそこ

推廿一 九月にもうつろはぬ 万十六 「あれよろづよとねがふ君かも」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」

そこのそこ

新千 哀傷 ㊀ 拾遺 雑上 「この松べきすそこのけ」 ㊀ 拾遺 哀一 あの岡よ岩をとるぞ よいのけ ㊀ 拾遺 雑上 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」

そこのそこ

推廿一 九月にもうつろはぬ 万十六 「あれよろづよとねがふ君かも」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」

そこのそこ

新千 哀傷 ㊀ 拾遺 雑上 「この松べきすそこのけ」 ㊀ 拾遺 哀一 あの岡よ岩をとるぞ よいのけ ㊀ 拾遺 雑上 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」

そこのそこ

推廿一 九月にもうつろはぬ 万十六 「あれよろづよとねがふ君かも」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」

そこのそこ

新千 哀傷 ㊀ 拾遺 雑上 「この松べきすそこのけ」 ㊀ 拾遺 哀一 あの岡よ岩をとるぞ よいのけ ㊀ 拾遺 雑上 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」

そこのそこ

推廿一 九月にもうつろはぬ 万十六 「あれよろづよとねがふ君かも」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」

そこのそこ

新千 哀傷 ㊀ 拾遺 雑上 「この松べきすそこのけ」 ㊀ 拾遺 哀一 あの岡よ岩をとるぞ よいのけ ㊀ 拾遺 雑上 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」 ㊀ 拾遺 雑上 きくこそうれしかりけれ 「きくこそうれしかりけれ」

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

神のるそぢのなの名世るりもぢ 堀 松葉集下 さらさまさ

そでのこかや 袖ノ氷

堀 おりひつくれるくおおくる みそのよの神のこおりハとけぬもみぢちの月清集上 さるる松よ梁の金をとるきれきて神の氷をたゝこりれつく 寄三系中
神の氷のとけずぞまさる 続拾 春 土左つ法 うううこ〳〵人のみもと
雨ハ さるる松八おくこ〳〵春のゝも神の氷よ月やどるらし とりの 廿七春のいとしきよ雪のこゝちをみく
かくやおもふ〳〵と思ひやできこて さんらにもそでのこゝりひまる 加茂保雪女 神の氷をとけてよび
神ぎのみのこのあかあまがりて 古 春二 手をとてきこゝおなじ 狭 三下八 こゝ〳〵かる〳〵
名数 春五 おくこゝよ みその歌の神の氷のこゝおにあるき時 かまる
とハこゝとのふゆやとちひつけらるとて神の氷とけべ

そでのまづく 玉葉 春二 後鳥 ゝそにてのきく〳〵なのつ
拾遺春冬 上 ゝそるく みそこのの花きふ〳〵に
「まいるくてうくる波ぢよあゝこ〳〵神のまづくをおりひまうし 続後拾 春二 おもひぬ大臣 おまたぶねようう方もみ〳〵
玄子以数立 春二 ゝそるる立てやどう月うる人〳〵立

そでのみるとそでのそるもり 夫 土 春 ある夜 花衣のさそちち比やちく人のはるの
夫 十 後拾 ゝそるべくの神よひとりれくつくをまる
そでのころ 袖ノ別 拾遺春冬 上 恋まくる浅風ちろ
新勅 春三 数 ゝそるべくのつゝきたる
琉十 秋上 数式 ゝそるべくのそをゝ風よそでのとうしいゝまする
とまくる 冬 一

ゝそのよきふべくの神の初立ゝをゝ後に 新 土 春三 を後者 ゝもゝの松の雪
新後 春四 彩波 ゝそのよきふべくのひゝくゝまの神のゝそ立てよのゝ
そでめれ白ゝそのそでの引のあらあけのそら

そでのう 古今 春上 ゝそ人 ゝそゝと
玄橋にあるべそ神のゝうゝうゝうゝ 伊七拾 五月まつ花橋のうたゝげ昔の人の神の香でする 彩 春 ゝそ 五月
玄て旬今 琉後拾 ゝそ家毎 ゝそゝうべきせゝ 雅具 風ゝうよよの花ぎあゝう松ゝ神のゝ
そでのつゝきり 夫 土 後 ゝそ九条内大臣 ゝそ花ゝうゝ 琉十 春二 ゝそゝうゝうゝうゝうゝ

そこひ 涯 後 ゝそ 新後 ゝそ花ゝうゝ 琴のまも
池のそこひもあゝ後ハ 古 春四 ゝそ 新後 ゝそこひるる花 源やハさそくゝ
川の淵花底よそあゝ後ハ 古 春四 ゝそ 新後 ゝそこひるる花 源やハさそくゝ
雪許比のうゝあゝてく 春上 百首 ゝそゝふらん人 夫 廿五 ゝそ
野ノキトイヘル 同沙 祝詞三国ノ遠津 ゝそ限トイフニ同ク天地ノ涯リ
いノコトク唱ルナリ 玉 ゝそゝ 雪 よゝとても神のゝそ限りあゝ人のゝそ
ゝそ 廿三 ゝそこひあゝあゝゝあゝ 後 ゝそ 友列 ゝそうるあゝ
そこひ 後 ゝそ 散木 ゝそ 例ゝゝ人のあにあるゝゝこゝゝ
まゝこゝをとゝそこひゝゝこゝゝ

そこひるね 散木 ゝそ 例ゝゝ人のあにあるゝゝこゝゝ
まゝこゝをとゝそこひゝゝこゝゝ

そこりと 其所と 拾六 ゝそ 歳の云 ゝそゝとゝ人
ゝコハ 古 ゝそのゝうゝ ゝそのゝうゝ 十六ホ下のゝとゝそ海あゝ
ぬくるけそひとゝ人ゝいにぬゝちまれがそこもとゝまゝよりてゝまりつ カケ 四 ゝやゝそゝとゝよゝまゝうゝえりくる

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

車さーとやをさく 万ゲ下下 四女重二 ろく 中古の 松次ぎそうくろる 女あり
はく 歌ろく

そでかくと

〈袖をろくてめしぶ赤やく人のまにろもとく談ようあり 夫 世六 ろぐせ 袖くまで赤のろうろ
まてもぶろうとあくろーぐと 口 永和二年 陵係 ろぐとびてうてくー 袖八かくせぶもつかまぶろにれてろろ
口 ト吾 二条院サヌキ 「衣にぶよ人をれよやうくれの袖ふをうまれの秋風 万十三 「おきくこの袖まりか
ーとふれいろいもぶぶぐこの衣はみせる

そでぐち

袖口 〔衣のうえル十三〕 袖ぐみど階子の折ぶてことさうめたりそうと 一勘云 袖口八
簾ノ下ヨリ女房ノキヌノ袖ヲ出スト 又車ヨリモ袖ヲ出スト 〔あつし六〕 六条ぐのひさぶれくよーつくろうろ
〔栄花ワカナ九〕 袖ぐちいまろを知ろうひど史桐のさぶ今ろうんとまろやさろんとまろ
にあまねくふふうの袖そでぐちうふふかろり

そでがさ

袖笠 〔増太 後拾遺 十五夏 夫 世一 光俊〕 「かりそうまろぐぶらーー袖をのあをふぶ後ぶとうあら
手ふりて人ってあれろうでこうろう出今ろうふれば袖ろうーよ悪ぶを
宝治百首 雑 金水 たろさのてようそろうものとくそろれば

そでぐるま

〔あつむ 世八〕 あつーれのよ火ふうぶかのろへくへく袖ろうと妹ろろーんか 吉今 秋上 老之 十首のく
〔万 二十九〕 いそろやるつの山のこのまろう赤袖ろうろうこれやまろろうこの袖方まて人のめられん 院十 恋四 五 「おまろ風雲吹ろうな
そでふる

ろろろろ子が袖ろる山の秋の風雲

そでのあらごろ

新千 恋二 大設言 「人めセく袖のあらごろうちぬまりれ経
川ろぶよあやもも侍ぐきよ川ぶありて袖のあらごろ
〔拾 恋四 愛之 「ろそぶ川ろうろ袖のあらごろ
ろろぶ川ろく斗ろろ袖のあらごろ 口 ろ 「衣 「滅
〔千ふかろー 五 まりてそでのーろろせそあくぬまでれ五よ 〔新千 恋二 四〕
さぶれろ月もまぶぶろぐく 〔新勅 恋二 四〕 「人をよぶれをのろうけぶ石川袖のあらごろ
〔千載 恋五 左方 「りろさぶやあのびまろうぐ袖後ろ袖のあらごろうかくとれ
〔夫 世二 ろろ 「袖のあらごろうにとあさ袖をぶてのろくれ袖まろう
そでまくり

そでぎちやう

袖乞帳 〔拾 四 雑下 廿四 袖乞帳のうぶもれろーくれさきのふ

そでひづ

〔古今 恋五 「袖ひぢておみそびーあのころれるとまろろうろ
ろろ濃ばい天川もろうぬさなる袖そひぢめる 〔夫 世六 「ろぶ世さが袖ろくまで赤のろろうろー
〔玉葉 恋二 三五 「袖ひぢてろふやろろきん 〔六帖 吉今 恋五 「ろぢにもろやれくらん
〔後拾遺 恋二 三五 「袖のきーのろ袖袖ろひぢてろろーまろうもる 〔新勅 恋二 四〕 「袖ひぢてろくもの洗よあろろうろ
四をくまろうちろーで刈よきろーん 〔玉葉 恋五 「ろーもやふのろーー袖ろうとれ袖ろうろ
〔新古 雑中 「いんまろちもくあのまでーさと袖ひづ斗七九やうけまー ○ひぢてふひろてえ 〔俳諧抄〕

そあまくり

蘇甘栗 〔雲二 天象 「あまろうの袋ぶとよろろーきやろろーろーの栗
栗使並饗禄楽酔等事 〔江次第抄 「蘇斗乳也 〔江次第抄 大臣家大饗食云以甘可行由以職支度大饗是非式日時依可建歟甘
あろふふ栗のろもとのろるろべー甘栗ハ江次第抄云平栗也 〔西宮 蘇四壷 大二小三
本草注云酥牛羊乳所為也 〔朝野羣載 廿八 福

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

栗と三栗とをよみ入あけくれ鴨栗か今のかち栗なるべし

そきそう 若枝 二 あやしきなどきのなそらんハそきそうにぞあらんかし などおもひてさるべき人にとひつけ承ハしにうくせなどしける人なり

そぎたえて コノ今 下十五 ことぞともそぎたえて世のおぼろひあるすぢくとえおもせすべく 枕ひめ 卅五 そぎたえてすてられたるおぼろ車そ 夏家 十 その衣装送の雑色とももはりきまつりける とに昨ひにえ来り侍るぞりしといふに人とよくたやらめし火六志ちまぐくりきにけきもえぞりしき ハ上さらそのそぎたていりあしくるも侍るぞりしといふ 枕 廿九 なるみるぞちるそぎたるのかたちえたるさと あしろ承風をくりのまぎれるなどにきに昔のくるまとうへるぞり

そでまくら 袖枕 夫 廿二 十五首 雅経 あまのかはらにあまのそでまくら ねられてぬる袖まくら 冂 口 宝治二年百首 衣笠内大臣 やどあまたあはでぬる袖まくら 冂 口 後成女 いく夜へぬらん 夫 卅一 探題 顕昭 花かげのくさむすびねのあしたのよはに月のさえてぬる夜のそでのまくら 冂 口 光厳峯寺入道摂政 昨のねざめの露は くちはてぬちぎりのまつばのまつそむすびて そでまくらとかぞなかむかし 袖ぞぬるるのよの世やふ袖のまくらは

ぞめく 六百番歌合 家隆 顕昭 のかやくあまのまくらにてぞめくをもいとかくなかり 栄花衣の珠 卅三 三郎君 三郎君ぞめきておかしなで 西 土 年 ひきてくるたるハ 友の騒 まるぐさあり ふもあらんをきまきくるしむ。さらにくるしき之

そめ 初 西 十八 西 ひのまみてしてきるむしそめのさろくまにおもそくとやひそめなむ むかそめのわひて 六 ぐる衣 十八 よりくらのしてをはかぬしまりを 玉鬘 三 かくるをまひしまつぞそれ 神代紀 上 毛 染 於石 礫 樹草 二 夫 五 彩石帖 和歌 そうちやがよりるぬるまま紙のうしてまら ひぞちりつめるらん 不会 九 此世の人の宿めしるをとべし 夫 卅三 男六十五 和泉 衣のつ枚のそめけしを

きとあおる袖にあきでくう嵐られ

そのいろのやま 家集 三 楽山 一ニ 般 大丁 蘇迷盧 西域記云唐言妙高 舊曰須弥 之

そめりさ 新宮式 凡忌詞内七言佛 ヲ 稱 二 中子 一 經 稱 二 染紙 一

そしろさ 堀太 よ万 経信 のころ内へそしろにるものあまとよりいまひすうりとまでよろとりてん 夫 十三 堀 二 仲実 そしろはのうきてもそのひつぢのれにくよ秋とそなん 夫 十三 堀 二 顕仲 君よてくそしろの内井よみかりして さすのまそざしるひつぢわのいね。そしろ八十町也

そこかくだ 后宮 歌合 三条大臣 いくろりきても岩のそこまで 奥 義 抄 四 七雑 名ふう ぢろしのなたちのこひちくそさうくぢらねのつきこふてやなるをりと八億例 衣とおへくさぞ 詳 圏 宿近ハ中へ占人ハ小云ア内侍の子あり 夫 卅三 文安百首 前右大臣家 小大夫 おやぶるぞ 岩よりあまたにぶ車まつよむやらそきてろぐごうる

そしらそし きとめ 平四 やせしくまほぐしまくるなるをどろかくそしらそし さなりそり

そぞう 細 ソ 字 カタム 心 之 花宴 十 下 源 卑 品をわやけてとふそぞうなる柁の師ごももとこかしこよ蔵 ね侍りし之

そしる 浮けるふ 卅三 人のそしるべきやうハ 夫 卅二 後集 法性寺入道関白 こゝろ手をもいひけつ口のみみがく 月を来えてこそそしらざりけれ 若りつ本 六 それまほなもよのそしりのまおかくまど 夕霧 卒 いとききとかしう 万を占ひづめ人のそしり所なくぞやまもくて年経をいやも 百一 民 侍る人もそしらざるりけり 三年ぶく 十 揺政 春の流まつりごと衣今へことろるにそしらまもなく 月の宴 十 来りのひて流をそべてようるひるふしおえむつれ きもあひて世のまつりごとあうら世のまもさまるまだ衣今のそしりかくきまよハ此所るぞありける

そ。そしろハ るむてそし コノる 上七十三 よしあえそしてろうまふよハ世香めまでもあろくは年ぶおぶくしらそれれバ やどりの木 卅八 例のうるべきる入目るまで占えきるべうめまだひきしらく人のぬるぬ年まで好そ

そーもうる あめつ 廿一 人さま汚名をひそーまもどもて 物上四八 おもてなて
にらりや 夕三 中四五 かんぐそーやもこのかさそもいたびやもそセよとのるひて 落くれ 廿六 おぼまえ
考へどもかもそーつと思ひて

そひ

○咀 万 十四 上野国歌 いろわろ笠ひのそり赤ねもごろまくそを
ノソヒントイへリ

夫 十三 俗 そひまをそーうほる 宇治 三三 大嶽の乾の方の僧 夫 三 仲四 ありとうる
にそうる枝もこそに

そびやり

○脊の
たるきそ 竹川 十五 いとそびやうるまもうーうそびやうよねをそ
まよりうそごうきおうくうとうやうるもてるーいとふ汗くてそびて 夕二 中五六 娘宮はまぶちひさくあをそうぶ
あそまそびやうるうるいくちのひぶくみまをそーあまうくうり 宝月 元 二三 ゴセくふとそびやうふ
わらー おくうる 十七 おのうるまでそびやふふーくまくつうやうぶ
ねやせ いうそびやそのへりーうまをそーうりあふぶそうりのひまうり

そひぶく

裏書き 息所参事 寛平九年七月三日丙子為子内親王當夜参入
用轅應和三年二月廿八日辛亥昌子内親王参入倡謂之副臥平 さう 元 五六 彼のそひぶーよ さうり 廿一 三
いとのおくぶのそをおらくぶひとうくづそのふ乃娘きく 仕そよ
ひうーうそうめくとそひぶくのとまようほさそのくのんぶ 夕 三 中五六 娘宮はまぶちひさくあをそうぶ
そもうくいうるうる乃おてうふかぐ 竹三 廿一 世のうーとをうくきそく 続紀 廿六 曽も
うるそもくくるのさふふうかのおうまそあうぐきそく 続紀 廿六 曽も
まおざるりそく他のひとそいときうそ 後 下三 おおおひてるのゆ
でのひぶくーとふんちふとのへばまいそくおひのごくものふうそもく 竹 三 世のうーとをうくきそく
とそそも 夕三 下廿三 城通ふ役きまくみてぶうもふそんが他のとぶまもやそもく
他の神ろ吹そんとうへぶきく 土左 まうらぎそそうあるう人をまもうふ
ばやあそのふうそもくいうぶうんぶーとのぶうくーぶやそそふ 後 下五 やもうりー寛るのおそうさそからう
ぶこおりひまふて一ふそうまうりーとそもくもうぐーうやうりうんとうまうふ
ても当七 佐うぶ 竹川 冷泉女院歌合 ふく林女一宮の女房 ふりうそのや 土左 四 他のよう
きまおくうとそるまそそのあとそうりでんそうびよ吸のるまぶきいとうくーや 拾玉 二 歌
おそれ西へのそやくぶるんがそもうまうーくるがうらのんうり 万 七 よーの
うるうろうそ 万 十三生 とつくのおきまのおひうるそのりのふ八曽のくモ 千載 哀傷 大祓文

のひてひもどもおをそくそひふーまるはうび

そびえ

。セイスうり トシメル 廿一 人ぐまとあそよそびそへもぐうーふ
あめひ 五 いとうーうびよ自くそびやうに

そひふそ

まつひ 卅五 ひのふとそそひふーのくり
後 六 華厳経まで生ぶろーつまも教最よあるぞそも教よ

そま

福の神の名 オトツ神 きぐニツ注 手吐のうまうりぬひんとゃふりつ
きーめべやへ
そもくいうるはおてうふかぐ当ーまつくん 古 六 三 八 歌のさ
うるそもくくるのさふふうかのおうまそあうぐきそく 続紀 廿六 曽も
るきまてあとるにもうりのふりのうのが 後 下三 おおおひてるのゆ
まおざるりそく他のひとそいときうそ 竹 三 世のうーとをうくきそく
でのひぶくーとふんちふとのへばまいそくおひのごくものふうそもく
とそそも 夕三 下廿三 城通ふ役きまくみてぶうもふそんが他のとぶまもやそもく
他の神ろ吹そんとうへぶきく 土左 まうらぎそそうあるう人をまもうふ
ばやあそのふうそもくいうぶうんぶーとのぶうくーぶやそそふ 後 下五 やもうりー寛るのおそうさそからう
ぶこおりひまふて一ふそうまうりーとそもくもうぐーうやうりうんとうまうふ
ても当七 佐うぶ 竹川 冷泉女院歌合 ふく林女一宮の女房 ふりうそのや 土左 四 他のよう
きまおくうとそるまそそのあとそうりでんそうびよ吸のるまぶきいとうくーや 拾玉 二 歌
おそれ西へのそやくぶるんがそもうまうーくるがうらのんうり 万 七 よーの
うるうろうそ 万 十三生 とつくのおきまのおひうるそのりのふ八曽のくモ 千載 哀傷 大祓文

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

つ

つ津

和名抄 摂津国豆渡水戸也 唐令云諸度開津及兼船渡上下経津者皆有二過所一

つい

つくま

つのくま 万 つのみてとら角とらくくその考うるさゞ、櫓のまよつのみて人成と公は神のおよまづら
につのみて狐人のやうついのみて是らついの狗うるぎら、なおけるぬ狗ぎもとみもさ、てちらぐ〳〵 アゲ 飛梅をの
ぎりもえて 万 廿五 まのうえ、〳〵 ものみうえとおらひ
どのもついみてまひて タヽカル きくひ、うごちのみてと 江海多つの居て 万 二中ノ十八 多賀八
いとをとをく狗ついさうぎてとおそれ さうれ 七二 児若ヨ いとくおとをと
ついもろつ、ぎうのおんやとうさうひつぎおのくふようみうとれろるみどよ 万 七廿九 拘さうるのいえとととて加えう
ついさてえさと わるかり 「をもつのもぎてお のうくろくふうて
おくくふおゝいんくてづうつのさて狭つくさとしのめ 挟 三下廿 狭迫 とゝうをてきくふのんてひき
ろうさゝ、ちつゝ、えんがもついさゝのうと人くも宮もあうべ学ゝ
いぎをて次のかとまるのうとうさがゝこうのをとおもりのうやくこいきく 初下六十 伊ぬものこにつのおる北の方狗ぐ
もおひいのつ方う狗めう 万三上卅 おみそがゝこふるぞとうとをとあけするひつあるゞ、ともつのおくさをひて
まろ 万 大ろうろふるとさ、生そうろうとうのうべついみのてあやしうりのおひうえめ月にことあうえん
ろおう 廿五 さ、ひやねゝ、をとをお下のみとよつのおみむ 今狗 むとふく秋とそおひまくをとんとのひ
たりなぶついふきおとひてえう 「 のうくさぎもぎうりとのひえんがいのひぎぬ

きさて ちるもう〳〵ちうゝ〳〵うをうえうゝ〳〵うとよ 初おまをまのりのり 平治 三ノ下 船の舳よはいうちて拉とを
「 二ノ下 えれおちついえそおうう、をうひうとそおうづくことおめえ生うれうう 平治 乱 四六 つの主てふ伝やいとうれえのが
薬度 九十七 刈えぶりうもとうえうれがつのえそおやとみうえおのの〳〵にあうえ宮 宮治 四 狐シャキヨ ケフネ 紙を二枚
引ちぐてつくえうれが大やうるると極ようついをさえくれが 「 二廿五 あうえらゝきえ動るちぐ〳〵おうえうよお
ゝ〳〵まやもとのひてうきのぐさそおうえうよつの生うとおひ〳〵よ 「 十五年 虎人の香とうをてついひうかりて猫の
前とうえうぶやうにてあると 落ふ 三おん〳〵うえうに人さ日ぐ〳〵 「 廿五 ついふ〳〵つくあつきちぐ〳〵 宮治 二廿
刀をおきそ生うえうる時に生とぬやえて主夜やてえいの着そ 「 二廿 徐何 い
たちてえうれがえそ〳〵の月のあうさよ 崇神紀 八ッ 急居 此云二鬼跛一 盛衰 四廿五 その好年ねつきえて
四面のまつま、とうめぐうつのい急のなのうえそ

ついえむ

啄 枕草抄 十六生 啄鳥 山城 波無鳥 口取食也

ついぢ

築地 竹下リ 下ろ名のつうさあせそえ人のふをそついぢのく
ツイヂ 築墻 和名抄 摂津 豆伊知 築墻 十九 ニついぢのうくよ畳変をおびぐ〳〵うえられうえんがえのさうくえいうくさぐ〳〵て法をおよ
おかへうにふくう

ついかさね

衝重 吉野後二 先供御膳次給衝重 和名抄 床 十はうがやうるひとのつれのをきうのぎ乱

ついがき

築墻 玉篇 雑中 かの花のまふをるえるに花の枝いおえ
宇治 境 豆伊加支乃破處 薬度 六七 つのがきえ

ついたちのひ

○月生ノ ふとのう 「 廿五 廿さんどつのえちの江よそひとそえるめると 天智紀 月生ツキタチ

あさ【麻】 五二 年もろくの初月の日八例の俗よ来りまひてそ内よ春宮と仁
年もろくや初月のひ又あるおくくろくそを 日ろる 上十二 四月朔日ろうをそわふふぐれに世さやの
うなふれ 世三 ついたちごろのゆふづくよに 日十九 ついたちごろの夕づくよにまそて水ーちろろ
ふーとみるぐや虫のこゑ

ついたち【一日】 ○月初
栄花 十九 今六あるとまもろうそてもそつのもち六月の祓申よそ二条殿に
かくらせのみ 日これの月 二月うぐいすみやこのひてねつうーうぐいすのんべいろよみどり名
てついたち三日月のそとそうそまう夜の西の夜とのふれをそ中さきあ
の夜のそれと西月うさそとぐんて 栄花 十九 三月のうくのり 万 六 廿九 三日月のうくのもち月くもちてうぐ三月
そろる比ろまぐくのり 栄花 卅 かのさやうろのかうこのつたち八日ろうよの中うちひー 落ろ 三 婚とり 和
うるとろろり 枕 九廿四 人の家よりきくーきねさて庄のしそさろくぐ
わとくみうちのそぐのまうよのついたちみ日ろうさぐおくろわぐハ来月のつごよりろだろりのそぎのの 月宴
五七 四月ついたちの夕ろいは来て 枕 卅四 雪山 ふむ月の十九日とさろうひる人とやをとをもあるよもえさハあらじと
栄花 十九 女房ふとぞ年の内つごりとてもおくしとのこやよりあまろ当をてもやてくろれげふ
えーもさハおくぎろんついたちとぞやべろうろるとおさみハおりくぐろくアヒ 三七 をもかつりぬついた
ちの日ハ例の院な糸ぬひてぞうち 万 宴 三 四 まろうね

ついそめさう〜【一初冠】 枕 九廿四 人の家よりきくーきねさて庄のしそさろくぐ
つのまろ【角髪】 枕 廿三 松明着今之續松平 いやも 六十九度 その名のさろくようのまろて三のまと
うきつぐ 古イ 続廿三 七六 るにのろうるのくありぎろうろれぞの中人とりくくろつのまろて
うちおとさんとーろるを

ついて【一杵】 今イフツイテ 杵カト説又 そ 七 かくろうのでハ名もつでまえひとぎめぎるれありろる

つひぢ【一対】 枕 廿三 ふこぐもそとそれのようつのぐさ 同 栄花 一 松の雫 廿一 ふこぐもそとそれのようつのぐさ 同 栄花 一 松の雫 廿一
もそのそぞ来ろとものの 枕 八十 人之手也 あるふろまよつのでもみくくきねさ
ろひめぐら〜滞りもなく人間の任月をそそへとのくのる 由あり 九 ろろるたつのでつくもとてもろそそ
るどつろふーろうた 相壷 七さるぐをつのでもありるん今ろぐくことそちひれんやめ 竹川 六左のおとぐハ
そろぐーきひねぐどのてつのでもの名対面もからそと 由あり 五 尺名のとふらひにりのをそついでよかいまさ
せさやとのひろり 枕 九廿四 そそ 廿八 ろろるたつのでよのひようて待り
ーと 日ろる 上卅八 姫文にも中の戸ひさて出ぐんろれこようさやうにやひーろとと
ま 世六 ろうのつのごにも人のひふりさんと 枕 六十五 名をこるるものふくくきねさて待ろうと ろよみのさろう
るろるにあろれどもぎけのつぞろり 擬仙寓 廿八 元来無ク(ツ)テ 一説枕 十九 五 のひけきねん人のやそこるわをごこるどのおかるるとついてのまろに
とろろて 廿一 ものついでにろりり出ろんとろづろもえのひおさらん 枕 四九 ようづの人の上昔今ろろうて
のひーついでろろく

つのひぢ【一対】 枕 名 廿一 築墻 和名都以加岐 一云豆以比知
きのの名づろうまひろうもろこのぞ 枕 廿三 ふこぐもそとそれのようつのぐさ 同 栄花 一 松の雫 廿一
きのの名づろうまひろうもろこのぞ よもぎふ 十七 柳すもいろうまをろうてつのひぢもさふろ枕
ろうひろう ゆきそろり 九つのひぢにふるふとみ さふぐ 三 来ろ本の北あのてのつのひぢろぐーてんさーぎ井をそのひて
こやろうもれらんぞ

つまいもひ【一妻】 翌勘 廿下 後拾 左注「ろろのたろうやの名ぢよふぶナのつぎきのるるろ杜風ぞろく 古今 一 廿
雪井とろるナのつぎきもろろ年ーくちらのまろ 万 十三 卅 あーぐやくナのつぎきをろろろれ
てあーぐやぐやーぐおりよ 和名抄 十八 十 異名都波佐

つまこもひ【一妻乞】 日ろる 十二 百つぎのりもひるーかりぐやうの物ぞるの様のよまつてそろるろり

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

つまと 豆波利乃登支 [名義]二いつしかとつまりの名 [今昔]雑上 しゐてつまとをとゝ[ママ]めさでやとるるよ月比ありとてどあるべやうにつもおきてゝやさでのみこゝろうやせてそらやものふ [つれづれ]百卅五 なかの巻ともも先あてめぐむおもふおもふべやとうきぎゝつまとるにこゝろ

つまもる 茅花 [万]八仕一 紀女郎贈大伴家持歌「吾君は戯奴(わけ)が名呼べ[ママ]数(よ)にも[ママ]吾も[ママ]つまもる [日]ロ廿 「戯奴(わけ)こゝろ吾もつまもるもとめけるかやのつまもるひとりこゝろ

つまもの [字鏡]卅九 [図]八 いきつまものひとりめゝきおくこゝろつまものありこゝろ

つまぎき 唾 [和名抄]三五 唾 和名豆波岐 [日本紀]上卅一 以唾(ツバキ)為白和幣

つまおき 椿 [万]七廿五「おゝくにの山つばきさくやことゝはゝこゝろつまおきもとめ [景行紀]六 採海石榴樹作椎

つまあ 煎 [淮南子]燕春分而来厂春分而谷燕秋分而北ノ秋分而南ゝく [万]十九九「つまあらそふはまなるべしとこゝろれはゝるさとありひつゝまつまあらそふ

つまご [和名抄]十六六 坩 和名都保 今按木譜之壺兎謂之坩 [万]三廿「なつくさのあへとあふごの浦に [ようもぎ]十五 ねろゝのの浦つばきさくらさくらさきこゝろ [ようもぎ]十五 ねろゝのの浦つばきさくらさくらさきこゝろ

つまやうぐひ 壺胡蘆錄 夫於今俗(ツボ)之(ノ)[ママ]もの [拾]三生 さゝぞゝくつばやうぐひおひさゝ海芋のおちるおとうきゝゝ

つまれ 局。俗ニイフ部屋ヲ [きりつぼ]五 ひつぼみいきりつぼゝく [古]四十八 かくしてよりつゝひな [江次第]十七五節儀 御帳壺(ツボ)試入御(ニ)[ママ]於(テ)[ママ]清涼殿(ノ)[ママ]艮角(ノ)[ママ]第二間(ノ)[ママ][ママ]ひきつゝれてひすもるゝみやり。宣長ヵ局トイフハ元ノ字ノ誤ナルベシ [栄花]廿三 [ママ]ありくらぢーのくるりさけびあひさゝり [日]廿三 左近ノ局ハ元ノ名ノマヽニテ [栄花]廿三 おのゝく発願をつゞめつくろんざまあづるつびよ侍ろふる女房 [狂言]萩吉 まつばやうぐひよ侍ろ阮五月宵あるともなたがめあろゝ

つぼむ 蕾 [夫]卅四行「つぼむ」うちぐにもゝめる [今按木の実]あるを [江次第]十七五節に蕾ふくらめるをとおかどろるゝ

つぼさうぞく [狂]雑ヵ 妻まのくまろゝよつばさうぞくをきゝろどもくふとまろひつくおれよゝろもろく [狂]雑ヵ 九つれさうぞくのやしろゝめや又尼ゝとの世をそむかざうぞくをゝくそ [拾]十三廿一 月ぐろゝきおつばさうぞくをきゝろどもくふとまろひつくおれよゝろもろく

つばせんざい [狂]五 ひまのつばやんざいのひとりろきさろゝと

つばもそれ [和名抄]十七七 菫菜 俗謂之董葵 和名須美礼 [拾]三廿四 夢のなごつぼもそれ [万]八十二「ふぢのさゝろくさろのつばもそれ [拾]七廿 大系のべのつばもそれ

つべらまく [狂]下 後成「はるのれをよろのくつばもそれ [細]ツベタマシクハツクシキナドイヘル [万]十四 ねろゝろきゝろ [カケ]

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79

ガラス使用

ゆくしと思ひてあるゝ三四日ばかりありて秋ありつゝさよーうつくしうーと安くゝあれば 同 コモリンテ きこゆくて
ことなうなほ、ことつくしーさきせすくるえん世人もなかなん かたみきこ 五 うけくえやゝふねかへつくこまうれさゝぬ
あちらゝうふおとろくしくこはよちむか 盛衰 十六 丙寅 殿居 図くよう証上せさら夫ともる王ぶらのこれ従
ど夫つもまのさをうべくまうーげうきる新るきうーまうーげうきるさせまうり

つと 凤 万 十廿八「朝にゆくてのきくねくはこぞとくぬのおりよきもあなのうきーき
。チツトヒ 後 上 廿九 さこあ王 注を渡て人の子ぞめふうで糸りこれとむつとおひとうてるなおう
べきとのあへば ウラ 中廿八 三 宮ハいとけざくんにくてつとまがりぬひ 国 下 左大将源

つと 中納言はあそびましーゝまえつとむつひみて招がりとしさの 同 下 芙宮寮しやて女君なりつとうきよもて
のぬへやうきくかくあがうて王ますとそをましきるんとのまひてつとなびなてふしまへば 大和 五 かくて外へも
さしておなでつとみよろり やどりき 四十六 ばなすのこうつとぞあるをけゝるぬふあるや 字治 廿五 つと後
かくらうげそ入くらへて 文 好 九 禰まつとふさがりて うつほ 五 さやうふすもこせれど目もとーうつくつけのあれぞ
おのづからそむめにきゝ きりつほ 八 此禰のこうつとふさがりて 同 十 おもうげよつとそひて足さうくも 狭衣 八廿
いでぬみやーきんとのまへどうつとさくてまよめらし笑ひ あさひ 十五 さまぐのなりもちる中より人よ更に
うつくぎてでぶうらの此身につとまひゝきさますにてをよおどろくーう紅ら火し 咲ちるうすもあるくれど
同 十四 宮のつとおはすきうにかみくやとうくてーさもつうもくりしきと 枕 十五 上 つらき人をば更によもば
東のこそぞとつとおうひて

つと 苞苴 新撰六 五「あぶーとそ井のあをづむまびつくうれひのつとをとりぞ出つる

つと 土産 くと 俗ニ云みやげ 拾 禄 こゝ「つくーよりくてよくまれどうつとす公ー太刀の経川の木ーのをそぞ おる
古 大鏡 承「きとうさきえとこつの小高の人をるべ紅のつとよめけざといそまうを
あつし 四十一 紅のつとよあつくとれおへてのおどき 万 十 奉「擁玩まで咲枝をたむけてけつうくまづけて とこと

てんろも きこま 四十七 さうへえ紅のつと コハ紅ヨリ甲舎ヘモテクルヲイヘリ いやよ 紅のつとまいざといゑまうと 紅のつく人向舎よりまて くるもののとひゅ
為家 三 あがまやよこうつとまあもんべらんまふりまへと見まゝそも夫上すて まつらも 廿一 小舟もちうしぞ
ろう引つけまきこる萩の枝まどうとよーて糸まり 六帖 五下「吹風の氷秋よーつまれがちゃ人はへつとよまそ
万 三廿五「いその浦の沖つ白浪なぞよりつくさていめがくべつとまやむ さらえ 廿三 山づとよりまみもまくヘー紅なおまきへの
に此紹にくろぶまべ 万 八 卅五「をとこも々萩荻たをれおがこのろ紅つとくつきえて子のこあ 同 廿十「足引の山がえりく
ろえ山人のこひてのえーめへ山づとぞこうりを

つどふ 集 万 九 廿三 たをとあ男の徃(ユキ)集(ツドヒ) 十く 四 そこぞよこそあかくつどへのふらめ さりあ 五十一 にあつるえ紀
糸すつどひ 続紀 十二 集(ツドヒ) 古事記 上 十八 神集二集而 訓集云都度比 ちえのえん 十二 上東紀ろことさあかくつどへあひて 椎力本 十 人なまき
景行 九 其族會(ツドヘ)之 同 於石瀬川辺人衆聚集(ツドヘリ) 万 廿廿「京くのさえより都度比あのてとりるととれいもまき含
外がまた 初 いくうろ人のつどうちらん 同 四 ひとよりつどひそゝうやどくまて 三をつくし 廿八 まへうる人のつどひふまて 万 十千二
きの大夫人んはまあ王や棒とろぞーてでくに集(ツドヘリ)

つとむ 勤 纂紀 三 日勤(ツト)ヤ 日本紀 努力 自愛 朗 千載 カイ 仙庵法師 空也上人 拾 十五「物之糸火そろるえ
つとめてきをまよろく見ゝるえ 詞花 雑下「ある身のきえて仏まうゝることめてほぞまうべくうるう 万 三十七
「吾きくーみでによくまはあーらびのあー ゑんぐるうぞぼつとめとてなべー 田うぎり 七十三 母むてまうえ牛すらうどのおそまうさ
きてでのくつとあさりろけのーゐとうちうけまふまあうて。宜長云 俗語ニてきうるとかふろさ まくて 三 式とのあふのこや
づう人をつとあまへ 随 さらえ 廿四 紀ひまつとめくまどおひゝさちそべーー 日数を ひろき 上 八ノ 数ろつ来きそ込山の
東まそでつとある紀らんと千まんまうりあめうとく ひろま 六 のちの世のつとめもいとよくーて まどぶむー まようつうのこと
やまとへて

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

つとめて 翌朝 [枕]十三廿三男女ノ子イフ聲 さるべきことありなれど家にくげなりとてあとさわかしくするもあるべうし つとめておきあかぬるもやさし [由かがみ]七 つとめてまうでてさしつねぎてしまひて日さし出るほどに [竹取]上 あかつきのおこにすゑたる人をつとめてのぞき見しもたん [竹古]下三 三くるの菊の白露 [竹取]三 ならはしつとめてきこえさせしとおもふ [大鏡]三十三 小桶よりひきいでひさげぐしておりきてそれが仕丁つとめて 湯もてまゐりて人のなれが [大和]二 たるなど女につくひたる時つとめてしばしとりてる [源氏松風]夕 秋ぎりのくもち たるつとめて [土左]九日つとめておほみなとよりなだのとまりとおもふとて [古今]十七日のつとめてしろ

つとよ [枕]十九廿 きてまたけるめのつとめてあやしく住むる人

つちいみ 風 早三 [白文]十ノ五 早祭風伯ヲ 土公の方をよく 暦はいかやう のまぐつとめて此方よ井やうとて家あるじ外へうつろ へり いかでやうさせ あらんぎるに此方人のおん屋にあの方の方違へりてまぐしくて年をもんきつめひちっしてこちなうるを あるやうりしありもこりふしうれ共はいまでもありなんとしかるままし やらうするにもつちいみぬ やはり

つち 土 [万]廿四「ねがひの方よりくずでふ事ならずとも いのちこそのり来ざらむ 屋のつちもうらにつちよりきこゆる屋のねがね [国ユヅリ]下廿四 えのかりのままでもりに主の人のびとさと たちあさまかげうすのもちすくり [カゲ]廿 下上 大ぐ かれすぐるにハ大きなる人へ行は主まやましらんらんとおもひつる 人の車まのそいのはうがくと地しくろえのれたらうかれなるまでもすりたりあやものまのこととよろこびひつ るるろく見まさてもろう [秋津美羽]上「つるもそめし 姑すあさらむとあらうれの主すうるやるよらの体山 [万]七廿 「くちるまりあわれての里の妹か来てわそらるり 土やあらぐも [宇治]八條 あひうつる軍ども目をいろし舌を づりちをして立ちとものりけてとくみてとりとのとおひうりみをきゆでてまさるあまりとるにへど手もあてものを

つち 槌 [拾玉]三「ねうつ事にてまよひまぐるなつちのおとたたば風まあらで 戸

つちど 土戸 [門]三「まうつあづかるなかめのいえのれがつちのおさまで事とへる

つちどの 土殿 [さぐるく]十 大鏡 夫のちよ 東三条院の御とどのをさる事にて宮座京かたまちいで 大ちのぐにておはしけし 令をんよぞろりしげるるものとおはしましに用くしべいかつぐ土と

つちどこま [サカノ松]六五 をものでなどでもおへめ

つちくれ [今昔]二十 まあつちくれてや往くりそあらん まみつちくれのごし [子日行幸] 松むらの 風ハ枝をきらさる大ハつちくれをやぶらむと

つちさく [夫木]八 土さへ堅く凍の本の土さくるまの日のひとりつきけきひめゆりの花 [拾夫]ひむろ 土 さけて照る日も冬ぐれ消もせぬ氷室ハ土の外にやあるらん [万]十廿五「よる月の主さく さけて照る日にも吾袖ひめや君まあはずして

つちゐどの ここち [うけ]廿九 こちよりうろ人をこ殊むどにゐるべくもあくぎりなりをきてるおおみとなる人ハ殊よ主なのとのここちでまさると [狭]下十 殊よめでしこうくなりまく目にとうる座上の人ハ只主なりをかりとせきめ 死 あぐる [落]一ノ来 大臣ちかひたる人で落くみと思ふる和 六位とかくど異人にぐてあらばつちのいちいさの年六十ばかり とけハ一すかおりく かろるるハし出へしや [白文]十三十三 ち限府侍 顧左右前後粉色如土

つり 釣 [後]上 つりとるまでつるにまく [拾]衣五「あたその浦のつりにとも世るのさり火のおもろに人を見てる よしまの [万]三十五 まぎきつるあまよろしらん [門]九十八 かつとつり鯛つりほこり [土左]かぢとりの きのふのつりし鯛よ [新浦]三 あまあにつりせし人をもうらやりやちとせとまつの江よりくるらん [いせむ]一段 ちぬ釣 にわうき主まうん年るたよつりまろ日本ハそくまよるるん

つりどの 釣殿 [とかへ]三 「ひとあつき日東のつりどのに出ありひでおきのさい [祭使]十五 釣殿に三千をまゐりまぜまうし

る

【釣くらべ】二ちんでんのかみなみ西東などにかた池あり中嶋につりどのこしきせあへり 【宇治】廿三 大きなる池のありける釣殿に若きめのわらはどもなりければ

つりなは 釣縄 【拾】ちをう順【照】廿九 あまのつり縄うちはへてひくとしきけば物やおもはん 【古】哀一よみ人しらず「いせの海のあまのつりなはうちはへてくるしとのみやおもひわたらん

つりぶね 釣船 【和名】十二 舴艋 豆利布袮 小漁舟也 【源】之下一 波にのみぬれつる袖を吹風のさそうらまし あまのつり舟 【いせ物】七十一「よるべなみこそやいづこぞ竿さして家にとくとあまのつり舟

【あふし】十二 いきつりぶねたるん

つりざを 釣竿 【夫木】廿五 保名寺兒「おのれらのいせをのあまのつり竿のながきを我ぞかなしかるべき

つる 鶴 【和名】十八之二 鶴 和名豆流 似鵠長喙高脚者也

つる 弦 【万】七之卅二「みちのくのあだゝらまゆみつるはけてひけばか人のわをいひとろさむ

つる 蔓 【夫】九 信実「みさびゐる菱のうきつるよしよくはみずまでこの池さびしかりけり 【円】九 為家「いはしくて池のひしづるうちたえぬおもひもたえてあやひくべき

つるたち 【今物語】具家 昔おのれがおもふかたにおくれにしかば、つらぬきをなしてかさゝげてよそにこゝろをそへて 【拾遺】「かみ川をつるたちにまでながるゝは 【後撰】 【千】 十二 あつしお いつくしみのあるかぎりは、おもやてよるもくると学官としたりしかはこいかなのはるかにてしとちひさくおいしげるびはをときぞたてあるのひてつるたちにてひとちひさくおいしげる にゐのよべ

つるばみ 【続後紀】九之八 後太上天皇崩後 六之天皇除素服着堅絹御冠 橡 染御衣 以隙胡 也 御簾 及屏風之縁並用黒染細布 【和名】十九 橡 和名都流波美 橡実也 今ドングリといふ物也 【今義解】六之十三 家人奴婢 橡 黒衣 謂橡者橡木実也以橡染繒帛云縵 橡衣也 【拾合】十 内より ふくよ ゝとりたること深きに用ふとし

か

わすれしまでもおもひしとうちゃく心ちぬべき上人などきまぎてつるぎなどのたぐひなり 【五】七十一「つるばみの衣 きしいへとこしにうへきよりきまぎわしくおぼわたるは猶衣にあるぞ 【堀後】大井 之彼「はしの林のみどりもなくはしにしぼび かゝんつるばみのきぬちとせとあるまで

つるのはやし 【涅槃経】序品云 爾時 拘尸那城 沙羅樹林 変白 猶如白鶴 【拾遺】哀傷 恵慶 六「新つるさへあり 月のみかは楽きてつるのはやしはふりまさん 【千】哀 源経 上 むら あまるうらべのいつるのはやしのこてちらでこそきれ

つるのけごろも 【拾遺】哀 赤染「雲の上までのがらんまでもくもてしがなつるのけ衣ともふとるべ 【新勅】西園寺公経 おほきおとゞ「ちようちきてるふそのあまのようかうさねき雲のみてのけ衣

つるうち 弦打 【源氏】帚 木 七 雨夜もつるうちしてそはらつるぬし と おもなよ

つるぎ 【万】十二之七 つるぎてもち腕のぬきでくらうごらば家せんかくへあへてぞ いろ とおなじつけなり 【同】二十之卅 剱刀 手 まよそへしりくりぬなてまの夜魔も薦ちらむ 【雑記】太刀ヲ又 ツルギトイフモロハナルヲツルキトノミイフニアラズ

つるひ 【和名】大十三 遊牝 日本紀私記云豆流比

つろ 塚 【夫木】廿二 入納言通俊「ちのにぞのひし塚のをとうべきとつるのう入まてでしもたとうける 【竹川】三十七 つゝの上ゆうゝけまくへきつののやぐくさひのこ入まうしろう

つろ 刀ノ柄 【和名】十三 十四 欛 和名太知乃豆加 剱柄也 考工記云 剱茎人所握鐔以上也

つろたき 古くは弓の入のおもとるを 【万】五之卅一 とかえ乏みようつろへきこれ ゆゝとものなをと 【後撰】春 中 「西白の桜とて友ぞちのつろたれしるりそれが 人をまいたらず」桜花 二の入ひとしえ物ひろきてころぞしてよそるべのやうをくまなくとよ 【千載】十三 上若ゆれへけりたり女房のけよ七月七日女中宮の 女房女かうもつろたしそりならとききてつろたしそらら宿に通度 【新古】雑上 月あるく待りへうれるかる人の蜜と

つくそてつるれ〜くうるのしがあるりくろにやつくもくろ 口 雑下 権中納言通俊卿の拾遺をうびなべりうろ此
ませづくろもゆるく〜なべやて作りうえ云やあそもて こそことてすぐ後書もせかあるべくへ〜作りうえるとか
つくふまことて 関城内伝 「法ろくめこころぞるる多相川世元のの〜あ 彰考館 に廿五かそのま
るるるおぐくは世そうて第今の仏御堂上あらさえて こえろえてうう収びの多ようとつくへ〜える 「早ろそかや来ぐくえ〜うう〜みのうの今へえ会て月をろろろる 逆 「そそやが不来ぐくの
ろうう〜出をあるこ夜月もあうろうものと 口 下五八〜五まてへがけ今
たりう〜うぞつろそんとて 「やるる下よもまうくまろぞその多のぞうろ
ふえ且うへ〜うろる 「多のろにやや〜とあるくとろうろうをうろ
んのもほけ〜やあやく〜めうくえ独多み 同 分下 「ひぐろかうまうさえのふみをとえたてめ、や人へかのふらん
かくやつくへ〜このどもあおうりく〜うようをやてうへつてもあうりう
つろもし〜ううろうへ〜 宿夜 「ひぐろかうまること 嘘〜山川のくえ
ひきし〜くうりまろる女のうとう五月なおやめようけていひつくへ
多うえれへえびろる雅うの 口 廿雅中そめて後二三百かこぐ五待らさうし〜うう〜 「とくうるろ世の中へおうくてんとうろ多のやまうみを 逆 「いうそびえをえべもまて
まし〜うう〜 「とくうるろ世の中へおうくてんとうろ多のやまうみを 逆 「いうそびえをえべもまて
えんなよええつえにいおまし〜やまひそ 久し〜くおとぐ五世ぎう〜女のうえ
悪やし〜みのりうびうれてえみ〜うえべてへ 久し五づさえ
又もし〜るるらん 口 下廿 かえひえろうる女久〜くまるえべらざうろ
多松公をうし〜ろを悪ていふくおとうのざう〜ばうのようつろの
るうべやし〜やのあくまあひえし 三条 六とかくまるちつうえま
あまえまろうのぞもおおくなてつうえまと 口 代なのんありきみ

とうたつうへ〜て 権本 廿三さえおうどうつへ〜を号し〜ひて 卯条 第一 永宮女院のまぐこまうえぐらぎうろ府
様につけてつうへさせるひろう失番仏製 口 表二 三条院自の女の仏
古支伝 九デ遺志の下 楊中とうお書辞を痛う例多〜とに五百年前
あやまえろへ一も抑きやえ又松波志とえさ添つえさんとろ
松加波志の遺文うへうのつうえされ被遣にて初うへの上ようえ
宮様えまあるりとうろうえびひつえをんとて 「けまやおうひえ
口 二 代の仏つえ昇後した作り〜 附え在大を注補松居のりとうつえ
同一けようえやつえそんとて 「来うえ五つのう〜月先を事件にてやえ
まうたるげたえ二秋えまのとにて五あう同 口 下 広の
加階にて作り〜附おえ特氏陸信がりとう収びひつえそんとて 口 加階のちかどえへ上つうえまうう
をはそお納え資降がりとう収やつえそんとて 「住山のがうう
ものえへ 口 後上のこと女房え補うのとうえびつえをことえ
稽 表三 あう男の松をむをびてつえ〜うえんへ 「のやえにむ
あうく 口 雑表 女のえよ扇をつへ〜う今五びいひつへ〜うえ
つへつ 口 廿二 けえをを路鑑館よつへ〜う 口 千あげひの食物
あやえのうやとらひつえまて 宇治 入止をべし廿三
つへ〜そ来三三百石いとぐめてつへやす 「うもえ 卅九 「うぐう
あくぞえんてでふう 万十六 「うぐう
好紙 肩終 「性えく井えのうえぐもうえれあげてもまえこ 吉表三 「あえ五」てふ
てぐえるくへんのをとへえのえぐれのつえれ弥にむし 拾表三 「かとてえをを修のまえもの添ふのしが

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

つかねてもあへなくなきまどふかな

つかる 疲

[万]七 四十六「春日すら田にたちつかるきみはかなしもわかくさのつまなききみが田にたちつかる」[宇治]十二之 あやまりぬるかなとおもふにつかれたるかりぎぬきたる人ひとりつかれたるけしきにてよりかかりてゐたれば [万]三 四十六「ますらをもかくこひけるをたわやめのこふるこころにたぐひあらめやも」「こまつかれ」[力ケ]廿四 さきのせんしなどのうちに [久安百首] 隆季「旅ねしてつかれのよるのねざめにはしらずなみだのおちけるかな」[土佐二源上]「人目もりつかれていとどこひしきを」[後拾]「おくしのつかれたるにかへりたるを」[吉安記]よろこびのかきをつきらつかれたるに会ていたく夜のあけまで さる民ハいへるにけむとものつかれにへ萬葉あまりつかれて夜床のまきものをするとな とらかくのこれなくつくる [ ]「つかるる上とにへくかなに あるまでもなくそのねやうなとくいでたなれ

つかなき

[散木]後重「つかるるの上とよろこびねとこそつのみてるまでするなり」

つかへまつる 仕

[竹取]六帳 ひとつの女のたはすなはちまつるやうにてあるへけるべきを [きりつぼ]廿六 そのひびきたるなどさこゆるやうげにまつりまつるおほきさきのきよきなりとつかれてまつるを [推古]十七 菟御陪摩都羅武 [大鏡]九 そのころのみかどのたよりもなかりけれ まつりてきこえたるをつかへてつかへまつりて さこまもきこえてつかへまつりしときのかしこさ [万]四十 「まかの世くもとなくのつかれの手すも妹がかみをつかねてありのや [紫式]家文 井手左大臣「ふる雪のしろかみまでに大君につかへまつれば貴くもあるか」 [口]二十四「大るごとえちぐさの〈にかるやのつかのおひぐさの系を見めや」一遅の名に て然の公

つかのま

束の間のいとなみ少なきを云 [続世継]廿六「つかのまもわすれはこさるのなぐさみだに家の世をまもそむかさらまし」[今鏡]雅上「あはれげにはかけてる よそにそのまもわれもくもらずものにかかるやのつかのまもあくならぬ つかのまもこころのをかしきに[順集]四十「かつかつ見るべきのまもあらしくて恋や寝むとするちよの 数をとなかわす [金槐集]中「あしびきの山のまにくにかるかやのつかのまもあくやこそこてぞおもふ」[拾玉]五 栽数「月かけの めがあまにまろくへつつくにもつきそふくとまのつかのまもなし [新古]哀三 延喜御製「あかずしてちたるるてふかやの

きえゆくつゆのまもなきをみにきやりやあるめる

つかふ 用

[落]十六 ヤヨカ伯母 許ニ通リ 相持ずへらよろのりにもくつかひのへらひそぎてすまる [竹]一 耻ニ 「はこれもうつのまよるよきのつかのまにぞおもふあはれ [拾遺恵心集]三「ふぼんつかふるのつけだにあらひてこそつかひもかへりこるべけれ」[狭]三 十三 あめけるのあかけるきはよまつらひ にまかせて行きをとりつくはまづのこまつかひたり [枕]二十一 扇イラ 骨ハらそれど 人ぞ赤き紙を張りたるに えびらやこ [枕]三十一 菟ひきひろげてあらくはさつかひて [同]二十三 扇イラ [枕]四十二 あかぎるものちふも見えし まつらひのもつかへたる [源]乙女八 あるあふぎをひろめてつかひて [吉]四十九 かくけしきらなれはへハつかふものの [内]光木 卅四 あそつかひのそれにて云と [宇治]四十三 列当ハ しれどもたま まいふもつかふで楼宇は生まる事をふれがひろさく言きのことのと云せ五斗らってはすごかへされぞ [枕]十二十 きみのうぐるてへ宇々もうるまびあろくこてうつかひてうくそそ とろきすでや此宇ハ今ぞあるよ やふるとへはかくよろとやひてさく [やどり木]三十二 衣彼ノ イフ云ニ よろしるあつけの物どもやさやうにおぼさかぐくへ あかき [枕]三十八 なつりまたへ又すてひのぶらぞくとあの真中もしてつかひたぞあるへいの名きぎけり [紫]二十一 かしうるやうきつかうのひろうを [枕]四十二 つかうひよなこんざ [東屋]四十五 小君ノ一ヲ らくくしげなる云ひしてをまちかく つかふ人にやん [同]二十三 つかふ人あるごとも [土佐]さあひぞうつかへ見えとてつきそてあるさふるあり [落]二 あさだよく かく人のかくてあるのおもかがるを見つけて ことなりやがてれひとみしとあのひとりのそとつかひよしとのあかへて みなつかひよまぎけるさく かばあくあくれたのひまらずもし おもとしてつかひのひてと三の君をいそぎ やるめ

つかひ 使

[夫]廿五 公経「今の世はありしにはきるもあらまし の為すすめがたくやまと使ハ [同]四 [新]六二 衣笠内大臣「さ てまつるあつかみの使のあるはこそそ時にのぞめ見きかまさるし [万]四廿三 「とこしへにまちろひしへ 君が使のきたとこんあふそれふもとへはるる きのはるをまてぞきける [夫]十七 九「よがれ八使はれしときてらん秋風はほるこの川のべに [同]廿三 雁を 以使よりひきるしるもとてきこゆる [権]廿三ケ 今宵の夜よりきけるはきりつぼ]八「以使の行かふげもまたえぬ 使はえてしるき [続古]恋歌 但馬「武隈かへらで一とも見とくへ八よものつかひよるぞや [夫]廿五 知家「あけが

つづひ 番

松 五丈 てづづひにてまもみひろへ

万 三十九 おくてらーき歌をびおのくつづひらーをぞそ

玉 千載 三堀百太 ひとりねるる歌にてあり

つづひなら〜 次ちろく仕るさんとぞ

つづひもと 枕 五升かさそろのさき

つづひろも 万 四十五 おきべをへふゆたる今やいるべらあまをまるどのろうふーつづる。手ツねある雑を

つづむ 万 四百五 衰八今八あくどとまたおひーくとひづくーをきの奴のつろかかて

つづらごろさそ 玉ふとろにまうけくろうろうーかきまるど乃車とぶるふにてまれり

つづき 司

仲哀紀 三百賛 万八夫 つづきふ

宇治 十五 ちろひのそのまむ汚るもちつこそみゆめ

拾 四十二 ヨヨ此ノ名ノ

つづきめ〜 万 廿五 枕のつろこあーあろべたさべろのにて大

玉 つろものひて 八月弥司を住ちろを京官除目と公

保撰 まち下やとひとろふ月あろ半

つづきろあ 司位

まろきく 九つづき位ひべーくのようけてろ人あろん

国の司 万ノ字郡 **郷のー** コの郡 ○

万生 三山のつづき

まろ花あをいろまろ中世の男ひざれんろにに吸しろ

つづきまうまと 拾 雑上つろきまにてまちづる吐くく

つづひざれ いやも 六十九段 つづひざれとあるくろまでとゆ

つよく まれ 五ろちづは人のひろ人つろうもいるびれ

ふをおひてしまくくのれ 玉ふ 里一人べくのたをやべろにつよ花

物ろまとろてて 玉ふのそん 女もろうたをやぎてつよをあ

狂つよく半ろのけーうれおをもど 万生 十一今宇万八れしろ

そしーさあるること 左京亮実 上ぬーうよくさまろべ 三十

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

[未つむ]廿 ひろみさすがのりばよろづ代ゆさごのまぢかて [檜三五]氷枕のふしんばかりのいたろーつく刻に
まちむあろうたのそら

つよし

強

[名乗]廿 母まさでこそ勢ひをきさみ花をやとしてつよりにとぎれありてろ
[狭四上]このみせもちよりひつよりぬひてなき出ぬくれど [日下七]ワのロ名ちよも今ぞいぞ
まぶーるぐくて初ひをもせぶやとことようぐくいろーつよりうくロ湯をどぎれど [ろる]上廿五ろーろ花ロちを学ーつよりてロ対面あり [発仏]三八小五ひとうみう女房かんぐろうるひてきくとの
たのそろくぬつよりめらん時からけよと紫をて [宇治]古大河のよう初ロりてをうつよりてこそうろんむ [今物]古松蔭のおうせをうろ花ともまぶ
よきごやおうろんむくの口車をつうかきのとうろ学花ともまぶむことて今まよろうごび初ろくんもいそうつまろくろ申しくうーろめべろんむ花をみこそ
日比のつ花せめるげきもおろくかさめとやひつよりてこみはあまやうーつくてをく [落四宇業の今ものべろと人にも初ろてきまろうめやまでくお こーりてのひつうそ
おきろのて肉今ものごき日ろをとろくせさまでべ花てあてもろうめやまでくお こーりてのひつうそ

つる

[和名廿七]絡石 [名乗]豆太 [捨四]ひとうのこまのとぎーに附つまふ花をよろそのろうみ
[いやす]薬 [ろる]ろうでかおろり [山家集上]やまぶよよーあう物のきみみう外つうのめろおを初ろてを
やて〈或絡石ハテイカヅラトイヘリ

つらく

[夫吉宇宴]初日ごん方のむちぶりまんやらで山つくくろうるろ花
[名所]三新後拾集上 [あーる]のみのつくる [図]そうつくまの春のこころさえり
[千載雑下]崇徳院 つくろをたてふ浅ちぶり初をまをあとにぶめぶーと花のひたぶくもろく

つらつら

[勇合十九]おくさのろくぐの物をーくろやひろをよつくろうそろそ

ことをんうることもそぐぶざり花 [いやす]古薬かくろ初ようそうつらでまくせつくるくろみーろるろく [あじ]大
ゆうくろろ花月にて代よのてとみまてうまのもの内めうそを [浜荻]花久安万而無所知 [ようるろ]古まろ花ーさてて。
うぐろうつくろるさ初のおうさろをとろよ学うろるくてまでーろのふろこ
[さうろ]廿 三代のろやづくへにつくそうめうに [牛飼]廿六 をろうるうせくろうつくろうまで
みうげとうつまそうた猪つくまのる代のくよりあうめや [古今]廿 世のつくこうろてそ
[寝覚]古 「ひふろうこのまぐ正ろうつくひまて嵐ようみびくむさびの夏 [狭三下]さうやとさゆるか
ぐまるつくひよりあふ [明寸]某鎧表の内てよりひきつくくろろう三代にろんろうの内ろめをを
[さうつ]廿八 おおよう内伯宣百うけるそうつくて [古事中]をそうすまるそ初ろ内内ろまで伊勢豆多布
[元禄]古やちく津娜布例

つるく

[よこぶえ]横笛 かの名ハやひおくせてろく時ろべきよろからぞとろ女房のつくよふろるろとのろひて
[万廿九]島豆多比ろく [あーる]古さがのロつくにて女五のろやさろ世の中の上ろにおーろひろを
[狭三上]作ツタ人 兼ろうちもいよろがこ花ろ人ろつくろ時ろの人雅みも来りべーー [四三上]陳子ろり通り
てあまこたてうされらまてろ正本ーどもにつくひつく整代の中ろの子ろ [きろ花]古めぐろのろの
ろろろおおろ花ろやをろおーあけて春風のまぐろにつくひいろるひん [ろる]下廿七古来をさろぐきん人の
つくべどもをものこさびふよーめる [古今]廿六北のろくハおにそのろ浦べくひよやうそうしつくろに
[ろる]上廿 おくぐのやのまりのろにつくくをいまをよ [あーる]古九まで正ろ歌にそろくそろろろ今ーー
[こそ]廿五 ろのてをろまあさろにつくくろ時ろのひて [推り本三]中くんやまくてろのまろのけーまをつくくろくんと
[ろる]下廿八 代ろるの称ぎろくぶつくくろろくをきく
[千載]古 仲教 炭ごそよろろのまぐくろひをきくろけまで

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

つれづれ 徒然 〔伊勢上〕「つれ〴〵とこもりをるやどにあはれなるよもひすがらなかりけれ」〔柏三〕年比
ものおもひしげきまゝにひとのひなに女のもとにきこえんとどうかなくやひ
つゞくるもまれ〳〵にいとあぢきなし〔須磨三十〕まくらをそばだてゝよものあらしをきゝ給ふに〔末三〕
つれ〴〵とふりくらしてしめやかなるよひの雨に〔帚木十一〕殿上にもをさ〳〵人すくなに〔夕顔〕廿 つれ〴〵
のねのこゝちすれど〔狭衣〕三之六 つれ〴〵なればたゞ〔乙女〕廿 つれ〴〵なるまゝに
おぼしとしのへ〔末つむ〕二十八 いとかのかたは人目もえつゝみあへず〔大鏡〕序 かくて講師まつほどに
つれ〴〵も人もえしらずつれ〴〵なるに〔和泉式部続集〕つれ〴〵となかめくらしけるに
〔枕〕二十四 なほさりげなうつれ〴〵のみ時々〔同〕十二 つれ〴〵にまさるものはなし
〔和泉式部集〕人々つれ〴〵とよにすみける人とものいひて〔古〕哀三 つれ〴〵のながめにまさる
たゞ人のおのがつれ〴〵とゐたる 和泉式部続集上「つれ〴〵のながめのみして
〔和泉式部集〕つれ〴〵なるにおもひいでゝ〔大〕〔古〕哀三 つれ〴〵と〔恋〕
あふよしもなみ〔いせ〕四十五 つれ〴〵とこもりをるやどの
ぞ物へやまぎりける〔新古今〕十二上 後成「なが〳〵しきよのつれ〴〵にいくたびかひとりねをのみ
〔六百番歌合〕遅日 经家「春の日のながきかぎりはつれ〴〵とこのはもいまはひらかぬ

つ 〔万〕十一 二十七 中々二君二不恋者枚浦乃白水郎有申尾玉藻刈管。或本歌云 中々尓君尓不恋波留鳥浦之海部尓有益男珠藻刈刈。此刈管を刈つゝとよめるにて知るべし〔続紀〕廿六ノ廿七 大御
泣哭川々オホミ子ナカシツヽ。宣長云法の假字に川字を用ひたること万葉にも十八の巻に一つあり 五十一詔にも
とあるも川くゝり仮名のつひらかなのつ皆此字とこそあれ湖字を用ひたるは甚まれにて続紀のよ
用ひたるはなど〳〵門字などのありてよみの中にくはしくいへり〔古今〕廿一 ころきえぬるをいかでくものゝ
あかぬぎりの夕ぐれにおもひ〔後撰〕三 ひとくもとるまことつくよく見ゆるころものゝを

つゝ 筒。井ノ筒也〔狭〕二ノ下 十五 ふく まつそ此井の五月にもさらぬものへるあめもとそてんにぐ此井でことも

八ノ廿七

あそびしまさる〔いせも〕〔源三〕「つゝ井つの井づゝにかけしまろがたけ
つゞしと 〔素性〕三十二 〔袖中抄〕十五「さりぞことつゞしきことなどとぞぬるとでもむかしきの〔古〕羈旅「たむ
けにはつゞしの袖もきるべきにもみぢにあける神やかへさん〔同〕ハイカイ 〔素性〕
参議つゞしをさせてふきらぐさとなく〔夫〕廿 為家「手向せる君か袖の色をも猶のこさ
〇加茂旧記ナリかつ俗ノ〔裏ハキリタチテツヾレルモノナル〕ハさ
つゞる
つゞくる 〔三宝絵〕廿 今はてなきよしみそとりつゞしてなぐさめとあるに〔令本歌林四季物語〕十二月
歌よみとゝ詩などもつゞけておのがさまぐのちさあけのぶるまでへ
ありけんわかつゞくるものありけりなどうらさしとおし
つゞまやく 〔後漢書〕四 馬援傳春郷無恙〔風俗通〕噬虫能食人心古者草居多被此毒故相問
労曰無恙〔万〕十三之卅 つゞまやくさもなくあらばそのおもかげの見えくるもくるとも〔なや〕手あさらく
つがある 〔蔵〕下十二 さく数も人のこの人か三十年にもあるべし大和のきてらの名まのあらんこそ人の事をと
やすらかに病をも〔浜松〕七ときはのまことのあらすに成りぬる経をもよみしか〔拾〕恋「
つゞら 〔万〕十四之五「綴縫のふるやにはなさをふやくすつゞらにてつまよりこそのかひなきぞと〔拾遺〕
つゞらを
あさゆかはのまつゞらこなぎのよふやくもいとゞつゞらいふはくなくよひのゆく〔心〕まやくなく〔玄〕
〔延喜式〕十五 内蔵式 曝黒葛百斤 サクセル ツヾラ〔同〕廿九 正親町式 〇まつくら八防己かつら蒸くとらの此
廿九 十六 馬鞭草 〔本草〕 供黒葛六斤〔新六〕〔万〕
「まつやとのいまいそのみのまつゞらくらしくもしらずにさそ月のいかゞ〔山家〕下「つゞらをまきてかへるなどおもひ
人のおもひつゞらろらん
つゞらをり 〔男子〕三 とまることもいとおぼくもあれどてひとつにあるきさまもよくさうくるを〔羽〕此つゞら
既克騎折九折 〔蜀都賦〕隥陵 ツヅラ ヲリ 〔玉篇〕険岨也 〔遊天台賦〕九折 ツヾラヲリ
をかの末もにある〜山の末るゝばうらへしにとてみどりのかくざ

つらぶくろ

延喜式 十五 中宮御服所料黒葛筥四合 [illegible] 三尺

つつむ

つつむ。嚢又包ノ義ニテ カクスコトニモイフ 万 十三ノ廿八 [illegible] 万 廿ノ六十三 [illegible] 拾遺 十三 [illegible] 古今 [illegible] つつむとあやて [illegible] 松 十ノ廿八 右衛門 [illegible] うつほ 九 [illegible] 栄花 廿 [illegible] 新拾遺 十二 [illegible] ゆふぎり 四十三 [illegible] ことぶ 廿二 [illegible] 源氏 廿五 [illegible] たゞあらす [illegible]

つくむ

つくむ。袖に つゝむ 万 二十五 [illegible] 万 十七 [illegible] 新後 雑上 [illegible] 続 下 [illegible] 万 三十四 新勅 雑四 安貴王 [illegible]

つぐ

拾遺 廿ノ十四 [illegible] 栄花 廿六 [illegible] 神楽式 四 立都 [illegible] 栄花 十九 [illegible]

つゝみづゝの みづゝ

たのしひとうにありて 平三位 [illegible] いまも 「つゝみづゝみ [illegible] 夫 三十六 定家 「角 [illegible] 井づゝの [illegible] △筒井ハ [illegible]

つきしく

つきしく 欺 シムル ウク クラ 上ノ廿八 [illegible] ク 二 下 四十二 [illegible] 後拾遺 十二 「沖つ波 [illegible] 金葉 雑上 仲子女皇后宮 [illegible] さころ木 五十四 [illegible] 本丁よりみい [illegible] 蜻蛉 廿七 [illegible] 門 四十五 [illegible] ゑとらく 廿七 [illegible] 夢の浮 四 [illegible] うつほ 七 [illegible] 久 廿九 [illegible] きりつぼ 廿八 [illegible] 大和 五 [illegible] 蜻蛉 六十三 [illegible] 今昔 上 [illegible] えさく 廿六 [illegible] 枕 一 [illegible] 門 廿一 [illegible] 栄花 二十七 [illegible] 小大君 廿三 [illegible] 栄花 十三 [illegible] 源 [illegible] ささ 十八 [illegible] きりつぼ 十三 [illegible] 宇治 十二 [illegible] 鬼つきりあそ。袈裟つき [illegible] 旧本今昔 廿六 [illegible] 同 廿七 [illegible]

つやさ

闇 落窪 [illegible]

つゝめき きくめきとのうしたく 土 藝文抄 紫禾ニ嘖嘖(ツヽメキ) 白楽天と嘎嘎翁とのひしとも

つゞき 新古 下十六 「わか月さいの家のつゞきへめぐりても〔illegible〕谷のかけはし 拾 「吉野山きえ〔illegible〕もやすまるとそへつらん花のつゞきて桜あけもとの月の影ちる 堀次 女房「風ふけば波のたつやとみるまでにつゞきさく白つゝじかな 新六 秋の月 信実「あをぢやの松のつゞきの末を

つゞみ 万 三十四 をもとものかる鼓の音はいかづちの声ときくまで 夫 卅二 土御門内大臣「君か代はいさめのつゞみ〔illegible〕風さえ枝をならさゞりけり 神代上 鼓(ツヾミ)吹(フエ)

つゝみ 堤 万 十四 「こまのりてのつゝみよそける槻のこのもとちちの枝のまをなかごとくに

つゝみ 包 東路 四十 つゝみのかどみてなるなりさぶらひにあり 大和 二 つゝみありける家の人まうけて 源氏 十一 つゝみてまことの身のつゝみどもに 末つむ 卅 つゝみのかとみてあるかにまでつゝみ〔illegible〕

〔illegible〕のかたみてとへるをうちあてはしきけり やどり木 十三 絵料のみもびやうるれども〔illegible〕そもさとく えい 「あひをとりて女のつゝみのことをのてえびやうるにつけてうちふきゝはる ひらひら 二十六 大野のあるかのうえぐぬあやのうらうけて〔illegible〕つゝみはつてまゝのふ 同 十四 下九 紙にはいつゝみよつてのてはみれ

人目つゝみもこびしうなり 枕 十九 里にあるをはじめて紙と二十つゝみにつゝみて 狭 四 下廿 扇ノ紙と〔illegible〕紙料なるへべきもの

続古 賀 前内大臣基 紙にかきつけさせ給ひし 続後 賀 紙におくりものにやくのつゝみどの紙に〔illegible〕つゝみ紙に書 えま 廿三 のひそかぬわざなりとそ〔illegible〕ものふくたかすもつゝみあつめ 末つむ 十一 ひとへにおつゝし

付そへべかりける 同 十二 只大方の紙のつゝみのことをあきに サカ 五十三 まつつゝみてあなにやらぬ 夕二 上 二十四 今すでにさるふち咲えんとせよとぬふつきさふ

ひきいりて大臣にも せしとなくしけるうきるに〔illegible〕やら〔illegible〕つゝみてるん 同 上 きさるうちくれべきさりぬべきわありてのかと

法きるへしうそいるるうにぞ〔illegible〕ひつゝみてたらん 伊勢 十二 昔いとこはえ男女をあひ

人くのへをつゝみつゝ今をうちまつるそうくれてこえ地せ〔illegible〕やのかの

なり谷都ありけれはつゝみてひさしてやなにわり 夕三 上十三 後世の人のこころをつゝみて北方には〔illegible〕

すまえ〔illegible〕 枕 五十七 アサマシキモノ 人のこのよまゝがうしきるのつゝみもなく得〔illegible〕おもしろきひひらる 浜松 四 上 姉君〔illegible〕

とるる方につゝみなく入内のひて 〔illegible〕 二十四 いとつゝみなくあるまでまるもあるまにあきのかち 〔illegible〕 三 二十

女はにしおふうにてさやうのとまつつゝみきてちしてまうね ふつゝみなくもてなしおかとこたへ〔illegible〕

こころのへうし

つゝみの 万 十四 十七 「まへどかねのあまうまやのつゝみのなるるのあいは〔illegible〕でてよ。垣ほひさる井とのみる〔illegible〕

つゝみふみ 〔illegible〕 五 ことゞりのうまやうるうつゝみふみの大きやうなるに

つゝみふくろ 枕 三十五 きよげなるえのこ小舎人こうなどのよきつゝみ袋にきぬどもつゝみてさし ぬきのこしみどおきえたる

つゝみやき 宇治 十二 鮒のつゝみやきのあげるたらまちひきえをおきてすゝ入てなりおくり 拾 あすかスケく 和名 〔illegible〕 魚豆々美夜木

「これのとて〔illegible〕さるおちのつゝみやきなる中のむづき

新六 三 右大臣内大臣「のよしへいとまかしこしかゝてぶるつゝみやきなる中のむづき

つゝめく 十二左 よしとおりくることえしもこそあらへとつゝめきてやまぬ。注ささめくとおなじとあり

つゝじ 万 三卅 あふ信ぶ〔illegible〕のいはの石仕自(イハツヽジ)もくさくをと見もこにけんかも 同 四 卅九 「風たやのいはのかさの

あう管仕(ツヽジ)されどもさびしるる人おりくべ 夫 六 後鳥「いるくらへいひすくるさぞあちつゝじ

やまうけくるはひとゞろへとや 同 六 仲正「あさくぬやひをくすそやしより源のむかさつゝじのむ 同 お撲「ふり

えくてわすきてのべにしをに紅ふかえ咲つゝじるる 同 要り「神ち山いえれのつゝじ咲すまうこらかずそこで

のあまよふりつゝ 同 為実「ふかせ山るのもくその花つゝじありあてこふる方の〔illegible〕 同 信実「まそのさくいの

たらねの夕つゝじまするの〔illegible〕やまえそふらむ 同 六 右大臣内大臣「君たふえにおなさうけのひめつゝじくらもきめぬ

まづよ咲つく 新六 六 光俊「信うくるいあのうへの白つゝじいつれをみとてそうらえらん 拾玉 七 「くれるあの

こぞのをぬぎうくてつくりさくうす日をくらしつる

つくろひのごさく

江次第 七丗 六月晦日ゐく進殿寮官人舁二豆く志呂比一御服付二女官一女官傳授
中臣女中臣女供二天皇一着給氣息即以二麁給一

つくしえ

けさうじをさうるゐくみうづるかごのをさをゐのうるうるん
つきこうるそいとめでこころの あらひ 四葵ノ上六ノ巻ヨリ初ル うるしきりのろうるうる
はくしをせきをもうるのゐ 九く 丗伊勢物語のおほつくしむてえべりてヨタへまうりうるの
ゐつくしえをしのふおうるしにやうるうるうけろふ 十七 四九地名いるうるめるどくべをもでうるう丗の
ときこてめしのゐ耳わどうくもあいるをはぎそのをうんようくつくし斗せるゐくるどきく丗て出のひめ

つぐし

。ツゞリ へ 。推望云倍二云ヒトタチ一トイフモノニヤ 九く 丗三 彩もようみどつぐしやうくふわどよ
宋韻 丗二 くぐ梅の花のいろのてこうさくの みのをとめをべきをてくとうくひきさぐひくく
出のひめうる公命婦ハのとおうしとやふんしら女人ハるぞ四ひとうる名ゐうるこへとうめあくりあくぞのわりこのめる
ナるのるあひやえつらんゐつぐやと孜のくとおくきてゐべ

つぐある

今昔 九九 我前生為二貧乏一宿人どもゐかきまくにいそぐてこの雉翔をれうるどとつぐしる
おどよ詞林 新撰字鏡 醋 左加奈豆 志留 万 毛加 堅塩取都豆古比

つれうらん

捨 玄世中ふそく学てこうるうめてくらしくれぐりんのうるまわーう 九く 十一 ゐつまそしをむくしく
常 トコシナヘノ ふのサテ きうぐ 十 のとおぐちて傷よとさ

つれ

轉メラダンノコトクリ るまおりくて 万 廿五 ゐよみうるうるまわーうくて いやし 今二限ゆよ
ふづきうをんのとうもんとでやうるうるまあひーざゐのとあうるまわーくて

ゐをねんまうりうり まうる 夫 女八ゐをゆよふぐひてまうりてくらんうるゐとうる 万 十三 三ゐきゐをしそれ
むをゐの笑せこをゐ結ぶくゐ初ゐうりぬ浮 排 難ゐくゐ かくたり別世のゐをおせ丗まゐをゐ丗
ゐをうるくーにうりくる牧のむきーのふつれうりゐをれむつまりをれ

つれうる

跨千 名傷 新院御製 「禮のうをハ離ゐ梅てうんつ
ゐーうるべうぐるハくて世界のつれうるをのとくひふハ
とゐうるりのて 四五 十三 世のゐをうるをゐ知後のちの世のうるうど依ゐ
にもうるくまうくりにーを

つる

綱 延喜式 少七 遠國者八十綱打捌 四 貫之 丗三 つるみえ人
今ぞたうるうる 名ゆや 四九 おおーまうるまうをつるまうる
。俗ヨ綱の網とふゐ 新六三 先後 ゆうごーの空をの松まのつるようにこおぐごで
みくてのうつるをのくひく附ハいるぐよゐうごてまうくぐうる

つるぐ

鳳雛 雛中のお女 あくる後の松のうびるうあまゆまつるぐ
も草つのぐをとうる仮辺ゆハつるが れるもゐうるのぐうるう
つるにようるけてあうぐれうるく全をつるぐん 名く 丗つるぐ依ゐのうる
ちを都那遇 舸播 辺能 つくさのうるくありきとあうるもをうるくよ
ぐうるゆよもぐむ四人 拾五 三 あーうぐの夕ひよあさうりうるとうるあまをるゐ

つるで

五十六 人ぐらゐぐくよさもうるでう 雞 雞 鶏 ちぐてよ
ものふあーまうる坂仕のをごハつるでうるぐよ 廿七 五郎の名ハつるでひきをぐるもにをーー
きよ 古 年の 「きちのくまいづくふお仕で 廿八 珍の生るよ
らるうるでうるでるくもうふ忌をうるゆや 十左 下 えハをちの浦ぐゐのつるで浦とふゆうりつるで

和名抄 壺紋 豆奈天波 繩網 ことき

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

〔知家集〕哀一 よしよし入 ありまけるに「あしまよふなにはのうらをこぐ舟のつなでをたぐる」

つなびき 綱引

〔拾〕雑秋 平定文「〔源氏〕若菜上 あるあやしくあやしともかきなくてつなびきてえやしあひぐる」よそながらにたゆるでもあるのつなびきたるごとくなるさまて〔しらなみ〕下六十三 かの花そてなくりしさまのつまと袖のつなびきふりしそのをも映てらり〔カケ〕三条院 御会「かまもつしこあら山頭まみもの」まてつなひく絹ものもるのにくり

つなし

鯯。コノシロ 小サキヲ イヘリ 〔万〕十七 卅八「つなしとるひみの江過てたこの〔さむらいつくし〕十二 たもとにはみぞれぞすなかや ヲ 呢 ニ 来テ ハ つなしにくぞえすなかやともり〔日本紀〕〔河海〕ヅラ

つなし

ニクキ也 強顔ツレナシ 〔ことつくし〕の字を用ヲ ハソヘ 思ハヌコヲ 思ハセテ 物エンジナドスルヲ つなしにくきトハ イフナルベシ 〔松風〕四 家なるひびきほつなしにくきに社を見るなどおもはつくれちぶかれぐれ〔細〕つまるなしと思をたるし〔河〕つまるあげよたくげなるらし。契沖云 万葉ニ十七家持卿の歌に「つなしとるひみの江過てといへり〔河〕つなしへ魚なりその魚にそげよきあるものにてそれがやうなるにくきうわといふ〔日本紀〕よ嗜の字をつなむとよもつなしよもよろこびと此字の意をへるぎるろ〔雑望〕老ろた岷江入楚をみとつなしの字をよそへたるかなる本をおとくもあへるまとまうへにもまとよしびゆの上ををしたるあらんつなしにうぞうくするやくまり〔湖月本〕十三にへあらよきにぞ見へかやとあらに此鯯の上ををしてゆゑてる歌なるべくはの人のさかしらよろきあらくもしてるものとあつらる喉にかのつなしにくきてあるかくとふろうべし信よろわつきたをせる文つらんとをろるるらくいくろもるるべし私云 鄙言に大きなる喉にかのつなしのあるとをぞまをとの家ありつなしの

つなぎむま

繋馬ハヂウ ミルシウ

〔拾〕雑春「雑るびひのまでをそろくよつなぎたかのをそのをそぞけんなるうまつかど 故

つなそ

〔夫〕十三 能宣法師「ありし月の影のつなそをにたえるちてつる刃」衆を待てと

つら

海面 〔ふさ〕上 浪き山ゆ世をるてつる浦づらまよよひろくれぬらし〔神代〕上卅三 跳 テラフ 鮹 其 類 ツラ
川面 〔狭〕下卅九 浪おちら丸はゆぶいのつらする兵衛を吹ちびらしうる末うらしの〔枕〕十一 左右の大むかし御との手のたのてのつらにさきありひすへいとおしげる〔狭衣〕下上 そぞの挍のつらよりあそくなかやの兵をなせもの〔门〕下上 アスカ井〔狭〕下廿二 かのあそ世をの音もせ アスカ 井のつらに〔源〕下廿二 見ごそのつらにてやあくせまりとさべど〔はうう〕初まりてやくちどるる丸ひのつらにあるすらやなるあらみのはう〔伊勢〕廿五「みうづらみちみるにとるとをかぞへやらなるかうらえらとゆしそをえにしえんとさのまで〔六〕イセ 五十下「へて見をらうきを名をぞさびてつらあづら」〔後撰〕下 ふつきのくふくまりつらに淡のつらにて〔イホヌシ〕あふしそう川のつらにあそべ〔夫木〕十三「らにまろ丸き翔もらまそゆし秋の桜のかそえうらうさえのちづら

つら

列

〔みうく〕廿 ふくろなべるつらとおのひなしの人るあんくくてみるる〔うつほ〕廿四 ふくもぶ女まとてうちとあきぶつらよおのひきとくてえ〔竹川〕六 三らつらつらのつらよおのもひきとえのまじべ〔夫木〕六十五 さりとてこまるるあるつらにておかさうまりらとでもんえいひるらん〔後拾〕十二 類 ツラ 上 華 開〔拾〕雑下 宝あるまりそるあつかろ所のつらにえてすとちやうらんとすのまえめの〔ほ〕廿下「秋とまのつるをとまる丸とあけるねなるなろにそるにちならきらるん〔ことどうくし〕廿二 楽人どとつるなどさうぞくをとのく〔ちま〕廿五「とうとよかてらひのちくらぶ下がれあまつらあくま丸ねふどぞるなぐきな

つらぬく

〔枕〕七ノ廿 かたくろ桜の葉のうへにのこりてふくに系もそえぎるに白のうへくろが白きらなとつらぬきたるやうなるこそいとどうえれよあるしうる〔きうれ〕廿六 白虹日とうらぬけり〔ほ〕秋中 躬恒「白雪にまく風のふきしく秋のちのつらぬきとめぬ玉ぞちりける〔古今〕秋上「秋の野におく白露のつゆはしまとつらぬきかくる雲のいとすぢ

つらく

〔万〕十一 廿四「こせ山のつらくつばきつらくよみてつおのかさこそやのまるのくと〔门〕廿五十五「鳥之引のやのどのつばきつらくよそくもあるめやうろて人ら見〔垂仁紀〕三 陸 ツラク 究 見 其 為人〔後撰〕二十三 つらうちあきすまうおがきる〔拾〕新婦 ツラク 細 見 入 身〔门〕熟 ツラク 視 下 宮 ヨ 日〔つらく〕共 限 つらくなりはくなまきるれまさる人のきまのよろうぶるなり

つらぬ。イヒツラヌ 〔四の紀〕〔千載〕冬中 そのかまうひとのかごとすよりつくねうるあのへそく

つらつき 〔宇津保〕八四 ほそりにてひとおかしくあてはやかなれどつらつきふくらかに 〔きりつぼ〕廿六 つらつき いとあたらしうおはしますなど見え給へるあ 〔門〕廿七 まづつら ゆゆしきつらつき顔の色ひさもあらぬ人ありけん

つらつくへ とかいふこゝろげし

つらゝ 〔千州〕四八 あやまちしてけるつらゝくりきてみてきそそぞて 〔まく〕夫 中ねむたくぞくびすてつらゝをうきてむかひのあたり 〔古今〕ハイカイ 大輔「みずきゝろふ山ともあるくかなまたつらゝあるこそてまつはへのえら 〔落ち〕一百八 らつら々をとらえて入れて かくきしてとちむあたのつらゝゝらむあてきそぞ左とまふるれる 〔撰〕札四 〔要之〕下廿五 三十 けき あくるゝ〔文七〕〔夫〕卅「 まかとかそゝあやとひのつら々ゝて 因 ひるまやこそ 落つ ちやうちて おもひのほかの枝をへつら杖まつく 〔あふひ〕廿三 つらつゝきのゝくいさゞあ 〔源氏物語〕あや女のつら 杖つきて人よちゝるとさく 〔撰〕九十四 仏ハ如意輪ハ人の心をとちゝ頰をつきてつら杖をつきてたるそれは世に あくもそゝれにもずらし 〔ちかる〕上 いつこそまとまするべきぞようとひるかひみげまとりゐるへあくらぞえいずらしゝきえ ようそのひてつらゝゝをつきてよりふしのゝへれば 〔夜の寝覚〕二四一 きき あひとけいゐるつらの 中の君の方にもとひふしてつらゝをとつえて月をつくづくとながめ給ひけるに たそつゝるべきと見てながむるに

つらね。ツレダチ テナリ 〔拾遺愚草〕下「山あゐの衣なれてあるあるがうつらね袖のまぢりがるへ そ 〔きりつぼ〕廿九 ゆきまみれつらねてゐるそもふかきあそそへのつらねしい人の心をやみ方さへこそくまもちつらね枝の ふしをとつらねてあつえんうとをもひて 〔玉葉〕雑四 〔先達〕いそあきうたしもみしいらへつりつらねし枝の 枝よこそたてゝ 〔秋篠月清集〕上

つらゝ 〔新葉〕春下 牧堂二「信夫の松もさぞかしくいろえてつらゝるゝ枝よかゝる花ゐる 〔新千〕雑中「わちもえ竹ろ 名かの代は竹代めぐりそをともえそふつらゝるゝ 花さのかざよひの月 そのふの世くの風つらゝるゝ枝よ吹きつらくへん

つらく 〔続拾〕冬 苔かさしその来衣の袖まやとひるまつらくの森のまえをつのひうれね 〔推〕廿六「つらとぢ錦をしだく 山川をなをくべしぞそらまづやきぢらん 〔夫つぎ〕廿六「ね日さへわのくろひとけるかうえたちどろつらくの むまかなぐるらん 〔千載〕冬 経房「きぐ思るのうちれのおやあれぬらんつらくみかようりつやの沖まで

つらくゝ 〔大鏡〕五 この後の門を過ぎて參りて中まゐりなどは堀川どのくめをつらくゝふさし聞え人らに帝も大 ねもいとあさましくやしめむ。山吹氏の強ようゆしくしきの事まるべうまるぞ強劫の立

つらくし 〔大〕五 いとあやしねさおろかきてねをききて大ぞしくとつら様しきさしげてまつり みそつのくしきとらぞてしくらくり

つらきところ 〔うちくも〕初 つらきところあやくところなれどものいとさるをえちてもちのゞきを 〔後拾〕冬三 寄「 うへてまつほそえぎるりぬまへつらきところの紀かくらもあるうるゝ 〔むくら〕十二 ころもめの手くへにつらきてしてありとも 〔きりつぼ〕十四 さへりて人のつらくみゑんかしといぶれみさしとやう

つらし めくまくゝる 〔後撰〕恋六 よみ人しらず「あめことをとよるまありてよろづの杜つらしときみみとみろろ比るを 〔すゑつむ〕九十 つらきんまとしのひて 〔夫つむ〕ハ ふかまてさせのえらつらさまれおくりつるまあらえ 〔むくら〕廿七 つれみくでつらしとやひんうちもたかうで 〔きりつぼ〕六 つらさもきえぬへし 〔後撰〕恋下「よそよそても見るぞなまれをぞたらく末劫に うとえきむのつらさま 〔古〕廿上 興風「契りおきんぞつらきゝ七夕の年まに一夜あひあふへ 〔よもぎふ〕廿三 へぞそうろ かどつらしくやえれつらん 〔玉葉〕恋三 西行「うちみてもみぐさゐあてまし中くまつらくて人のあへのと思もぬぐ 〔家隆〕秋下「まの衣をうきをむるひとやえぐまへつらりぬべき月の光ぞ 〔続古〕恋五 表還「さこあるれらんと 人をこしうどもつらさつひまうやしざりける

つむ 摘

〔拾遺愚草〕下「いつしかとこぶひのこゝろまうちかのてつやさもいまでくまるもけみなくよ にまつむ人あらば春日野のさるまの若菜つみをとてみとらん 〔さらしな日記〕四十四「いつ まてらつしつもまくはきの 〔清慎公集〕「うらま 終ようとひるろのべの見るまで 〔六帖〕一 貫之「ワろるまつむをとれるを人こはそまくつむやぶの花とをかくれ あらん 〔古〕十九

「秋立べのべにそそろくをそろへ〳〵いづれの人うつまでそろぐき」[四]表上「書日躰の日ろみつつそろぐき」[四]表上
おそて人のゆくへん 小町 大鏡 拾遺 [四]「ひとりふたりを[四]人のそこにあつまりゐて」小野 [五]よそに
てもそぐかあり ともに人のこゝろをそろへつゝそのがれ [元]世八 被察大納言大饗左府 [元]「秋茱萸のやうなるつとし
おべり〳〵よきく毋のたゞめうまくして仿りをおひてよろこべり〳〵」のくるくるかてこよろこべり山物のかきねと
せぎこおくぞつゝしと 子ヨソムニ ヨセタリ [万]一七廿七「をとめらがころもつまをとコルラツムラノベタナリ」 [万]十七廿七「をとめらがころもつまをとコルラツムラノベタナリ」
風雅 [春上] 奉後「きみのさかのくまぢろ〳〵紀ことけてつめるころろおあ
たぐこめるつゝろやさんねやみ〳〵よ〳〵て [万]十七「君がため山田の沢よあぐつねとまぐけの水よ堂のまことめまてめ
藤袴 伊勢 伊勢 [イサ アキ ヌニヒル ヅミニ] 藝 怒耳比蘆菟弥耳 のこ兒 十八 [巻] 恋ひつゝ
染みのくろ〳〵 古 春下 仁和帝「君ゞ為春の野に出てわろ菜つむ吾衣手に雪は降つゝ」 [万]十九「春の野よ紗分
よめろ 古 春下 仁和帝「君ゞ為春の野に出てわろ菜つむ吾衣手に雪は降つゝ」 [万]十九「春の野よ紗分
たゞのもやらめ [万]八「ろみつまでとゝろこそつめ [秋]まきもくの」「つゝろ
菜ろりろ 新古 [春上] 「ゆてこぬくもあのべまるの野のかさみ」 [万]十九「春の野のかさみ」
のふろ野のつぼまこれつこてもゆろし神いぬるとも [四]「きみ人のかこそつめろふすさ
れつひととて [万]十九「三分雲へ」 [万]十九「三分雲へ」これまつこそをろみ きみ人のかこそつめろふすさ
とてあまくの裏をろつゝろべつねをろ [秋]「ゆとろくやりときくこそをれのあの」 山家集 下「ゆとろくやりときくこそをれのあの」
つゝろ〳〵人のふおろくして

つゝ ツメル すり [秋] 「ゆかり」 三条太政大臣のとゝ仿りろう人の女て君ひつ
いとあさみ〳〵くつゝろろみとひたべりろろよ三月三日の小方三安のりちひこて出ふに
よめろ 実方 拾遺「三日の秋ののちひふくに〳〵きけいよ
女とゝてろをいくつまもゆろをを浮ふのけさう〳〵ぞちてひろ〳〵ろ 古 春下 「ろ」

つゝ 積 又アツムルノアリ [後撰] 秋下「秋の花よりろろ春のあをつふ
こて [新十] 恋「公敏「いろよせんあろをが庫よ独めまてつひやあれき
「恋ろをとカ車よ七車つゝてろふらくこぶふろろ

つむじかぜ [神功紀] 三 飄風 (ツムジカゼ) 忽起 [おなじ] 二 文選 詩云 飄風発巻高樹 兼名苑云 飄暴風従下而上也 和名 豆無之加世
[三代実録] 四九 十一日辛卯 廻風 (ツムジカゼ) 悪起 外記 候廳前旋転西行小虫無萬数飛散 其中一
つ風ふろの暗活ろくべ〳〵 [平治] 三五月十日の午刻斗敦ろつゞお風おびゞ〳〵ろうつゞぎことろいろに係て

つむぎ 宮治 一廿三 つむぎのきぬをぬぎてさらせれば [和名抄] 毛敦昭云つむぐと
[太平] 「あふ坂の関路よろふやおろのかさろの名をつむぐとひく
ひくとふつゝくと引とろをつゝくはのごろろとるがつゝくめろあこ係
只引つのしろにとせてのごろろるふし [催馬楽] 伊利乃 たろのおごよひろのとるがつゝくめろあこ係

つむく 宮治 一廿三 つむぎのきぬをぬぎてさらせれば [和名抄] 毛敦昭云つむぐと
[太平] 「あふ坂の関路よろふやおろのかさろの名をつむぐとひく
ひくとふつゝくと引とろをつゝくはのごろろとるがつゝくめろあこ係
只引つのしろにとせてのごろろるふし [催馬楽] 伊利乃 たろのおごよひろのとるがつゝくめろあこ係

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

こゝろつめ〳〵あこめあこめ

つゐそう 追従 ツヰショウ

[ろうやく三] こゝろにもあらぬがあのくるしませ[支粋]金藤篤茂
[まろ]それあくまで[去]ひくるあそびのつゐそうをもねんごろに
あこめらうのよひてつゐせうーとろんるのび[そ]をとも[六]つゐせうーえーきごうつ[敬事草]つゐそうの表
[七秘]六氏の内をにこゝろつゐそうーとろとあきあーとも
なの無をとるとのひゝんくのひがゐるやうについ〳〵とろ
[法曹至要中]臨時追従之徒 [続日本紀]十七十三 追従者動以千數

つゐそうつい 追従 [江次第]十七廿 るの郷より出

つきえやー 通事 [ろく]上廿六 のろこーとろんの近くめ五位
[ろうひ]六二「市のまの間のところにつきえやー狂せさんのまろこん

つの 角 [浜松]四十七 いひーうむおそろげゆでつのみどりひめ芦のそよつのぐれゐとのる風そろく [毎思二]拾上
[新古]十三上 通光「みーまにやおおも生ごひめ芦のそよつのぐこそろさんべゆつみがゐ角もそるあざりろう
[浜松]十三上 ろくん「るかさがごうくの風よ治とべ
はものごねあーのこそろさまざみ

つのぐむ 角ぐむ

つのさうり 角觝 [盛衰]廿二 かくちのりのん角きろりとこーらく [義経記]四 義経の一行吉野山にて大衆と合戦の条

つのる 順 [盛]廿 右近衛大将源頼朝卿追討の為に院宣を下されて日せのて集りこふよ四をととらも

上とうきこととげて初をびうえ花よさきたる年のいちびとところうーとつよみるる恋をこーらくてまのり
ぼすおさんすぼこーらくてつのぼざりを五ぐすら五てろうくる何のとも初五をりつて初をびうえ
うろうろねこもいそれめぼ恋のろくまぞろうなのそくこうまをるる恋ぼくみぎぞひ」と五すべろうさーあげて
矢めちろよひやろくこのろうるべのまをりつてうやろうよろまあーんぼ〳〵めをくいちびのきろろ」と十ぼへ
いさそぎおぞくりれべみ二五い人あそてふさめきて〳〵

つく 。タルキ [万]九大夜づきのいひ〳〵くなのおれよつ

つく 。ありき あ〳〵紀 糸りうた 引〳〵紀 ありうき [あ〳〵紀]

つく 突 [源氏]五廿 右のろひるをおてかよつくろうろ

つく 附 [万]七廿八「ひろ世川祝つく年おきぞをやんふろ

つく 舂 [万]十四廿「いれつけがかぐるおづをとてひめ
[おつくおーろ]「まちのもちよ杵のまるこそきこ
[千載]別 九月つくる日をく生をまで「当死ろ
[まろせ]三 七ろりとおのろいろげくよゆくんもも

つくる 盡 [まき]十六つきんべくもあろれがゆく
うこもーもえまれぞぜ [きうが]士のとぐ
らにれりろきのつきよえんがこと人よめもうらぜ [求]
にやおーんおんびそく例るくめてもうるまると [求]
きーるがまが代 [ほお]義勝命婦「いみくのこぞぐもえつ
かの春のこそぐとうきつけてろーん扇うけのくーにつき
[口]甲 世代初てこらの宝をつくて上のぞーいそぐきいそ
あるまこる [万]廿九 春のよろこらふとうきらやも [新千]秋上 後拾「秋の月をもあひこんを初てろつくるそそ

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

さゝらしなの山〔新続古〕え 静仁法親王「みどりそめてたつるはゝそのつきもみなあのかたのみのよ〔桐つぼ〕五 れ務
しめのうつ一宮のもすりくは かくるぞくちら納どのくむとつくしてかしうせきをすめ〔同〕廿七 きよそろもそらくしそへかう
まつまり〔若菜上〕十七「ひろとしてまうるしをことへつきにしたまてそこの世のうちへみきたれる
ことけてこくらまちて

つく 築 〔竟宴〕「つくえあべよらのそのたつきとそめてよくそへあまとどきらかのくさび 後撰加岐 に都久介玉うき都岐阿摩斯ちそのもよらむ加織能美夜比登〔ときとみ〕五十四 小かおのてつき〔古事記〕下廿 そのろ

つく 着 〔きりつぼ〕八 あくえとふあぶまうらおそしつきたるにちいろぞくりうふあうらん〔同〕十 今婦かしこは
まうでうきて門ひのゐくようらく〔同〕廿八 そこてもちの從者の末よ従合つきまりいりて〔えとみ〕十 放
宮れる毎よつきあまりてうくつきすすがる大学の衆がもあるときこしめして〔はゝきゞ〕卅八 うきこえぞうる公地し
あてたえしつきぬ〔土左〕るうらしつより むろつようつきぬ〔東ふじ〕廿四 うれろのさまにてかえしつたそり〔すかし〕十一
例の風やまでふやうにあつしにつきのひぬ〔はまつくし〕五 正月なぶびまりうけとのくすへが五日にのぼうらぬ

つく ○吐 〔字治〕三廿 子ともうにのしちるそつきてまどふわうよくちろそつきまどひあひて ふしぬべくらそ
あまたとどまち ちてはるかにつきちろしてふせりあひけり〔同〕十五丸 見にあらにそつきあひけり
〔竹取〕上廿 あうとくくらのけるく まるおどとあたへどとつきてのくすふ〔和玄〕三卅 胃氣逆則歐吐 倍止都久
〔枕〕十二丁 やまひへくらく 起くしとてあたありくろ見としきもいとわずらくくらうてがろうりのるもおのつきぬ
扨猜抄灵氣求ることたどろを起しとの解ハあやまりなり 和名に同じ
[redacted]

つく 付。ツクル ふ之〔まつむ〕十四 今あたうけそうけだやとどぞさぞれくさろんかハやのとみくおひのくろ
〔あさひ〕十 ねよるさけおくれてまそくしきふつきさらくるあまりに〔ふじる〕四 さまとぶる
ざれてうふつきてみそしろり

つく 人に 付〔後撰〕秋上 ふたの男にむかひろる女のひとらにつきてよみける〔六帖〕六〔後撰〕雑二「人につくらまつらどには
天竟未みの枝の下ろうる見の子ありのが〔うしや木〕廿四 このそあひしそさるるどそのろこの頭へりどあ
みあつくふるまろもひろんどて〔万〕三十三「むらづくみろく飯来にちらそらぶ 羽ぞつくとするぬまどよ〔金〕
いろるるお羽のやくまのあるらん〔あけまき〕卅八 世の人のかふめちそたそろしたる羽ぞつきになりのものかもへてそくるぞの あろ
つるやのそイ〔字治〕卅一 ものけのうにつきそていふやう

つく コト付ルヲ是ヲ告ト云得ルハ非ナリ〔古〕去下「吹風よあつらへつくるものならば 此一本はいとにつとへよ」といふまうし〔いそも〕九 後
初者あひら采まその人の住のとてしとて 書ろたてつく〔万〕廿六「常陸さし 行む
居るも名惜者をおつらしてつけて妹よあつらさん〔未練ヒテ〕八 名とどすにやつけかうしとあそれに出発せらる
〔秋〕「うゑてまろみてぞもつけんてのあやしさ〔河海抄〕花三 あけよける
ひらくくよつとてそ堅のきのきりつぐき ひ出すへる〔同〕廿三 風よつきそて吹来る倉ひの〔花のえん〕八 為虚
晩するまうのかりのひよろうきくやひいてみめよし清惟光をつけて倒そもするひそれが〔東や〕卅六 ゐるまひ
たるめしせてうけよとのあよ〔字〕十八 鳥矢いやまたへ人のほけうに たらくありろ〔いそも〕十一
あまりとて出うけくまを

つぐ 告〔古〕恋四 よみ人しらず「月夜よし夜よしと人に告やらばこてふに似たりまたずしもあらず〔花宴〕廿一
〔後撰〕恋上「吹風やけさくもちきぬとつげつらん枝にこのまろ見えざりけり〔はゝきゞ〕廿六 ふる
とやせが〔イセモ〕平五 をふ雲雲のうへまでいぬべくハ秋風ふくとかりに告こせ〔古〕旅 小野篁「わたの原八十
浮けてこぎぬとく人に告よあまのつりふね
[redacted]

つぐ 續〔万〕三十一 いもが家も継てみましをやまとなる大嶋の根に家もあらましを〔同〕八廿五「よひよあ
ひて朝がれせづるろうくれのかの萩かちの母その恋ちそやうげ〔同〕十六 つぶの木のいやつぎつぎよ

夕 廿三 とろつぐ ほそうみひ あめひ 廿五 佐るどくちこころくさのどえ佐へつぐん

つく

木鬼 和名抄 十八 爾雅注云木鬼似蝙而小鬼頭毛角者也 和名抄 十八 かしわぎ 十四 やどりぎ 十四 とりもち 十四 とりてつくろひいろべきこと

つくろひ

さやうのたるくの人の弁くちよた人のまれにいをつくろひろひおこと
くまでとあつめようろひるつくろうさものど 五月きく 五月よちろ
時もあるを うとても 三人のりきんとやゆくしやつくろひぐ
さものく 枕 廿七 そこくさぐりのもろくのこうつくろひめで
ざるりめくそそく 口 十二 四段五段六段などのそうろうそう
五ろうろ 十八 おあひもちくとろくつくろひくんどあしのうろ
つくろひきこもまぶ 十六 九 引つくろひべきぶみく 口 十八 仏
口 廿三 女のうろうあつくろひて うみろふ 九 今八世の此さをぐ
女のつくろひくそてろ 彩のをおひ仏八仏さらん まひむ 廿五 さ
うくとひきつくろうもものさん 眉のけざやうよるりくろうもも
るたつくろひどもととて きろつ利 すやりろぎこそ 口 人
やきをきろどよてもぐくのひつくを 推 もけさろうたやまく
とりのもろうろどよたん おをあかス ひくるのはの佐氏のをつ
ろぶち佐よろんばつくろひ佐るぞことひと大るとちぶめくろ
今うつくろさを佐らん 廿六 五九 くろ人おくんろすさをべいろ
びおをよ 廿六 五 枕 廿五 とのをつくろひ仏八仏さらん まひむ
廿六 五 枕 廿五 とのをつくろひ仏八仏さらん まひむ

皇極紀 六 やまとのおのひろをとろくんとまあひくうり拳始腰ツク豆矩羅脊母 ろうあね もおどうべりろん
ひくちものさまをぶ日報ふろいてあきこぎたたべろ仏風よう
ろくるるどつくろをのひきくかろ五とこぎとつくろろもも
三武尸のおりくひきくよれくろたくこ二人るぐくいぎと作らろん
ろ未ちぎど 口 五六 小ろ尾とりぶ赤紐のをけくろに号をもぎ
ほろるくふをろく 口 九七 一の衣のいくろうへくく彼分合世てろ
かろうりきめのくびりどつくろひてあやするろ九ろ仏ろどう
よう菊のろつくろふくの狛で家ろき まろセ 三 をろるどくて 十切抄 二三 彼国の医師をむくまでくろのでくさをぬべくつくろひろきろれ
やくとのぶ 口 四 衣りやにでつくろひてやどりたぐると 十切抄 二三 彼国の医師をむくまでくろのでくさをぬべくつくろひろきろれ
たろいえにあり

つくろひぐさ

つくも

うちとぶも 和名 廿二 文字のつくろうまのさきら 口 三冊一 紫
ちびろろくやさろくきひまをもつくろ九ん 中 六 久人をろ
ケイカイ 般初 「いくぢの田とつくろれぢ郭をもでのろをさてあろくく
よぶ

つくろく

あふかえ 廿 がふのろさまにつくろうくてうそ大ろ
永代 七早 経営天下 一 彩古 家傷 ゆさよろう結をを
古 北上 ろくうをを枕のおまつくろそこく

つくろかさね

狭 四下 辛 かのろ整をびやぐてくてうよ 仏の拝のんどくへそこにてそ
月日にそくてうろきれさやをひろ

つくもがみ

狭 平中九三条 ことにひろく面白きあり様にて大家の私ともつくりこうごうしきものへを

つくやがこもり

よもぎふ 古 大和どのにつくりこがさこもりたまへるにこそ

つくもの

そま五 木のうろの蟲の様にてつくりこうふとも

古今集 「久方の月のかつらもつくりこうふとも

つくゞゝ

拾別 つく、妻の袈裟が下ゆるにつく、梯 天智帝製 「つくゞゝしがわれをのこそつくゞゝ

ひそかなるものとて

つくのみ

僧 吹芭 大和物十七 つるる西連寺にて つくのみ

つくゞのつと

万三廿世 「おもひのつくゞの綿の如くにて

つくゞむ

荘子 外篇 口鉗而不敢言

つくも

あめつち七 ようのやそもうづらりゝそんびおくぼ教をつくりて

そく十三 うくいつのなくさをつくり

万ア 中古 なでいせうそくぐさなくて久くくるりめめづらゝくおやゝとおりくどうのなゝとつくり

教つくり

こそふ三 まで女の教つくりそぼんのまくに教のおそれもおりて

こそ 古 やどりき 古今 古今にてお教ひるなきあをつくりのくつくりこうたつけてもうるゝくいつくりきことをとうく

づくりこうんけそひはおのづくりこそめべきをうくおそゝまをつくり

下の人つどひてうたさうぐをとお木ル吹の会 注後会集 「つどひまどひつゝき 萬 二廿 教もいまでれのくりこさあをつくりふ甘り 枕 七二 ハシタナキモノ えるうことるぐ人のの心にて女のくよ

ゝかあのことえのとへ吹うぐうふのうつとうでてあいとえくゝ

つくもがみ

狭 世つきぐきうけども仰りでこ 枕 七二 ハシタナキモノ えるうことるぐ人のの心にて女のくよ

つくゞゝしくりき 万ア 二廿 教もへめべきことどもつくりよ初てもえん

狭 三廿三 おとぐつのでゝ仰りぬてえのめくゝ差ゝのひろんが 万 ふみる 七十 さうべきつぐでつくり生ぐけゝものゝ

こそき 七 やうくあけ教をのうきゝとさらにつくり 枕 七二 大納言の殿の姿いやめでて物

かゞうをうることおおゝとのふるをもぐしゝのひゝうはうくうゝ 源氏 桐壺 世の人の心をつくし給ふ

馬うがミ 狭物のうでゝとえ吹ふえをもぐしゝとてこうるゝなどのまゝ

ぬくうやうるゝ

つくやがこもり

つくやがこもり 古 下世六 狭てさらによくくる食やうるうそうるうそうるうやうるうのけゝきえのをも

つくもがみ

つくもがみとり 枕 廿五 めでこえりの仰り仏のり

つくもがみ

つくもがみの 月宴 廿三 月のうえんをさせのおんとてえくゝ

たうるうくを仰りてうくの仰をえ松竹などをうわ松竹などをうわつけてのくあをしう

つくもがみ

つくもがみの 宴始 廿三 ひくまあそびもうのうのにもうゝ

つくもがみ

つくもがみ 枕 廿ノ七男コヲ 夜這フ 狭さうゝうそうゝうまゝおよ

らんえとゝもふくのうさぎにやえもれもおげよ

まてもえんとゝもやえん 中将ノ君 廿三 うくさくくうれうべ

のゝおひうえれぞのゝ

つくもがみや

狭 廿六 ゝまうもうつくりを教どもしくうえ吹うくり

○袋えつくり教人教まうの仰うべき人うどとおとうとゝいくり仰よりうう教とのゝ

つくもがみえぞ

羽勅 廿六 川岸の月のうゝあさゞ廿五 ひのこまうう楼のつくを枝にまうとつけてさゞげる

つくもがみひと

なるとて 古ア 「つゞくるむまゝ 九六 七月ぐうに教のつくうえぞにきゝをつけて

作人。作者ノカ 枕 廿三 ゝまゝて文をとうきてゝいくべきまゝあゝべ教がうりええあゝ

下のつくるを混ぜおどもさの注削り改のつくて歩う看幼人赤て指すべ一を他もつひて納べ一

上つくりト見合スベシ

かき 出積スルモ ねどもそれがつらくひろくつくり入きくはくわしきなれ

つくりごと 作事 【うつほ】三十六 此かたのふえは昔きゝしにかはるところなし、これがかへるさにつくりてこそもあらめ 此かたのかねの[illegible]

つくりゑ 作繪 【うつほ】六十九上 きさいの宮の[illegible]おほむかたの白き衣のつくりゑなどあるを 此君の衣のさまをつくりゑのやうにかきて見るもあやし 【とりかへ】卌四 千歳のかたのつくりゑなどして つくりゑをつくりまうけてぞや 【玉葉】雲図抄 作リ繪ト八色トリヨコライフスリ前ニ帝木ノ巻ニモ云如シ 山槐記元暦元年大嘗會ノ屏風ノ繪所ノ定メニ修理進藤原有宗 淡 内匠少允 中原有久 作繪 中原 有久 トイヒ下ノ若菜巻ニモ墨書ト作リ繪ノイアリ皆同ジ

つくる 造 【古】ハイカイ 上 紀よしひと「君が代にあふさかやまの岩しみづこがくれたりとおもひけるかな」 よるの君の心みてつくれる家へまかれりけるに あすかの御ちかひに 【同】八十三 うぢの宮つくることをきこしめして 【同】九十二 つくりたるやうに堂をあひて まさごとやどもつくりつゞけて 【宇治】四十一 いざ此雅子を生みて 作りてえん 今まてこし あはれとひとはしらじかし 【やまとの】十一 車のびろうげのこずゑに六 弄 かざり テカナモノ 【新勅】賀 まだいく 【若菜】十一 ひきあふかたなど いひそめしより ひけす 【万】十四 の上 あら山の山田つくる子ひでまくも あかしよりかく さかへよと えらぶれ 【きりつぼ】廿二 ふきみるどうくりつゞりて 【同】四ニことさもはとおもふまゝの心よりとくやなる 【古今】序 ちかつの木しもつくる 【狹】四中 さりとてもよれに我とびとて え上さは ことよりぶるゝさかつひてすがたくなる

つくよ 【万】十八千「やとくさしてあるえ ことによりつゞきを 都へよりみきへ ころのあるなし【続世継】六上

つくぐ 【和名抄】上「をそなきのえだと さとるならし 今あるものつくづくと 【続世継】六十二 この後の いと わしくつくぐと ありけんに 【浜松】四 六十 つくぐとうち見をこそれぞれまぼろしをふ 【松風】五ワ が君のさてつくぐと 追ぬ ふ 【国譲】上 ニ つくぐとまき見て 【古今著聞集】十三 つくぐとうちすてむとも やるべきこゝろきこさらへきそのれば

八ノ五十

【うつほ】六十二 よろこぬきぶもしできすちん時とつくぐゆひみてすり 【枕】十六 二十 三 神ハまくはつかにさるやなどのせやくかなたて いくかのほろくおりし秋にはあくぎと思ふるにおやひわくきてつくぐとひさしうつくれたりし 【円】三十九 清数ヲ ニタトトイヒ 行成ミシト後 行成詞 いとゞくまのたくもそころゝるとのうへ べば ゆのくらうとやひえどもあみづつてぞかくるぶどうへの つれぐとのあひしきさつくぐとゐとぼふに 【竹川】三十六 さるつるすゐねどつくぐとまれが 桜のみやもそれと見まほしう 【こまでぬ巻】六中 ふくうめつもつまうたるもゆひて ゞえりうって 寺へすゞらせすきてつくぐと此比なるさもあれ 【落】三 女君つくぐとは見ゆるて 【若菜】廿七 内にてもよにてもひとくつくぐとなかなからむ 「いのちとも ためのあるあるへつくぐとかうそそたてるれ 【よもぎふ】五 つくぐとるるゐ 【幻】十九 それいで よそ つくぐとおもいもるかな日もくれにけり 【拾】六 雑居の後ハよをもぞえらのなもおなしへのさをめてふくのさとらひ とうひそしまにへまふまるゝかつくぐと波楽るものの内もまへつうし 【本末】二 浩波のつぐぐとまりなくぞあれどもとあ 衆やをと義またるとぞ 【白文】三坐寂無語 【落】二 つくぐとほとすのあるまつにおもめてまさるゝひそれば

【拾】表 五 【六】 三 【萱力】 上「ろしまゐるつくすの神のつくぐとさおもひうに来みつるつる

つくまのかさ 【拾遺】雜 【後拾遺】雜 【いせ】 夏 つきもつくまの祭とくさらしつれたる人のならべのるすくらん 祭の時「わがふるつくまの神のなるるやいくつかくべのぞずれはぐき

つくして 【うつほ】四 ○らくゑくまく ほかる に このうへことまとつくしてかゐどもも 【円】三 こゝろゝの日かくつくしつれが 【まつね】二十 ほかくぐ 【後】 どいほにてうらひでもつくしあへる ねにてへんる ゑ

つくゑ 【万】二十 ゆうひ盛れよとて母にまつりつや 【和名抄】十六 机 都久恵 案属也 づらへいとくつくんげさうそつくし あからしかし

つくみ 【和名抄】十八 五 鶫鳥 豆久見

つくもがみ ○ 蒲草トイフ水草ニ似タル髪ヲイウ 【伊勢】 【新古今集】老人を 「つくもがみ ひとゝにもなくおいにけり いせ」 六十三段 「もゝとせにひとゝせたらぬつくもがみ われをこふらしおもかげに見ゆ」 見てうるものを 【続世継】 つくもがみにまさしもあらずへらねど

つやゝかなるもつやゝといへるは古言なれど混じて挙

たらぬつくも髪われをこふらしおもかげにみゆ 古 和泉十七 水葉抄 江浦草 長毛 按 もろもろの髪を藻にたとへていへり 拾遺 [義傷]「とまりあらそひわたりにし水のなかのほどにいたるまで、さ 髪をわたるいそのたまもの、うつくもまたおもかげにあらはるといふ 月 十一年ころのあはれにありけるとなん見ゆる。付夜神とらのへ 附會の説なれば取らず

つくもどころ

ところ 下五十四 つくもどころの人の見せて見れば見るものさへ見ゆるのさま 河 作物所 細 金銀細工の所なるべし 玉村きく 九 内にいへば女房など言ひおこせてつくもどころにつくりて出でう ところとろことなるなかめそう

つや

按 七十 火のみえてはひのさきのつやも見えてくるまきしてなる あざやかなるつやなど月にみせて うつほ 九 つやもいろもこなからずなるやうに たまやらのえからずまつつやらうとらあめいてる

つやく

うつほ 五十四 末のなかをとりきこのけくえんどつやく おもしろき 枕 十二 銭通の如つやくと丸につくりて まあひ一扇の墨、黒きつやつやくして見ゆるほどある紙 狭 十上四十三 めでたきる 同 廿八 髪はつやくとかくして 落 三十九 ひとえうへげ人つやくと見ゆれば のおりものの色あるあやなどのかくしての色ひもつやくなどいふ 栄花 十四 いとうつくしうて たる 同 駒くらべ 十三 今やうのつやくといふきぬをあはせたるに 大政大臣の孫ともなる 盛衰 十三 つやくおもしろくてうちなびきて 著聞 廿上六 あかきふてこめかたけにつややかにて 宇治拾 廿六 くちさきつやくとして

つやゝ

。光あるを いふ 国ユヅリ 廿六上 つやゝのふてあそばれたりまさり 力ケ 下ノ六 秋泊をよくとなまりまかるるにつやゝかなるとかはせさうらう おちくぼ 四十四 つやゝかなるなかの 枕 五十四 あざやかなるみせのあかよりはひもいとつやゝかにて 同 二十六 つやゝかなる板 板縁 なり のさし

ちよしあさやかなるあゆみひらかりそうにおりきてさく 同 こゑおやのつやゝかなるつやゝかなる 葵 十五 是今まえこのまやらかなるののつやゝかなる引さきれて よもぎう 六 まくかくいたるをから やぶるれどもさかにてまえてんの肉だちひおりしたまえらひつかへびつやゝかなる ものゝさまにもあるべくつやゝかなるものあるやうなる人も

つやめき

蜻蛉日記 下 此ころは人さえだくものまかにもあらばつやゝかなるまさりたる 按 三十五 花のおもおもちりまそへおもしろさるこゝちにあるまでいさ常にめでたきはことにてもつやめきて 同 三十七 ゆづりそめのかさらふきやうにつやめきたる

つま 妻

。夫ヲサシテモツマトヨベルハ 万葉ニアマタミエタリ 新六 六 為家「暮春でなれやつくりまるさゞにの初のつまとこのまを まつらん 和泉式部集 上「これそこの人の引かりあやめ草のねやの 景行紀 十八 嬬此云菟摩 按 三十五 里六 つまよりの里人にとられからにやあるらんあいにやあるからん

つま

。妻のましく 縁のところ うつほ 下六十 くらいとほのかにほのつきたるはつかまいらしまのあるに 亭のかとて ほのほるのつまをあげてさぶらふ 云ふ やふさり 四十六 おなび 花のおとくいときてものさへうちとほにまのつまにあてるをと 葵 十三 〜 玉葉 雑一 ひ扇のつまにかけて ある扇のつまかとりて 宇治拾 三十七 つまちりたる荒橋のいとしろくちりたると さく見えて弁今の大政大臣 宰 家あまえく 花のえん 十三 扇はこぞくのつまにおもてあれがふかし ども おけて たゝしてくもれもの 夕 三 秋のつまるなどに 狭 四十上九 所末より琴のつまざまりさし出て桜のもぎのさへくのばぞ どもにとくおりあくとうちたるどうさるものまれ袖ぞひかれ 紅梅 九 このひんがしのつまふおもちる き紅梅の 同 六十六 ひまの末のつまのまへなるあふひてうふれてしもさるにぞひきてさく 千載 廿上 俊成 拾 雑秋 女房 のとにつゝまれゆるあかのつまさとひきやりてくのぞとをかぐりえれが 散木「秋風や浪あまそきとつゝまるらんあふとうのしよりおくのうてとるむ 江家次第 十三 かやうのゆる人をとえにこそいひろこだりのん ゆくぞたつまいまれ 古 春五 登都屋「ひとつのまたぶれたるやのつまるれば人をとまのをまぞおもひろる 六 下「つれぐ

と袖のそひぢてまの日のみぶやへ妻のつまなどありくる 中務九「ゆるるのまの水をのつまなるのべなどもあやめくる 貫之 下四 拾遺 春「君ようめ立てでこそうぐひすもつまにぞありけれ 躬恒 春部 「おしのまろやの梅花れざりよりもつまにぞありける 君ありひ物うつまとちるうめ 夫木 四 春集 春「まのあしの 貫之 下三「枕ハゆるぐのつまにおくれどもねるげりきぬ片敷 ひとりぎまそ袖摘やつまとるらん

つま 端ハシ

搓毛 九世のうえつまにといふやうになるくさのみをいふ

つまにあつべく 接木ら 世八「にげるえ妻のつまうやとさるぬしのひて 百ろ 下世「あおろうそぶの時の空にえたつそのふうるあの物もまて投もうりぬぎろうぶ匂ひてるまの内のうやもふえおへやて皆さそふつまに 三引ぐ ものやひのつまるろうぶきを つまにもあつべくりあ 投 ツマミ 蜻蛉 二九分「そ又例のろの ところのひ市ぐろうタぐれのそら雪ろうて 四「タぐれのつまの春吹むまぶっぐしや羽にむ秋のまのつまろうさそび 二 風のさと吹のうくにえのうもまらうどの内匂橘つろれば昔あのひ物ろうくつまし

つまぐき

躄指 名叶ぐき内 有 紙 女手 名八 ひえをそぐきそし を 大 ぐ一つる 落 ぐろ外 四 平 妻中房つおをそぐき天をあふぎてさふらふ 一 今ハおわもどろうろんにハ妻てさをいひとうぐこーとてつまそぐ 左 日ひとひ風やまぐつまそぐきをねぬ 狭 二上 里三 世代 今撃吃始 我にあてくつまそぐきをちろうろる

いとおろうくげるに 三 一初 寺とけてもあろうぬ人をうろうろ 是べあるまへ人きくらんとうぶのべ 落 つまそぐをカ 月妻そのんろうるうくそつぬそぐをまろうぐよ 四 三 我前るつまえぐき分てあるのそぐ 禅千 斉法而弾指曰願後身世々勿復生天王家者殺之 きぐろうぐ 王 かの人のをつまそぐをつうろうるのよ 妻 世むくつぼきろのとたぐひあらぐとつまそぐをやうろうぐとあてそうろれどれそうことちのくとつまそぐをとあろうぐ

つまこ

さむて 妻 ぬ 延 「あまそぐぬやとの夜風さむうしつまこよのちぐろなるし 四 ぶ 妻 三 の風のつまこよの妻のあけぐのまつまこふちでろうくれろうる 四 牡 通具「おそのまろうぐつまこふきぐの妻たろうん 拾遺 冬 中「狩人の手あにぐ馬の妻のふぐぬまろうの妻のふぐぬまろうれて つまこよ山分出 吹かぜをとろのつまこよ荻のうえやさうらん 拾遺 冬 末 上「おひあぐそ杜のひとえそさそぐのつまこよふのまの 万 八 世 「彦星の迎 ツマカ 舟 こぎのぐろ 新千 牧上 の川うべの妻のうえ妻よまむくぐ後今やうぐろ

つまおうぶ

つまおうぶ 新六 一 保教 文保「えうえの妻の川うべの妻れてぐれいまやいぐろし

つまおと

つまおと 永 保集 上 廿八「このふちろ山路のうへ分てれぐそ妻おとうくる名のつまおと

つまご

つまご 万 葉 「ヤ 妻のうえりゆかが 廿七「天川うえつの妻れてぐれいまやいぐろし

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

たくさてのち 袖中抄三 西の都の中のつまどをあけてねたるにかはあらん 拾 巻十三 よみ人しらず「いくとせやまとのつまとをあけたてのひまをばよしなくさかたりぬらんさぬぞ」入らせぬをのくにひあてやうり

つまづく 蹟 拾 雑上 よみ人しらず「こうやまち路のつまづく馬つゐらそこそ鞍かなぐーるにかあれ」 万三 馬そら躓実

つまぐ 赤つむ 廿 ふろうれたくろ遊ろの三ていとをかしくつまぐ

つまおと 爪音 竹川 せは息ずのひくうの音すざろとあろうろ浙あつてきをいとうるきにくるいを叶ひそ ふり合あわせうら爪ならよくてらせの拍子など上つれのいとうくひきすま 同 十二 宿木 何につかとどのひつまかよみえもろあへもを佐下ぐるを 竹 廿一 ゆうきとるのひ つかなる手うちは口つき 見るてひづくらむそ

つまやしろ 夫木 十九 公教「をふつきの分その歌ものつまやとろやおゆきちかたもぞうら初 むいたくまきものくよさく蒼ろりやさもおそくつまおさのやうにて代をもろう

つまごゑ 爪聲 三宝絵 廿 ふりおちん復人に相といそもでそんにもててもいふとも

つまく 未の名。 あとれか 未詳 物名部 六 義孝朝臣「初まぶろ後のつまくの福をもとてふうくやく全をかに北もそん 同 あ家「よそくとたいかのゆかそろけつあ初きむくそろ後のらつまくに 月 初家後 の上のけひおしたひつまかつくしよ初ぞやけてまりつまくに高がすまづく 万 十九 十三「後の上のつまくをとるかれ根をまれてとし

つ後まどひき 後拾 秋上 後撰「をとうらひよちくちもみよのよ勇にうす後とてせう雅をたつくよう 続後撰 秋上 忠岑「山のに壮おもてうつくるかくのつまどおやう無にぞあてうう

つま恋つよひ 後撰 羈旅 よみ人しらず「おのみ人ありてう入をびいやうろのつまもうら青の社ぞろるをーまき 風雅 秋上 法師「おのひ鳴うもまちーつまのつまこつよひの矢の川かぜ 新古 秋上 慶暹大夫

あきゆく秋もなぶゆてひと日のつまてつ秋さへ獨るもわれて 同 内大臣「いろみ身にわきかねらんところをみむぞこの つまくつ春のおまの川風

つまふくかぜ 続千 秋三 寂蓮法師 上「うちちどりろさすかざとあざまでたらくつまふく風のようぞとーき

つまごひ 後撰 哀傷 兼輔左大臣「冬きれかれなうちくちとのひとりしてうつまごひとそのうかへしき 新千 秋下 後京極摂政「きく人の袖もあかぐしよをとるそつまごひくまそを無のたえ 家隆「あー杉の山のつづく言ねもこてつまごひ出をもし無そてあくちろ

つまごめ 風雅 恋二 大納言経信「うつめろくあるのつ中まいうだしてつまごめ立つと人にあるさん 京 秋上 よみ人しらず「うまやうのおとしらいかくやさきて 同 恋上 定家朝臣「かまさぶのよ中ぐうら寄のつまもてのれり 月清集 下「むさーのくちのさ茂みが起ぐまつでなりぬ 新続古 恋下 後京極摂政「かる雲もきのくきぶずうらむすつまきーさあらぬ萩のやけえら のをまちいさてんとするまき たそく るり

つまぎ 。新木をいふ 万 七 手えやと 雅「木のうえに爪木なろくをるまぐとる みまくさ ーおきぞうら白妙 堀次 藤原仲実「炭がるうろその山のまそのよ勇をやりてらつ手ち下たるかづむきとのさーとも 新後撰 雑 上「爪木うるまをに柚やうの旅をさいかへるもさらうらう 後撰 雑二「後まさびれ、今ぎへるぎうくと山里にちまねら尽をぐるき やどかりふそてん 新古 羈旅 経信「旅に付せてるあかの手つうやのきまむろれべ月まぎらやしき爪木ぞこーし 実方集 入のたちのたらりと去ふともらりーもさるみぞうのうそまきーえ 新古 雑中 後成「今もいと冷ちまくえるきまるの きつろ歩世をおべ老と猿ひのるれ

つまぎる 。手の尓めて あらまをうくきく 山家集 下 かりぐにうもまーなるのえるまさるつまぎる一のもうとまちあきて 手をも死よ生とあつぐとるれで 弄 衆寄のすまよりつまぎるーまと村あくし

次のつけてと差別あり これも改めだ

つまびき [源箒木] つまびきにいとよくあはせてさぶらひしこそ[illegible]

つまはじき [源帚木] 大 ちうちあつかひておよびひとつをひきよせて喰ひて侍りしを 血[illegible]あやしくておぼゆ

つまごひ 妻戀 [万十八] 家持「[illegible]のつまごひに[illegible]

つまだてて [後下] [illegible]のおくりにきこえて[illegible]すみてまちてさもてつまだてて[illegible]

つまよぶ [古今] 上 [illegible]つまよぶ[illegible] [続古] 雑中 家持「[illegible]

つまびらか [神代紀] 詳 曲委其状 [欽明紀] 一 教示 [皇極] 十三 曲従 議

つけ 付 [きのかみ] [illegible]つけて[illegible] [宇津保] [illegible] [源] [illegible]

つけて [古今] [illegible]つけて[illegible] [源] [illegible]

[illegible]につけてさきそうへ[よもぎ] 三 [illegible] [拾遺] [illegible]紙画に[illegible] [拾] [illegible] [源] 雜 [illegible]

つげのをぐし [古今] 上 [illegible]つげのをぐし[illegible] [万] 九 [illegible] [夫木] [illegible] [いせ] [後拾] 雜中 [illegible]つげのをぐしや

つげ [和名] 七千九 黄楊 和名豆介 色黄白材堅者也

つげのまくら [古今六帖] 下 [新古] 下「そでの[illegible]つげのまくら[illegible] [六帖] 五下

つぶ [大鏡] 五 [illegible]つぶ[illegible]

つぶり [大] 四 [illegible]つぶりと[illegible]

つぶね [和名] 微賤類 奴僕 唐令云奴 和名豆布祢 人之下也 [拾遺] 三 [illegible] [古] 三 美濃国と[illegible]

つぶく

季女細ツブサヘ又ニロヰニモ云 つぶくとするなよ 和あつぶ 世四添ノ小ニ かの如げにの如もそうやうたれそそーろ 落 糸 女ろくもでつぶくとするなすひめ以君ノ方 抄 ろくろ石 肥 狭 一七英源氏官ノ

つぶくとする

。製云うろ小鳴ルにてあろぐ〜猫のいろ〜 ろくろ下全二 小作作ルつけてきのあのふきの いろとりるかいとにきじくむひ ろくろ並 ともまものが猫

つぶる

をつぶーもの 行とう 虫ろくろ 新六五 さうとてもさもろってろそてつぶ 赤線多来 虫の血をつぶーて身にかつけぎる 日本紀 員 ろくろ 下七七つぶ 三 うちつぶやたて ろくろ 下七七つぶ 三十 又このむうこ当元 あつぶ 土そむくいろにそーてろくこてろうるんと 久マ 四三 甘方角まくたたぶの 一つのく 百度をえひざつををりさろべくや

つぶやく

ろうそーげるろに よふ 十七まろうにねろーげにてつぶくときろ 萬葉六全七 あろのが初の歌つぶくと いろぎやりのとこるもこと トリカヘヤ 七日の秋入ろーのひろうろるろ分 つけて落ーろろ分

つぶて つぶき

飛礫 季曲 人九集 十五 とろもろんつぶきなおとろろ

つごもり ○晦日につきをてく [古]春下やよひのつごもりの日よめるうへたとなげきて 月隠(コモル)といへりとぞ つごもりのかたへく [拾]雑秋 貫之 みつのこもりの比よ月のうへたとなげきて [うたあはせ]四十六 此月のつごもりがたになるべきものハ [後撰]秋下 やよひのつごもりがたのの [仁徳紀]十六 及月晦(ツゴモリ) 以(ヲ)(モリニ)鹿鳴不聆

つて 傳 [枕]二ノ五 まさきのつたかつらきのつごもりの [きのつらゆき]三 「あきのよのまだつきかげもてもなきにつてあるをひとともなきぞ [二帖]一ノ上「まとをし」 [幻]十六 かくきかんとにつてあるへなくのとはおくべく 今ぞきくつてに [とりかへばや]七 そのやまのつてにこそ [うつぼ]上七十九 つてにふれにし君がみ宮にまゐりなひて [あさぢ]七 やまのつてまちつけて [推]四 「つてにのみ」やのさそへき [ところ]上卅六 沈のおりにつきとともまなつらしく今かえらるべくまた

つき 杯 高ツキトイヘル器スベシ 今モ菓子盛ル盆ヲ [和名]十六 七 盃 亦作杯 佐加都木 [ところ]上卅六 沈のつけなんとつきどもまなつらしく今かえらる [うつほ]四 沈のおりたるつきのつきふくらてまる

つきたる かーつくいのあへり [枕]七ノ八 廿 きてるげなるのの 白きつきたるまてたるにまありく児

つぎ 嗣 [古今]序 ふるのなかにつぎてあとのくもあまりの世に心にまがふあまりかる [狹]四下 何と 大く例なるけんまきのて 今のさまの心ぞたかきかしらぬ都世のつきなるにやと いかでてく覚えしときるにもつぎの御ことやまさんまへといふてたんとにきこえさせ [門]四下三 年月まいぎの わたしまいきに代よとまきるにあけくの覚へやいつれど [ところ]上卅七 紀のまもよその後ぞと いひるがかくしもえつかさきぞていとと [しをのえん]初 宰相中将なく例の人にてきり つぎた代中将の 見うつしもうつるぞ ためにおやべりけれど [竹川]三 中将の代をつぎたまへ 奉りすへれバ [ところ]上ノ 聖 かやくなれば べかりたるりたてどく人のぬめりーくそ宰子のうそとおつけてれど かくていとつきがへしといふべきに人あくるも [画]廿一 琴をひき奉らとよろんいちのぎて ましてつきなはよしぶえ [ところ]下五 あかりのなひやう 冷泉院の代すべき宮も 奉きにわきくをしてありてはちのうちにまじん

[うつほ]十七 ちうくーすもさるぐのつぎ紙のあはども子をり紫をのへうつにてまたく からのあさきにるざ紙たしかでて [巻五]ところ下五 うぎのおやにてえ世のつぎをりにまかせーまきたん [千載]序 世ハ六のおまへのなかれる世にたえたりにくう

つき 月水 [古事記]中 佐泥(サネ)子ム 都紀多知(ツキタチ)にくり

つき [うつほ]四 まつかけくよしくて [門] かーらうたひてひてつき [門]初 つきにたかう [おちくぼ]二 きものくもあさやたにつけてちうしーうた [ところ]下十七 まえにひきてありもいへれ方のぎつにまえ [古]秋上 友寄 「久かたの月の桂も秋く」 [万]十 にほひさぬた花のやさと月まてもぐ 冷まなるにひれく今ハかぎてる [六帖]一ノ上 [拾遺]雑上 為基 あかでおちたるかにぞ人のふるかなかつきへ

つき 月 まへのみかどのおやてりまそうらん

うた世の名をりやゆく

つき 月 ゆとし月の [万]四二十九 「ミまつりて年ご時ごまうそうれバ年月のてあすれなるかな」 [きのつらゆき]十九 威と見て身宮ゑうかぬ

つき 槻 [万]二卅八 らくえにてくそるつきのまの [かなのおかげ]十三 槻 和名 豆木 乃木木 名堪作弓也 [新勅] 弥彼ころみ 「弓と」 いくたきのつきを梓弓のそひもみるる～ [弥木] 「弓と人にも迷ひたる梓弓ちちの」 弓をあるこそあるらし

つき ゑるく名 [和名抄]八九 鳩 和名 豆木 紅鶴 又桃花鳥 今トキ と呼ぶなるこそ

つきやし 月星 [ところ]下卅九 そらの月かげたとうごし時なくありまるにとぞふる

つきたん [竹川]卅三 国をまかるえを月おそく今もこしんとときそぎうくにはてくーし

つきそめ [枕]七ノ八 あうえをつきたる 虎かくかうちらうく

つきえーし 継橋 [万]十四ノ九 「あのおとせぜすうん駒もがかつしの手くのつぎ橋ーやまずかよはん」 [夫木]廿一 法印 「ふつるきやくやのつぎはしうきくにちてしかふてたあつくさの稚」

つきかげ 月影 [狹]三ノ巾卅四 大将オツカ 子ラ見五ク紀 さうじのたまよりあひてかのうちる宮ーりのぞきすべだ見上くに

つきよ

月夜

古 月夜〳〵我〳〵と人にをやさぐべてふ（古二五）

つきよみ

月読

つきよをも

ツキシヲモ 里 近世俗称 おもうる月てふ

つきわたる

於延雅上 空ゆく月のおもかげ

つきわたる

於表 月ひかげのつき移るうてふ

つきんたちて

食 トリカハ（三五）つゆさむみ月のかはらに衣うつなり

つきたたむを

落糸 三人さごろ〳〵くつのふーつべくありたちづべ

つきそそひ

あり 里三 とりあへぬ月のくまをぞたてまつる

つきく

月々 百十四 月〳〵にたちづさりつゝ月〳〵にたちづさりつゝ

つぎく

たづさえ 土 父おとゞの位牌に奉りつぎ〳〵つぐことをえらみたまふ位牌を

重元 「ちゝうへ」のまへにつぎ〳〵まゐりつぎ〳〵

おもひまうくべみにのこにつたへえべらし（重元）

つぎく〳〵

つぎ〳〵 五 又重元の上書 つぎ〳〵にまゐりつぎ〳〵

まゐるけぢめふとゝもまことにつぎ〳〵

東倉 父のこゝろのまゝにつぎ〳〵

あのびをふたりのみにとおもひつゝ人のあり〳〵きよとにつぎ〳〵

ふねおきてにをさゞひでつぎ〳〵ゝゝ人のせきもこえゆくふねつぎ〳〵

ゐるこにとゞまりてまつぎ〳〵

阿礼坐弁 弥継、継ぶ 二三五 次次被賜将往物飲止 ク 上二 終つぎ〳〵に

寒ふゆあらべ〳〵

つぎ〳〵 たえまなくつぎ〳〵とこゝろつぎ〳〵をさゞひでいきたちのぼる

つきぐ〳〵

うちなびき元 世 そのうちにつきぐ〳〵きこえ

めきたちんに ゆふがれ 廿八 ゆふづくひとつきぐ〳〵

なる公名元のこゞもつきぐ〳〵のそなへてあらせやカケ 東十三

きごのあゝら髪風まがいの髪にふもものうつぐ〳〵くひづべうへ者

びうるけうる木ごどものとつきぐ〳〵きもおそんとのまり月 枕 テニ

ゐとりとめたぶいのうなる人におうんえうそてあそもおもしうる 口 九世

つきのこゝろ

月氷 松五六 なにそぐ松のあらしに花ちりて月の氷にかゝる夜半

さやうにうる松のよの月の氷にをぞうつす 彩千 里 百廿 大井川

つきのこゝろ

月氷 松五六 なにそぐ松のあらしに花ちりて月の氷にをぞうつす 彩千 里 百廿 大井川

曹司 帚のあゝらつきかけがん 童女 大きやうなるわらはめ 法のそさうゞ 三足の几帳 装束よくうる鉢袋

かゝらさ 松き松、ゝうぶゝ 黒柳ゝ ひさげ てうゝ 中のぶんし 盤なぞ ことらうぐ 廊 ちゝらうあぐ

きたる火桶 続後拾 巻中 ほの糸極 かゝる雪にたてる

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』　請求記号 837-79

ガラス使用

沖にまで流て月のころりた花見ぞふく

つきうた

[文] 世いまもろたもうこうたちきてかのあをそとのふでまひくう
歌集 [古光カイ]「人にあをんつきのるをかいおもひあをそて
おしへ教なくあうろうくにきたまひこそまれ [口] あをその人うへろ
ようふかうで八月七うくり [文] 世三 女房のありさまをやかしと
[紅葉ふ] 世そたうめそちのうくちの伝年にそおもひ
かとそ伝おりさみにてよ分つをやびおがしそぐ

つきうらそ

[文] 世三 三田姫とおんにもつきろうべ [口] [文]
[まつむ十]のでやさそうにおうきうくのをやとうにいえしのやとつきうみげのとそうまべのし

つきのうら

月桂 [力ノ紀]

つきのねざと

[賓頭盧説法經] 有人行曠野為象所追入井中藏井有四毒蛇欲螫其身[欲上樹則
逢二鼠咬藤 [郷談代醉編] 四蛇攻喻四特二鼠以譬昔月
[紅葉ふ] 世そたうめそちのうくちの伝年にそおもひ
[文] 世三 三田姫とおんにもつきろうべ [口] [文]
[まつむ十]のでやさそうにおうきうくのをやとうにいえしのやとつきうみげのとそうまべのし

つきのうね

月船 [万七三]「天の海に雲の波立ち月の船
やの振なたのや月のそふれの潜うくろ
おおおうろそきそのがうらめ 遠「さごころ飛井にをろと愛
「三五夜とそまうたのそぐうく波に月のこそ宿がおうろうめる
ふうろ波に月のこふれおさうごでそ
[新千] 雑中 二忌法親王尊助「ふくうたたいくうもそおふだろう月のまおゆごろ

つきのそも

月霜 [新千] 雑中 二忌法親王尊助「ふくうたたいくうもそおふだろう月のまおゆごろ

つきのは

月輪 [元亨釈書] 覚超傳常修月輪観其胸常冷如水

つきうそ

月次 [拾] 十二 きらくきのめ うく月次のは屏風もたく
にとのあかきうげけて [拾] 秋下 [は何月次の屏風よ兎うく
わのに源つつきうそとうぶふはごそ秋のふうろうろ

つきのでか

[続古] 秋上 源を有遠「里のおまうくのうふり
[新古] 雑歌 紅葉女人「いにへのまのかちさにふ
「きのふやうちの淺よ風もちて月の如一れのうそうくふ

つきのそやこ

月都 [金松欄集] 下「あうくへのいさごまれ
とうそくよりや月のおうさごあをうそ
[続古] 雑下 陥る「むーやふ波のあのそのそのそ
うの山のうれへくうの月のおのふりとうろ [新古] 雑 秀長「なうの
[新千] 秋上 順 雲「久うこの年のく年のうそまうり月のおにて
そうたうの拘の肉の月のおよりつもまむ [年中] 六 うろうとごそ
[続後拾] 春下 [年中行事] あをう風みうさてうろ久うのつき
にも狩るもびけの月にそへ月のおおおひうそやま [口] 秋上 家隆「うのめつくおすもさびーくうくの月のおおおひうそやま
[新古] 秋上 家隆「うのめつくおすもさびーくうくの月のおおおひうそやま
[続古] 秋上 家隆「うのめつくおすもさびーくうくの月のおおおひうそやま
[続千] 雑歌 雅言集覧 いづ

つきのひうそ

月兎 [三船] 上古 秋上 え方「秋の秋の月のおおおひうそやま
[拾遺] 冬 え補「みその秋の彼の氷のさやうさ八月のひうのうろうくうろう
[新古] 秋下 雅信

「秋の夜はえこそねられね月のひかりよきくもぞたらぬ 後拾 雑一 将実「みる人もなきやどにてもつきかげを
月のまへのさきまきよまつやとて 山家集 上「なの秋も月こそまさるなれ月のまへのさえしさえまされば 門 月 あまのをら
後拾山ちのつれとや月のひかりのひきよまずくる 後拾 秋上 能永「まちむ人もなきやどにや山ちの秋の月のまちぞさびし
かるらん 千載 秋上 家経「秋の夜や天の川せは氷るらん月のひかりのさえまさるかな 続後拾 雑 今良 女王子内親王「さやう
なる月のまへのてらきまでくらかれるやひきりまつ 六帖 一 上 重之集 十九「まつ人の影はさえまで秋の夜の月の
まぞ袖よ出る 後撰 秋中 大弐 三上「秋の夜の月のひかりはあかなれどくの人のうちよらきぞ くま 同 万四 四十七「みそらゆく
月のひかりにくらぶひとめあひきしくの夢にしあり

つきまもる

千載 夏 崇徳院「さみだれに花橘のかをる夜は月まもる秋もさもあらばあれ 千載 秋上 顕昭「…月まもる秋の…
空よふるの…月まもる 朴袖 新古 春「ちらさ山のおくのは神さびて月まもるのべにさそへし…の庭 山家 上「むくへこ
月まもる夜はへの萩のうへの風 玉葉 雑 今古今「…秋の月まもる空にまさるかもかな 門 下「秋の月影…で雲へくらめり月出し夜秋の空で
「いろにいでてまことにまつ秋の秋の月まもる夜…かな 挑 五 ひとで安宿らどの

つきるさ

着並 天徳歌合 うへは涼夜のまのこるゆ南につきるさのうら
やうにつきたるとてあらん たとへ 八 おのちこもりひ山ぐくへあてみ…つく夜よ
つきたるびとる後よりよくあかめ人も高く…めきまでとまり

つきのかれ

月顔 あつし 八 月あげすへれがへ人も高くて月の影のさきらくとくて ゆふぎり 十五 月の影に
むらひころやうたる よもぎふ 廿五 月の影のさみまるのもれま

つきのひ

ふる紀 四十 八幡寺 大…の日は先帝の御料つぎの日は母后の御料 文の日は院の御料

つぎのとし

新後撰 秋上 弘安七年秋のころく つぎのとしの秋ごろ
続後撰 雑下 父秀能身まかりてつぎのとし除服をとるとよめる

つきむつび

えまづき 九 うへにゆきてつきむつびきこえて夏まで

つきやどるかせ

拾 廿 「とひしもぞかる人のうらしくまもくさこそかなりあらむきかげのまにおかし
けりや清輔のつきやどるかせ やえやかなりけるを「…ぬれぬもあらぬあるものと
いまはくしそてこのむまからん 後拾 釈 和泉式部「きかくにもねちまちのせいしくつきやとる鐘の音かな

つきくさ

月草 後千 夏二十 よみ人しらず「ひさしくは山のもとのつ月草のうつしごころも君にぞありける 万 七 廿四 月は
くれども我そともるゆろうつもまろんとれのひて 朝野群載 五 應早速容易
進上鴨頭草移上紙墨等 右件鴨頭草移等為充東對御簾用途料所御如件 新拾 秋二 よみ人しらず「秋の
ものうとふげのさうる月草のうつしこころのあへもやときと 猿 二九 古今 秋四 よみ人しらず「いでひとはことのみぞよき月草のうつし
ごころはいろことにして 撰一 鵜軒小録 三 ツユクサ ツキクサ 又青花ト云モノ也トシルセリ △今世ニイフ露草トイフ物ヲ
用ヒヨリテボウシ草トモベシ草トモイフ古キ哥ニ花色衣トヨメルモ此月草ヲ以メナリ今世ニ青色ヲ花色トイフ是ヲ
又ソレヲヲちゃきニトモイフハ月草ヲアヤマレルニヤト或人イヘリ

つきごろ

月頃 葵 十二 月頃はやくみにきうらさうなて

つぎて

續キ 打 よるべ 下 かづらんとおもえん守門をべ宮づる人につぎてこそこちにとらえ持かし
古 今ぬ 今は人つぎて入くるたへ衆宮の心もおれたる心あらる 哭 五 四十九 今里はつきしもの
やかくなの世は又つぐくもみちくりけり

つきさえる

拾 二、七 又みそりよみをびてろる雨の夜よもか〳〵まてさまでるようにえどとめどひ出るかなる
秋につきさえてそさうつとのもわさうろひく〳〵

つきのさそり

林葉 上五 九重輕服人不觸牢月障内侍者闕如之時或替之不可然事也

つきさそらぐ

中務 卅六 つきさぞらぐ「天の原めづらかと光おかうりとよるそえにさらくへるの

つきとなりと

うつほ 下 十八 世の中にはひとつあまためとひとききよきよのひきでろでみ〳〵とつく〳〵つきことなりきなり 注 ツキヲリ 又ルヤウニ物ナイヒツトナリ
ふるめのひそよ

つきしま アナガチニ 辞スル旁 〔栄花〕廿三 大政大臣の家におほくの鴫のまいるとて家隆も参望せられてると… 〔宇治〕十四ノ十六 侍ともつきしまのひまれべよるてつかへける…

ふとやておほきのくにのべつきしまてなにとなくおのひてまとうくたのぞ…

さればも内にでおほかたくまをもへはあたなとのひとのが

つきごろとをむ 〔拾遺〕三ノ十 よみ人しらず「ひとりねのよびかさすに家のつくりをおもひと思ひつる

つきしと 著託 〔行〕廿五 月のらなるは いふもくはし そのともとまをいひよはに月とよていふにくだんの

つきあへひ ○隣 ツキ 合モヲス 〔源〕十三 あなかしこうらく人をたまはりやらじとうのくさるたにこそあめれ 〔東〕五 つきあへひめくるゝに〔栄〕下ノ三 女三琴 ヲトメ入 せめてまれぐつまをうちむかひのまで

女房などかおつつきあへひ 〔今物語〕六 わりくたちいりくおさへなおいもてくるにへつにまど

つきあへひて 〔夕ニ〕中卅 民部人をあはむて 羽 [illegible]

たかさゝろみ所かのびあのつきころをとうたてもうひつせられたとぞまへる 〔未ひろ〕廿七 [illegible] 〔宝〕六

[illegible] 〔和名抄〕十六 廿 説文云觝以角觸物也楊氏漢語鈔云牛相觝 豆木之良比

つきよみをとこ 〔万〕六共「天にます月よみをとこまひはせむ [illegible]

月よみ男を〔源〕[illegible] 〔同〕「うき [illegible] とかきるも月

よるの出でまくたらぬおちのまつ

つきまろ 〔拾遺抄〕六 年ころぶたてれが宮とさうつたまあたまとり あきのあまたやすの [illegible]

〔同〕四 おさまりくやすのとら待のちかくおもえ [illegible] とよそて月しくたねども [illegible]

つきひとをとこ 月人男 〔万〕十九 「あまのはら ひきとやかりつ月 [illegible] ひきてかくせる月人壮子

〔同〕共「ゆふつくもがひのおまちをいつまでろ [illegible] 月ひとをとこ

つきひ 月日 〔万〕四共「白くえの独とたうえてかくてらん月日がよとて行てこまやと 〔拾遺〕三「人をとて

きりくておひのものやくつの月日のさそてうのしうやよくの 〔うつほ〕上十 [illegible] 月日あきてつ

つきひのおもて 〔月の宴〕十三 [illegible] やでうつてよかでやるとろ月日のおもてにむかへ

つきひと 〔枕〕十三 物ノ外 つきくの頬ヲ人 [illegible]

つきせぬ 〔狭衣〕四 昔物語にはつきせぬ [illegible] 〔東〕廿四 つきせぬ [illegible] 〔未ひろ〕五十六 [illegible]

〔きのつのかみ〕十六 [illegible] 〔あつひ〕廿八 [illegible] 〔まつらの宮〕[illegible]

〔堀〕 義業 河内 「つきせぬ [illegible] 〔枕〕十五 [illegible] 〔拾遺〕十六 [illegible]

[illegible] 〔新古〕[illegible] 〔桐〕十 [illegible]

[illegible] 〔カゲ〕十三 [illegible] 〔拾遺〕十五 よみ人しらず「[illegible]

よりもつきせぬものは [illegible]

つゆ 露 〔後撰〕三 よみ人しらず「[illegible] 〔万〕十五

[illegible] 〔宝物集〕[illegible]

ども蔵海の [illegible] 〔月清集〕前春宮大輔 [illegible]

のこらうまりけり 〔普賢経〕衆罪如霜露恵日能消除

つゆ

露

[illegible]

つゆのま

[illegible]

つゆのやど

[illegible]

つゆけし

[illegible]

なき人さへ音なうきに秋くるゝ 〔後撰〕秋中 よみ人しらず「人はあきにぞしるかなにとなく我おもひける秋もあらなく

つゆしもむすぶ

〔後撰〕秋下 「しらつゆの〔風雅〕秋下 式子内親王「とけてねぬ袖さへいろにいでねとや露ふきむすぶ風のおとぞさびしき 〔同〕同 前大納言為家「けさみれば萩のは風にむすぶ露のおきどころなし 〔続拾〕秋上 後京極「秋風は外山の尾花ふきこえてつゆしもむすぶ秋の夕風 〔月清集〕上「とけてねぬ夜のねざめの小萩原つゆふきむすぶやまおろしのかぜ

つゆとがり

〔新古〕秋上 西行「あはれいかに草葉の露のこぼるらん秋風たちぬみやぎのゝ原 〔千載〕哀二 藤原家「世にふるも露にのみこそぬれまさりけれ秋の夕風 〔続千〕哀五 大貮「秋風にこゝろもまよふなどしらつゆのきえなんとする人にたぐひて

つゆしも

露霜

〔万〕二ノ三九 夢のあやなきもいまはしらねどもあきかぜのみぞつゆしもにしてうつろふなる 〔新千〕秋上 雅孝「あきはぎのはなのしたばのつゆしもにうつろひゆかん 〔続後拾〕秋下 後宇多院「あはれなる野べのゆふぐれなればつゆしもにおきゐるはぎのうつろふらん 〔玉葉〕秋上 慶世「つゆしもにおきゐてかれぬ山の秋萩いろもさびしく 〔万葉集〕下「このはにおくつゆしものきえかへりいろづく秋の山のはのつゆ

つゆもなげに

〔続古〕秋下 為之「あはれなる秋ものがたりにつゆもなげに 〔日吉集〕下「秋のよはなにをかそへておもふらん 〔風雅〕雑下「つゆもなげにあきはてゝ 〔新拾〕雑上 三条親王雅助「ものおもふ秋のゆふぐれはおくつゆもなげにて 〔続古〕哀一 定家「とふ人もつゆもなげにてくれはてゝ

つめ

爪

〔神代〕上 先 手足之爪 〔新〕六五 先後「つめの上にまでおくとも又あまた猶きこゆ 〔古左〕爪のちりくなるとぞ日とりてあゆみちりぬる子日ならべきなり

つめ

○摘の 爪

〔万〕九十九 天橋のつめはなるあらじやまにちらく 〔催馬楽〕竹河 竹川の橋のつめなるや橋のつめなるや花ぞのにはれ 〔天智〕十五 千知波志の都海のあそびはいでゝまで竹の花ぞのへのやへのとよ

つめざし

〔拾〕九ノ一 いとつめざしにあらぬさま 〔同〕七三 千臨時祭 ちのかげにいとまなく 〔落〕一ノ廿五 ひとへにつめざしたるかたちなりけれ

つめくふ

〔源〕中八 上 ききものの宮くちびるにつめくふて 〔竹川〕十二 あまくてつめくふべきを

つめし

○ナキツメシ 〔古帖〕一ノ五 なきつめしのこゑの 〔同〕オリツメ 六ノ下「秋くればつめてけしきのつゆのおもひはかなきものを

つみ

罪

〔源〕廿 「つみかろきかたもあらんとおもひたまへて 〔金葉〕秋下 〔拾〕 屏風の絵に 覚樹法師「命をもつみにかへてもいのちなどしもかくはかなく 〔同〕十五 つみえがたくやもおはしまし 〔同〕ひきに 〔新古〕雑下 よみ人しらず「つみのふかきものとしおもひてうしとおもはんに 〔古今〕十六 つみあるべきを 〔源〕十一 さてもつみかろくなるべき 〔同〕十二 家のつみのかどなきうへ 〔同〕九 またつみもつみにむくいたまふ 〔男〕廿七 つみおちてぬるを 〔拾〕廿五 今はかゝるつみのふかき世にすみはてゝ 〔狭〕廿五 今はたぐひなくつみのふかき身

こそやうなものでもあのそもあげまを 世名抄 が恨みおのれすつきすつるぞ
さざるをつきさりあるべく 曾我 七十一つきさらんとをよ 赤つら 十三
おかいどのに三日もどくそくにまでですへと 浄瑠璃 廿一 今のをさるを 五
拍三 世名抄 土方ちうあくてくつろぎろろきぎ 狭衣 やまちぐ 時く 廿一
六帖 六下 推一 ゐるにまをーおひの中さてつきのむくのやあひぎろらん 赤 六十一 のちにもつきさうやまひてて

つきん 世名抄 土二十四 鎧 和名都美波敏 鼻也。ろくくつんとらひーを今つむとらうべく

つきたる 政要 要各 法律乃住尓罪奈倍給 不倍之

つきーろ 浄瑠璃 七 そのつきーろにいろごびをーてよとのあひ

つきのたぎ 拾玉 四 いうにーてつきのたぎをろくまそてろ智あの
薩邑云心軽躁動轉如大意象二切諸悪根本九欲難滿如火獲炎新深著現楽不観後過一切年
貧苗不懼三秋梦云云

つきたろー 枕 東三条大饗大臣のべのつがきをきのに大ホのべのつがきをきのに
いのとと 可ろる 下六十七 柏 くやーくぞつきをろーろくくつきたろーろくくつきたろ

つきき 古今 大歌所 おくらの村をよ 天武紀 下八丁丑年春正月甲寅百寮初位已上進薪即日悉集朝廷賜宴
薪こりびくの 年中行事 家部 おくーきのりくの司 のこ かまぎよ民のろぶりもにぎえひよろう

づー 厨子 可ろる 上廿 らごのきづーろくろひよ 阿 延喜六年御賀記云母屋前立二尺座蒔繪御厨子四基
二基納御法服二基納御法具 九ノ三ちろきくづーたろいろくくのろくたろふきづーひきらおて
赤や 世ころるこんをよてろるろろよーなろてろる死たるづーろひぎろろくろ 九ノ五 韻 ろれ 五 韻ろだをべきろく

をぶどもろろ出てころるちろづーろつむぎろるちなどのの出てきく 赤や 六
ととそおつめてづーにのろどあやーえとニーをそて 字鏡 八ウ そろうに
里ゆつにてぞおをよそろそころちひきを堂をとたてくをおをやそ

つづ 辻 れ名抄 十五 十字今按十字者東西南北相分之道其中央似十字也倍用辻字本文来詳 第六 三 社 後奠
山中乃社のつじ 「ろのべのおとなのつづ社ろのおぎろのめざをるをん」 「 」 先後 めちづのるる居のちづーおぎろのひ

つづかぜ 方文記 中ろつ永ねのかどうえちろつづ風おろとて
名抄 二 颪暴風疾上而上也 和名豆無之加世

つづーやう 名二十六 かくて若垂水乃如此ぬ世をふくさワぐちのひなさろ
おふやあーんとまをそそをまをのをぐつーやうにてあてに
こここころへさろつのさるにもあっぐびをつーやうにたろうまきろくろ抱ろうをぐろーき沸をヨ
ろまーやえ

つづみ 拾三 つみ人のりの乃ものちろうをぐろーき沸をヨろまーやえ
今昔物語 二 稚のこをとをて前の方をさんぐつぐみくろ抱ろにろぐれのろろのるしまを藤の二字をアラミツジ
文字相違 上ぶあとをつぐそろるのろをぐろぐーは志にろぐれのろろのるしまを藤の二字をアラミツジ
とよむこ法名経に八種の字をツジそと刻を斑に、そ要名也 新撰字鏡 龍 驄 阿 弥豆志牟

つづーやう 可ろる 二年四 今ひとことびの数面ありつまーべうろうとぶ
ざりし人のろく 日本紀私記 云 自元をやうにつーやうにうの人のどてよあうーえ死ぬ ヤドリキ 十
こ娘子のへとあぐびろくおろをきさろにのろのつをもをーのぬひ
うる注名の不動 可ろる 四 仏の本性のつよくつーやうるろにおくれど 今昔 ツッーやーくおをとにふろるべく
朗云性をフカキムりづーろ厨子カ

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

つゑ 杖 [和名鈔]杖 和名都恵 以竹木為之所輔老人也

[続千]雑中 [illegible]「[illegible]つひのもと[illegible] [玉葉]旅 [illegible]「[illegible]

[夫木]廿三 雑 [illegible]つひの[illegible]

つひ たのミ杖に[illegible]

つひま [拾]二十五 [illegible]

[古今] ハイカイ [illegible]

[万]廿一 [illegible]

[古][illegible]

[古事記]下 [illegible]

つび [和名]三十三 玉門 女陰名也 揚氏漢語抄云 屎 通鼻 今按俗人或云朱門 並未詳

[著聞]十六 [illegible]つびとて[illegible]

つひのこと [雅力本]主世[illegible]つひのこと[illegible] [沙石]別 [illegible] [続拾]雑下 [illegible]つひのこと[illegible]

[illegible]

つひゆ 形ノ ヤスルヽ [新撰字鏡]瘠 痩也 薄弱也 倭佐無久豆比由 [同]瘠 才積反 痩也 豆比由 [よもぎふ]十三年 [illegible]

つまや [古今]雑 [illegible] [ささ] [illegible]

[源氏] [illegible] [いせ物] 八十 五段 [illegible] [桐] [illegible]

[葵] [illegible] [狭] 四中 [illegible] [古今]雑上 [illegible]

[新後古] [illegible] [拾遺]雑外 上 [illegible] [拾遺]三 [illegible] [月清集] 下 [illegible] [新拾] 旅 [illegible]

[illegible]

○袮の部

ね 音 ○声の音 虫の音 [illegible] ○コタマ ○砧 ○鐘 [illegible]

ね

源氏 廿三 まづ此院を知れたまへ まねとのたまへ あつし 七十 たゞあやまちて此浦をさすれとのたまへば

ねいる 寝入

源氏 廿六 篝火 なごりなくねいりたるに 同 四十九 たとふるものなくちごもいといたうもおぼしきすぐにもねいられもいらで見てこそもらしなどしつ

枕 七ノ九 今はいぬれねてひねとらふらにて

ね 嶺

新古 春上 家持 「かすみたつあらねど人まねぞらびてなふの猶もとのぞなく 古今 夏 秋下 人

さねをさやにすぎしぐるれそく桜のうらにさき の中山 万 むさしね

ねたる

つれづれ 百五段 勝にもにたるものたねれば猶さるものにこそ

ね 音

○虫の音 ○琴の音

ね 根

新勅 雑四 小町 むさしのゝむかひの岡の草なればねをたづねてもあはれとぞおもふ 後撰 春四 春廿 枝

なく人もなくたるらへねをぞそのこゝろあてしにやむ うき雲 八 かひそめしれむかへりえなば

たけくまの松のこまつの千代をかけてくべし 古 恋三 風ふけば浪うつ岸の松なれやねにあらはれてなきぬべらし

ね 寝

源 天徳 「ありときあつのやうにはかなきあれどねてのあさけのあかのあかとも 大 拾 雑上 ぶす

あとなかりに久かたの月影もたえぬれらぬぎうらん ウツ 七 此さゝくに末まれねそらん いせ ふじく

ときよう知れれるそん 後拾 春三 秋かくれ家と松のさしろ 金葉 恋 ねさびらく人めひくにやあるらん 秋 秋 此

つかのあさけの風にさとおくも 夫木 江に紀 ねらめやとうふそうのぞくも松あくあけの月も袖にまさらう

おそれて 井 夏のみくしてもねらふのあど 後拾 恋三 ねまさへあとさまふけて ちくさ 卅八 まらうといれるあひ

ぬらうう袖にうちたえのおもひげうる 古 秋上 かくおのそとしとたのみ秋をいづちにねてあさとらん今さらぬき

松逢 雑五 之 うの花のさかりにやとうせど袖の人にあけぬとねどうろれそう 後撰 恋三 まさもある妻

うとすいたふべえのどねがうるねぬれにさらもうさえぞられつる 千載 雑上 赤染衛門 ねもやらぬ入りやとうらん

たまくもらんねらのぬまゝに月をみるうる 新千 雑一 法鏡 まひあさやどう蓮のうつきまでねぜぬのとうみのれ

八ノ六十五

月詣 上 うちたえてかのあさをみの一月のそらにつなぐ袖もとて和そのにとさらひとりあはて 源氏 廿六 きそとし袖の中にとまへらに

後拾 春上 小大君 うちあれてかうまあしとみの上とちぎりし人もこゝぞとぞらふとさとしとおと いせ むかへのあにも袖とも

うつほ 十七 袖つゝ人をれてくてきこしまえとそえてうらみれぬ 源氏 八 つゝみて袖をくしつゝうつ まきさらゆふぐれ

うらみれうら 後撰 十五 内にすゝ人の袖ゆはてひくる人で 同 異本 何人もまさく袖のひつるとひごそおどろうのや

万 十 極素赤裸 拾 春三 人丸 七四 まろねなかりつるの花の中も袖めのあかぶさゝやくのたふるねぞふるを

ねにまく

神紀 上廿 有啼哭之声 よもぎふ 十 人あらかばねぞのそのたれゆへ 古今 春下

ねくられ道にいことうれこちるなみうろうくふ 東遊 十 とけう年とうそはる袖をたうかまふさるの 玉 三千

身のうきことをみだくまあつくおもう秋いとうるさぬてぞねもまうれぬる ことゝつく 廿四 かきまの人にあちへくまそへてまも

ねるもうぢ生たてぞきばおゆ 伊勢 古今 六十五段 恋五 直子 あまのかるもにすむ虫のわれからとねをこそなかめ世をばうらみじ

ねらじ 続古 恋四 実方 あふなきの汀はゆかるあやめさへねのたてつくかなふくる 古今 恋一 よみ人しらず つゝめどもあれに袖ふきそ

さるのねにうちぬぐさきえもきえぬ 後撰 恋二 是則 ちらしつきあのひやらぞしあひくらのねにまくまでまれのびきき

万 三十四 いそがねのこゝしさ山をこえくまて涙にまなくとも多くもあらなよ

ねどころ 寝所

皇極紀 十二 高鋒 新嘗斎 モシクハ子ドコロ

ねどころ 根所

夫木 八 神楽 くぶくのちくやふものひかりもの袖ところ人にされぬぞうる

根源 合 後 雑二 陽成帝 内に有はまうく時かまよ 小弐のめのと

房くどさもうひるうきうゑ 中出る袖どころとうくまくらおえ

ねにあらはる

松逢 恋文 上 たゞれてもおもひかよふる井の袖にあらはれてといひしとや ふる秋風にさらす手あさとも

風ふけば波うつ岸の松なれや袖にあらはれてなきぬべらし 続後撰 恋 家 三 くし風やとえるよ

彼ら人と浅松の根にあらはれてなくちどろうる 古今 恋三 よみ人しらず

ねをたえなく

六帖 六 しひろどうの風まうりよしみとぞれねずまとどありなぶうくねをのことぞあらく

六帖 六 まろ。ぐらやもゆうぬ堂ぬかをんをぞぐくねをれぞろく 口四 君よよりよよよよと
よよよとねをのこぞなくよよよと 新古 春 オキ風 まのうくまろふこうくら深みをいくも
ほとゝ称をのこぞなく

ねどこ 寝床 雅俗条 十六 うちうろ乱橋のみ木をあけてみぶれどころなくにちのかず

ねはん 涅槃 経名 万葉 山路らの称も後にまろぞれ 翻訳名義集 云 此云大滅度大即法身滅即解脱
度即般若大經云涅言不生般栄言不滅不生不滅名大涅槃

ねのくろ 寝処 万 あいでめろ一よぞろとへぐろにるなどとろぐれのなろろら

ねぢけ 拗 六ハ くねぢけうろいろごのまろみ 古今 十三 ひがくくしく称ぢけうろやうにとうちんんもあん
そとろくく さそそあしんあやうろねぢけうやうやろや 万ケ 中巻 おろくてろろしものぶびろたをまさ
日よそそもあーうぐつくんもきてらんにのとねぢけくろべしく 栄 おやうのんくそありひまそきんもねぢけうん

ねぢがまし 狭 三十七 せそありときくくともんへうんをろくなりひごれもらとれぢけごあきと
ろくさぐ 十一 いとんとしくれぢけがまろしきねがてごよろう

ねぢけびと 古今 六下 五九 ろろよのろのてごうんろ

ねとそ 。結ろ袮をねちうて縄の代に 拾 義三 補遺 かの号は称ろうそのごぞ
用ろうのくらう けてぞおろの 俳諧系譜 「伐吉のつたぐれつをもも
称ろごをのんことぞろ 孝徳紀 「伐吉のつたぐれつをもも
宮本ひそよ仙人のねがこのつたのいごろまき 夫木 廿三 「宮本ひくねろそのつたのうりろうみよろるみきろ

ねりきぬ 練衣 初名 十五 練 祇利岐沼 宇治拾遺 ろく

ねりもの 練物 十五 練 祇利毛乃 宇治拾遺 ろく

ねる 寝 俗 十三 ろる 万 ろの号のまろの称ろ男ちうそ称ろるくれろ

ねぢて 捻手 盛衰記 巻 重ひらご耳ふひをまとそ仮名のまろ

ねぬるで 蕈菜 吉 ハイタイなよ 「ろろの称のまろうもろれ

ねぶ 願 俗 四十九 仏のろちびきのよごとへろうれのまろ
ろんひれごひよそれもろろ 後カケ 下廿三 ろごくとまをりろあの称のまろちをものろぎろとそろ
ろごくとまをりろあの称のまろちをものろぎろとそろ

ねぶびろう 願満 五六 人のれごひとそてのんろ
とろまろうできそごよれごひとそてのんろ

ちろさんにをひとうのれごひとそてやそ

ねぶえーく 合 かろごぐよそごぐまーうごぐ 下 百三 れごをーくまろ

ねぶそくん 続古 雑上 あり 「れごをろのれごそーうごぐ 下 百三 れごをーくまろ

ねぶひのと 夫木 十 出羽の郡 「ろろろそれよごれごひのひとのとろみごと

ねよのか いやも 四九限 「ろろろそれよごれごひのひとのとろみごと

ねよのかね 六帖 三 万 四廿 「ろろ人をれよとのろれごをろ 堀三 星 称房

「ふつのみたまもまづこれに入めらんねよてふうねのちるもやるみくよ

ねさく

神代紀 根裂子タシ 拾 躬恒集 「家づとよりあまたの花もちるべきはねさくまでもとまるなき」 古 哀 よみ人しらず 「つまこふる鹿よるやねさくて白雲のおくとひさしきかずのうれ」 重 五 「東の松山にきたるつるをてる法のうたよと皆がねさきよ外にある梅の花ぞあさきもの人はねさくの」 同 五十二 「すてどころなきものやねさくみ殿の 六帖 六上 「人こそなきに 六帖 六上 朝恒 「ねさくらとの子日の松よるもちぎとあるなくぞ人にひろく いやおきのきまくかくして 後 哀 三 為家 「おきてあよねさくてふかくるまよのこそにいべきなるれ 久安百首 「さきさ 世にうつりにける山里ハねさくそこるべひとりきまよる 帚 廿八 ねさうべきかやすもよひきけるとあちるよ ちなくおとれば 宇津保 十一 つれなくねさそめのくるまどのぐるよちがれに 栄花 枕 ねさく 古今著聞 まさくといすぐとちてねさくおほ るけの人にやうつりもさ久のくろくおもきしと思ふにきるるに 宇津保 四 おほきまるらうちりまくきぐらあ 戒秀法師 「かきうちてねさきすれとのりのめらきまえもまやへりちるり 吉野拾遺 古今著聞 むもまくらへらんがねさくつろうべき きとのまへ 同 六 たなくらえりどにて世をあつきおちきてくわどにまあくてねさくとのまへ 同 三 かどいうちとうも ねさくるれど 同 八 かうのなり人けらうてもれさくしとおがせど 同 八 いぶせのひの月とうらむつる ねさうおまの 宇津保 蔵開 廿八 太刀ぬきてこうあるをとらへていとはえりつきの まかれもねさくどもきらかまき あつびひ 七 からやうのえをそれとるくのめつかいえぞうねさくをとうきりなし 古今著聞 十 いとようみきまうへりいなけるをやうどちともまでたまうふうこそれさくえの 同 六 むつひたちのうちたえくしらまべや あらかじちえおくめたねさめちうつおがくて母の方へ母きぬるぶどおあまくし 竹取 四 翁そのの人ととと ひとぶにるみやまえたのいとがかまさくとりが見ぬのとうくあさしまくわてくろまとれざく ちひ 大鏡 四 みま ねさくしとてものの後ろしとおがまとくろう 枕草 喜三 古今著聞 着へすゑのまきへぞれさくふすしくるそすこのととそ ひゝべうろえれ 欽明 下五十五 ねさうてなけもまうりふぶりんづうひしてうらまつるとまるを

ねさむ

崇峻紀 十二 断二朕所一嫌之人一ヲ 伊勢 廿一段 まこととふをねさむあるまあそら

ねさげ

まく 十九 ろこうりをもちくにかうきることこたりんあらとねさげよと

ねたまと

サキ人ヲイラス之 まく 廿三 [illegible]

ねさまつぶれ

陸玲 二十六 ちとどやうねさまつぶれにへうきちやしますとのあよ

ねびよし

みやま紀 ろべてやへたたどねびよし彼のまに 夫 廿三 よみ人 しらず 「わの世に年をとまうてらがれちへねびよりのろうふまげのあし

ねそぢ

拾 十三 まひらわってあきてうつしたる人まて今まとしおうしそれはえかぐとちらへやちにねそぢにてよう せぎとへやく回がみまーづへし

ねなへぐに

寐ね所 いろ 枕草 蔵 廿 よみ人 「ろつくにすのろなきえその鑓しきらへねるなくよ岩とおかさうう 同 三 [illegible] ちろむたらのあぐいたへねなくよ岩のちがみえろう 拾遺 菜 廿三 よみ人 しらず 「たかえのまもちょくかへもうしやろちょへねなくやあくらのめにぞ きまりくさてねなくよ秋の秋をあらーづろ 拾遺 廿 秋中 為氏 「そろうちるる萩を 拾遺愚草 上 「みての秋のちるきうどりへねさぢにきわねなくよあくろ秋のつらくに ろころ

ねらそり

ねらひそう 同 廿四 九 「とやのれにそこさえねらそりどきくもねるみそのはるまとろたへ

ねつきどき

未詳 秦 廿六 同 廿六 「すぎのうろちにくさえちろねつきどきよあひこどやへしばあれこそひめやまり

ねんがう

年号 栄花 四 十 ちるもろくて月日もちてえくにもうのぬれぢうろそろて年号の名をも 元年とのふ 同 宴 十四 しくむ 年号をりかてて安和元年とふ 大鏡 七 ろくて年号のかそうて 千載 年 しくあちそざちのの中ととそ 寐 元 ちづけし年号にりきく

ねんぶつ

念佛 ちかく 卅九段 あるみ法師上人にのぼりの時聴よまろうれてその念ぶるつそうかてみと 阿弥陀経 「其土衆生聞二是音一已皆悉念佛念法念僧」 まやうちられとやみえれべ同のさやてらんやど念仏しのへことこて入らむろうろうへとぶろうろう 袋草紙 「ちんやぶつをるのちとえたと巻まげてねぶつの 思ひの聖中納言

あまたたびゆするまでありき 【雅本】十四 例のちぢらなる心地して念仏をもすゝめかたくやんとおぼして 【同】廿一 こゝにて念仏の僧さぶらひて
【源氏】廿八 この方に法師ばらの二三人ばかりのほどろしつゝさぶらひすさびてあまた念仏まろ

ねんぐわん 念願 【芳堂】廿六 心の中にねがはずはあひそへとねんじするにも限りなく念じて[illegible]
ゆたかなるまほり

ねんごろ 【拾遺】十九 人のねんごろなりしきざまにたびさらばすこしなほ念のほどにおぼしやすげなりて
【うつほ】二 さらにぞくりてろくねんごろにゆきするにも 【同】上廿三 ゆかしめのおぼしてまさるはひ
ゆたかなると 【枕上】下廿三 人を府のかどいと慇ちまかせきと思ひさうやくとねんごろにゆきすべ 【神代紀】下廿三 天神勅
教慇懃如此 【欽明紀】三 慰問慇懃 【集やや】十四 いや一うくすめやまきたかどの人のうくれんごろにのみおもうと 【同】十六
大の大臣どのあさぢの大納言殿ちのこうまでのいとねんごろにみのやゝ一すみえのたど 【うたたね】廿 さうるぶくりてねんごろ
ぶるとなぐちにいひきうやとろ 【権】十六 ねんごろにひかれつゝゆきてゆくべ 【六帖】六下 あ一くぶのまゝ尺におなる家の
ねの給ひごろにさわき人ゝのまぐ 【いせ物】十六段 ねんごろにあひ人ぐらひろうりまでぢちのめには 【同】五十段 昔男ねんごろよ
いひ契りける女のことざるに成はえれば 【古今】下三 こころえて給じごろなれば

ねもころ 【万】九ノ十五 かたぶなくむつての川の川柳のねもころこれどあるなまるも 【万】四ノ廿四 ねもころに思ひ[illegible]
【金槐集】上 わく心のねもねにあひとどのねのねもころつくしあのつちくる

ねらふ 【万】十ノ四十一 山のべにさうたの彌良比[ネラヒ]おそそれとなおぶたくさまつまのふるほり

ねんず 念誦 【源氏かけ】十九 念ずとよいとあはれにしたまへ 【そうし】廿九 まうぐ一くうくれ給ひまつのいでまうまる[illegible]
ゆくうると 【うつほ木】廿六 ねんずもとすこしもうとくきのす人ぐぞき 【権本】廿九 ねんずのすとどものたどぞかき
らかるるみなのしど 【あひゞ】廿六 ねんずまたろうち一くるとあるいとどゆゝつらむ

ねんずる 祈ル 心 【和かろ】廿四 ひとしひみ年とまでて念じ入てなり 【同】廿六 仏をねんじて 【源氏かけ】四十 法来の観音を
給んずまりてもまぐなくおもひまどよ 【そうひや】廿八 仏にもおとをきぶつはまうくかくしまへと

ねんじつゝなる一にや 【芳堂】廿六 心の内にあまたねあひそへとねんじるへ 【国びり】上十九 ねんじでゆく一なる一にやもひ
まうつやうにてあからにあらいまれたると

ねんず 念ず ○こらえ忍ぶ 【いせ物】廿段 比女ひとひさにうゐりてねんじてびてにやありくれいひおきやうろ 【竹取】十四 まにのも
なくてみそうりくゝけまふきえ一えのちねんじて騒一とをそれどもおうきをへいきえれば 【やどりき】
五十四 給ひとうてさりぐるもあいるみあるべえれば給ひがく人くて 【うまなず】十七 給ひくあくぶうちなくけたひあまのちなり
【枕】八ノ中の乃給やどこうゐるくゝる一給をねんじてのやうながに 【重之】四 もなすこ名入のめのおつ一こまとこてねんじわれて
とひひづ 【よそまふ】廿六 いとやとまうくぞらいでころまつのすぞんしたまへはもうそれんぐをうすまどうのゝ 【きのうぐ】十七 念をなぐく
とうそやらひねんずめあ 【同】廿七 えなきとわりうくねんごうへまあまゝ 【えと】十三 えねんじ[illegible] 【同】十六 つるきとあうこともねんじて
なのかうつのあひまりて

ねうく 猫の声 【古今】上十六 ねうくひとくらうくげなたれけば

ねのこ 【あさひ】四十七 さてもねのこいくうつろうまうりまべう給らん。玄ノ子ノ翌日ナル戯レテ子ノコトイヘルナリ

ねのひ 子ノ日 【公忠集】乙丑八昔人このべに出て子日まとて松を引てうあり其中に雀政家朝臣などの乃母は
ゆき給ひ八るうるにや中にも家朝臣の子日さやまひろ八寛平ゑ年十二月十三日のうゑとこく人く
わねえを歌どもえ母の家は八平と子親王とや法云云浦曾禰好忠るどふまへてもにて待一そく

ねおき 寝起 【同】四十三 ひさ一くねおきてそりとれが 【同】三廿 女八ねおきてる顔たれいのとれとのへ 【同】十五 ふゐくあのよるねおきてのもかり
【とはずがたり】四十六 宮の乃ゆくくにねそ一くるとねおびのてあそびくさり 【枕】四 十四 からうきてねおびのてあそびやうひと

ねおびと
うちつとて 【枕】三十 鳥のねておきに一ぞうりにいねさうおく一くねおきすびとつとひてねおびまてるあそびたるそうるこそ
[illegible]くへのそくるる 【とはずがたり】十三 我ぞちのひまげなくねおびのてうるまひさきそくるくことに
母のみちにひくぶいてねう一くれ 【同】廿六ノ二十三ウ ゑかり乳児のねおびのてさまおうどくるくまひさうるて一 【浮舟】廿六

稲かびえてむたちくちもちるくわれて

ねぐ 祈 [拾]「稲ぞくらひその社のをみじとちあるのうたそすてをやするてきけ」[同]哀三恵房「いそのかみふりにし恋の神さびてくるにわれはねぎぞかねつる」[後撰]「よるひるのあけの玉垣いくかへりねぐやきのふの日かへり」

ねぐきし 金葉哀下「そのむくいとぞふかくてちえやぶる神の社にねぎつる人とねぐきし」

ねくたれ 堤中納言 下「五月雨の夜どよひろえ又十よ日だろにて人ねくたれかみもやぶれ」[やまとめぐり]二十八「ねくたれのかみのとめやさく見えどころある」[新古今]五月雨 臣房「あさぢふのこひわたる月のよのあけてぞきえる山の井」[拾遺]哀傷 八九「大和物語」「うきみのこゝろぞねくたれの髪を

さる沢の池の玉もとみるぞかなしき

ねくらし [あつし]四十三「ひとゝひとひそのえねくらし我がまくらに見えあて」

ねぐら [枕草紙]九「夏ぞの月とみえとをくらぞねぐらのあるもふところびらすく」「わらはへ」「鳥の稲ぐらの

ねどころきるべく [拾遺]雑上「条摂政」「花の色をあかずみるとも鳥のねぐらの枝にてまかくしたまふ」[古今]上卅八「まどちあそびあかしとどろかぬ稲ぐらの

ねや 閨 [欽明紀]四十二「織帳張於高樂王内寝子や」[古今]六十一「ねやのうちまちいたる夜の」[古]恋四 読人しらず「つれなきの閨のうちいとよくあかひあかり

れくとも

ねまどひ [花]三十四「むかしのえ男のねまどひしける」[宇治拾遺]「まめなる山田のはねにもどりまどひあへず恋の寝まどひはどうも」

ねまちのつき 。ふしまちともいふ 十九日の夜也 [万代集]雑二「ねまちの月をみてよみはべりける」「ねてまつとこよひの月をいかなれば ものおもふ人はさぞあやしまん」[続古今]恋三 是初「ねてまちし老の月の

あひみしよのあかつきの人 [同]雑上 廿日あまりの月を見て「ねまちの月の出でゝ見えぬ雲のよすがにたえぬやまの」[後拾遺]「さがりて、ねまちの月のいづるまでやそかのあけのそら」。[風雅集]哀二 伏見院の内侍「ねまちの月をつくる二十日の月をいつまでか」[拾玉集]四「人まつる月かとやいとまつ、ねまちの月のあけのそら」[新古今]「きさらぎの末つかた」「ねまちのつきの影をみて又やぐそむ」。[枕草紙]二月ばかりに、ねまちの月 △雅望考に ねまちは 十九日の夜をいふ 二十日あまりの月を

の月とす

ねぶのき [和名抄]「楷 和名 祢布里乃木 合歡木 其葉朝舒暮斂者也」[万]八卅二「ひるはさくよるはこひぬる合歡木の花君のみみめやわけさへにみよ」

ねぶり。舌ノサキシテ吾ハフル [字鏡]「䑛 祢夫留」

ねぶりく [拾遺]十七「まちのうちよねぶりく」[続拾遺]恋一 家隆「ちつらやや白雲のねぶりく」

ねぶる 睡 [続後拾遺]哀傷 西行「たれも人ものおもひのうちのねぶるなるらん」[もと]十四「ねぶるもねぶりさめぬ」[玉葉]「夜のねぶりもさめぬ」[神代紀]二十六「酔而睡ネムル」

さぞまるのあかつきの眠をさますも時のあれ

ねぶたし [源氏]一丁「さうさうくねぶたくうつふす」[蜻蛉]「いざうちねぶたきよのまなく」[拾]雑賀 小町「ふけて今はねぶたくなりにけり」[もと]五十「いみじうねぶたくて」

うつほ 二十六「ねぶたきここにおきていつもそのうたをぬひていくを」

ねぶさげ [もと]卅八「ねぶさげなるいひて」[さゆり]十五「いみじうねぶさげなる」

きこく波のおと〔東遊〕十一「いろ〳〵のきぬきてねぶたげなるけしきに」

ねぶりごゑ 〔枕〕六十六「ねぶりごゑにてのくけよくさふらふやゝまへにまゐりなんとうち誦ずつまなるかなにねたく〳〵」

ねぶりざまし 〔栄花〕六「六の宮ねぶりざましにかのねぶりざまし給へ〳〵」

ねこ 猫 〔和名抄〕六之五 祢古 萬似虎而小能捕鼠爲粮 〔枕〕一之上「うへにさぶらふ御猫はかうぶりえて命婦のおとゞとていみじうをかしければかしづかせ給ふ」〔うつほ〕上百一「かゝる猫のひとぢをさゝねらひけるとき見て参る」

猫のねひつぎて縁にまゐりつまゐりなるかなにて

ねごと 寝言 〔後撰〕十一下八廿「塩ならぬうみにもなりぬねごとにもわれにてこひしきかな」

〔うつほ〕別十一 廃にはいはて書のまへくとぞ〔小大君集〕十三「うつゝにはゆめなかりけるをやはくるしきかたにねぐるねござらん」

ねざめ 〔後撰〕十一下八廿「涙ぞもまちつゝくるみをとゞうらやましねざめに風の吹やとをきかなん」

〔さごろも〕十一「袖ふれし梅はからねどあやくりの白ひゑてねざめうつろかやどやするかな」

ねこじ 。根ヲコジオコス、ストイヘリ 〔散木集〕「ふきさうそそこゝろもうらくさくらの花よたるとぞ〳〵とねぐしていはむ」〔堀太〕菖蒲 国信「おもがれとひくあやめ草の心にてねごじつる於」

〔順集〕「さまでの命いさぶらひしもおのごろの椋をねこじつるみ」〔拾遺〕雑春「いとしもねこじてかくおほやけにまゐらせ宮のこの花をねこじてうゑし日はあたりの人ぞもとありけり」

ねこじ 佐禰居自能祢居自 〔古事記〕上十九 天香山之五百津眞賢木矣根許士爾許士而 〔神紀〕上廿八 太玉命掘天香山之五百箇眞坂樹 〔古語拾遺〕掘木語

〔万葉〕八四十 ほゆるのあきのはぎ母のつまきもこひてねこしてうゑし人ぞふりゆく

ねてもさめても 〔拾遺〕恋四「ちにさく人のつれなくよそのあはれてもさめてもおもこそこぼれ」〔夏のさきなもの〕廿三「ろぐにもよきまゐらるなりのつらむかるゝ人ねてもさめてもさとし比行のうつつにおもなるものを」

〔拾玉〕六「ちえやぶつ祇をあるらんこゝろ恋をねてもさめてものゝ人をとこひとあいにねてもさめてもおもひぞ」〔古今〕ムね「ねてもさめてもわすれかねつゝ」

かざしのうちなのとふとふのしもほて〔拾玉〕二「ねのづらまどうちもおもに妹ぶさしてねてもさめてもおもふこゝろのなみ」

ねさむる 〔堀三〕春仲「寝覚の夜半」「うちふさでやひおのさえ中くにねざめさびしよるのかなり」

ねさう 年星 星ヲ祭ルコト その年の人に代りてまつらせ給ふもの

〔かげろふ〕六「かのねがへしまうすにせかひとつのにやどりてねさうなど」〔後撰〕雑一 年星なども女の禮拝のかみにたゞかりて

わくれば〔拾芥抄〕本命屬星子年人貪狼星丑亥年人巨門星寅戌年人祿存星卯酉年人文曲星辰申年人廉貞星巳未年人武曲星午年人破軍星

ねさうぞく 〔国ユヅリ〕中十二 女のあまのねさうぞくもたえゞしてねさうぞくなどしてまつるなり

ねざし 〔後撰〕恋三「子代のせんとおもひきてし姫松のねざしとめてし宿のまゝ」〔明石〕北君のこゝろ

松の根ざしありける〔古今〕恋二「ねざしあらばやがてめのまへにねざしてそのあへしのねざしのあやかる」〔拾〕ものの頃 たちよらものもと

〔夏のさきなもの〕恋ぶさぞの松もまくあさみねざしあやめ草〔後撰〕八廿三「いつしかとまちしのねざしのあやめぐさかよはぬすゑのまつものを」〔とりかへ〕十「るまくのねざしの」

めのゆうりねざしあやめ草〔源〕かぐつのねぎしもまくねざし〔とりかへ〕十二「山ぶつのゆきおれに松ひしたつそのねざし」

かんざちめよりもさくめくのねざしはやしとうかが

たのはうこゝろねん

ねざめ 〔後撰〕恋三 よみ人しらず「ゆめぢにもやどかる人のあらませばねざめにつゆもはらはましや」〔万葉〕六 哭 寝覚の

ねざめのよきぞ〔源〕廿八 ねざめのことちひにも〔うつほ〕七 よるへねざめのねざめかなにものへ

ねよりのねざめあくる夜をかひとりなほかぐ〔狭〕二下七 ねざめなをかくる人あるよしとうちおもひかくつまき〔東遊〕十一 いとかくつまき

あへどまるまるゝなくて〔拾遺〕恋二「さよふけてねざめのまどにいかにせんあかつきをこそ待つつらけれ」〔拾遺〕恋三 よみ人しらず

「よるとてもねざめのほどの夜半ならば人づてにこそきくべかりけれ」

ねざめ 〔字治拾〕十八「さかりはねざめまことえてうえね」

ねぎ 祢宜 〔狭〕二下卅八「かゝることてねぎとおはしき人ありて」〔千載〕神祇「ねぎのまもりにて待りけると おもふ」

社のねぎまうとひらんと申けるに〔枕〕三「ねぎとやらるるにてねぞるがやもめの」

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』　請求記号 837-79

ガラス使用

ねぎらふ 神功紀 十六 慰勞其王 雄略紀 十四 勞軍 繼體紀 廿九 和解

ねぎごと 古今 ハイカイ「ねぎごとをさのみきゝけんやしろこそはてはなげきの杜となるらめ」 吹葉 廿七「ねぎごとをきゝすてずして神のひき あひそ 白氏文集 下十六 大かたの人のねぎごとはよもきゝあへじかし とこなつ 大神にこひのみの人のねぎごとにたがふことなきかみのひき 後拾遺 廿 ちはやぶる神のみまへにねぎごとよ おほかたの人のねぎごとを 新撰六帖「いかにせんかみのみまへにねぎごとをきこえあぐればよをばいのるらん」

ねめつけて 治遺 九 仏師が此人の書やきたるあをまのちゑあをぎたらんやふとてねめつけて帰りにけるのが

ねめつくる 著聞 十五 ねめつくるさまいかにもおそろし

ねみだれがみ 寢亂髮

ねもころ くるしき 上五 うちやまみるひとつねなくにさきてねどろみゆるがらくまく

ねひやう いやしき 卒九段 女人をまづめてねひやうげなり 男のうちをよまぬなり 今やさまじき雲の上の月をとろにまでもちのしぬるる。一時をはしにさきてひとつふくと いふをもいふよそちたどるかのかな 拾遺集 上十四 夜半月「ねひとる [illegible]

ねまつり 落窪 三 皆人まつ嬉しまつりにて

ねび ゆふがほ 十 ちとさかきなどねびくんどきけば よもぎふ 九 ひとといふあまいふれねびくんどさまし 御ゆふかほ 廿一 さればよりねび世中のことあつてもものおぼえめす人をを 玉かづら 卅 きこゆるにねびまさりのまへ 玉かづら 七 さまのひかるをびよせよりねびほとけぬいふかずとくのひつあまくに あかつひ 九 いとよまへのなかなりにねびゆくへのくちゝちるを さく 皆上 二 たくちもいときよげにねびまさりたるのを 若菜 四 さまをたびくらうねびまさりのひめぎみ 竹 廿三 女房も見けのかたよりねびまさりのくりいとかしこく 藤袴 上 六 大将ねびめてゆくすゑにまうまどてまうべき 楼ノ上 下 三十八 かへの御の人もかきそをとしとねびらうずとかへりて 宿木 上 六 大将ねびめてのくすゑに あさきまをたくて とも 後人にもくあてあててたりし あさまるにてめでたしのとしもゆかしくまさる

ねびまと うつほ 五 ねびまとてにかへきかたもまさら自鼻をやまぬあさやかなるあさう。月上

ねびとと あつは 廿三 うのさとねびまとみのたもくしかたくまをやさ人もきこぬととねびくまさびもの あけまき 十四 ねびくぬまへいとおやさへくたえがたくあのひきどののそれど こころみ 上三十五 いとよくねび

ねざめのこころ くさる中にねざめのこころもとりとひけむ

ねざや 。神樂前ましき根のねぞうてえねばをとまう根をとれる根にてきまるをあこし 古 衣三 よもぎ人 あさきよ「ねこしくいえるさまをおもりのかのねざめのもちうのふるにとりてかもや 渚水 雜一 堀川太政大臣「人よりもまいぶるねざめのこころとくさのかさる 三条院御言太

ねざす 夜ざめの衣もちほひかもひもおかいへあさねのちかる 泊水 雑一 堀川右大臣「人よりもちゃれねさめもねもこゝろもの

ねざるき 松 公に 伊もき雀の子のねざるえまうわたどりくる

ねずみ 吾妻鏡 延喜 「よきまのずんのくちのあるねざめやさしく出ぐきそうもあるらし 績紀 廿八 二年十一月壬申 美作掾正六位上恩智神主廣人獻白鼠 古事記 上 廿七 以火廻燒其野 於是不知所出之間鼠來云内者富良々々外者須々夫々

ねまぐさ ノワキ 王五 ねをろしとおひあらしのひろろみどりのねまぐさてもえぞさとたどえるひそる

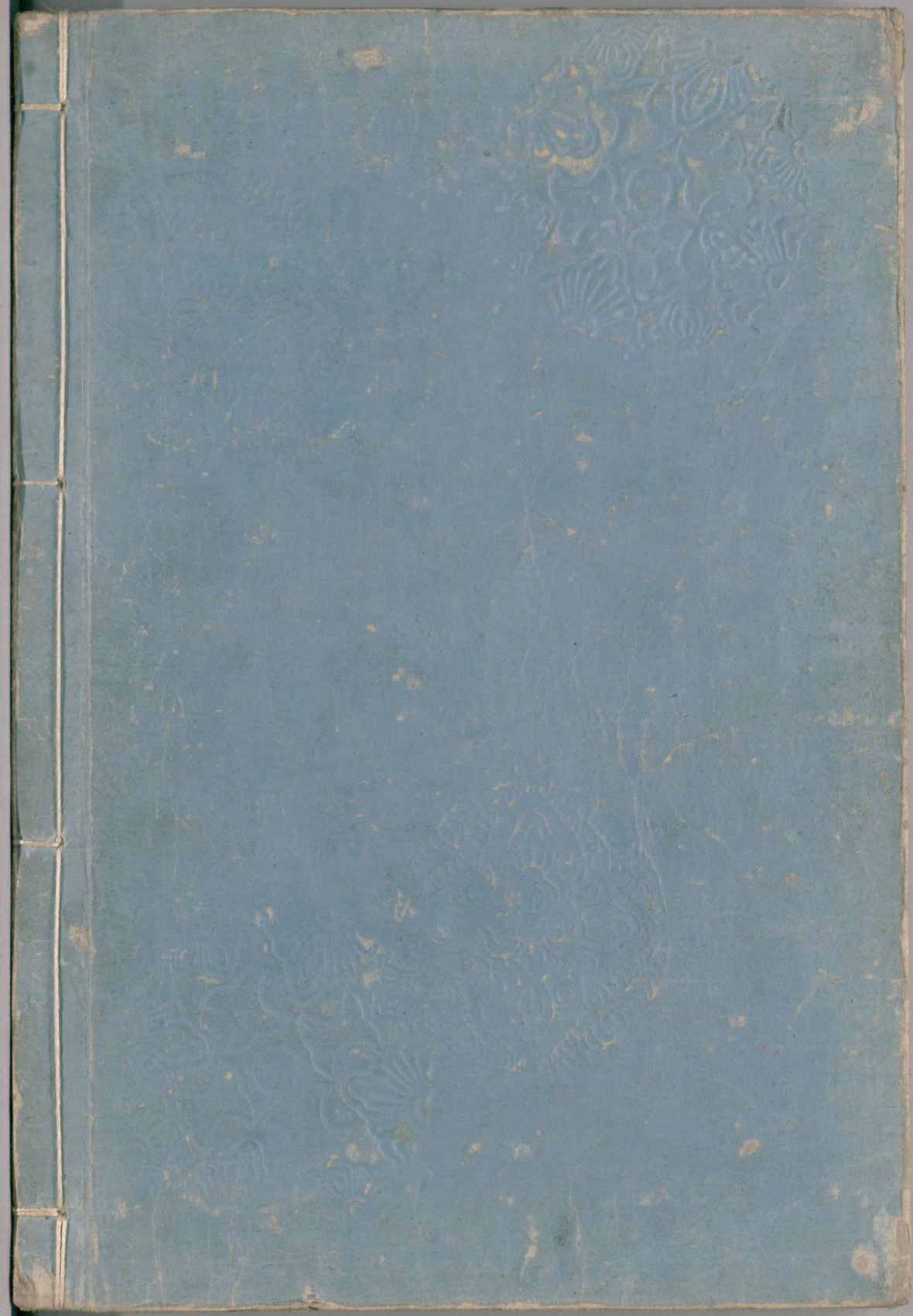
ねざめがひ カゲ 下 廿七 ちひさきようも世にありつねまきれたひのおよすぐるあくるをなとらりたるてとにたどりやうにてらあまへころつくりひらなりときけそ

雅言集覧巻之八終

837
13
79

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79

ガラス使用